ＦＤ活動報告書

第 18 号（2022 年度）

関西大学大学院会計研究科

（会計専門職大学院）

関西大学大学院会計研究科

教務・ＦＤ委員会

2023 年 3 月

目　　次

はじめに　1

Ⅰ　授業評価アンケートの実施及びフィードバック方法
（1）対象科目　……　2
（2）実施方法　……　2
（3）分析方法　……　2
（4）フィードバック方法……　2
（5）対象科目リスト……　3

Ⅱ　2022 年度授業評価アンケートフォーム……　7

Ⅲ　2022 年度授業評価アンケート結果概要
（1）2022 年度授業評価アンケート（春学期）結果概要……　11
（2）2022 年度授業評価アンケート（秋学期）結果概要……　45
（3）2022 年度授業評価アンケート総括……　87

Ⅳ　組織的な研修等　……　91

はじめに

関西大学大学院会計研究科は、創設からこれまで、教育体制、カリキュラムおよび教育内容・方法など常に研究科として見直し、改善を試みてきた。また、個々の教員においても、それぞれが自己研鑽を繰り返し、最善の教育を目指して取り組んできた。このような取組みを組織的に行っているのが、FD(Faculty Development)活動である。そして、このFD活動を推進してきたのが教務・FD委員会およびその下部組織としての専攻分野別教務・FD委員会である。このFD活動報告書は、FD活動の一環として作成しており、本研究科における会計専門職教育を継続的に進化・発展させるうえで大きな役割を果たしている。

本研究科では、このFD活動によって、教員の教育能力および教育の質を高め、教育効果を向上せしめるべく、不断の努力を行っている。教育効果は、単に教員がよりよいと思う教育内容を、教員がよりよいと思う方法で提供するように策を講じるだけでは、改善されない。すなわち、提供される教育への学生の反応を認識しつつ、教育内容やその方法を調整していくことで、より効果的な教育が提供できるようになると考えられる。そのため、本研究科では、設立当初より、学生による授業評価アンケートを実施してきており、この授業評価アンケートの結果は、FD活動の大きな柱の一つとなっている。

本研究科の授業評価の特徴は、①学生自身による自己評価と学生による担当者の授業評価という一般的事項はもれなく含んでいること、②学生による授業評価の結果に対しては担当教員による分析と授業改善の試みを記述させること、③科目系列の取りまとめ役が、②による複数科目を比較可能な形で自己評価していること、④以上の結果を、教授会及びFD委員会での議論の材料としていること、⑤そして授業評価の結果と分析等を本研究科のホームページにて公開していること、が挙げられる。

FD活動報告書は、上記の学生による授業評価アンケートの結果とそれに対する教員の認識と今後の改善案を中心にして、本研究科が行ったFD活動をまとめたものである。FD活動報告書は、これまで第1号から第17号まで作成され、本書は2022年度のFD活動をまとめた第18号である。本研究科はこれまで3度の分野別認証評価を受けたが、評価基準のすべてを満たしていると評価され、「認定会計大学院」の称号を得ている。このFD活動報告書は、本研究科の自己点検・評価報告書と合わせて、評価を受けるにあたっての資料として提出されている。なお、2023年度は4度目の分野別認証評価を受審する予定である。

我々は、今後もこのFD活動を通じて、「世界水準で通用する、理論と実務に習熟した会計専門職業人」を養成すべく、会計専門職教育を継続的に充実・発展させていかなければならない。

今後も、FD活動を継続して行い、FD報告書として公表していくことによって、本研究科の教育が向上していくであろうと確信している。

2023年3月

会計研究科長　三島　徹也

Ⅰ．授業評価アンケートの実施及びフィードバック方法

（1）対象科目

本報告書に掲載した授業評価アンケートは、2022 年度の春学期と秋学期に開講された会計研究科専任教員が担当するすべての授業科目を対象としている（次頁参照）。

（2）実施方法

本研究科では、授業評価アンケートを各講義の終了時に実施している。

通年開講の論文指導・修士論文を除き、すべての科目において、15 回の講義が実施される。

授業評価アンケートは 2020 年度からオンライン方式（無記名）で実施しており、第 14 回目または第 15 回目の講義で QR コード付のアンケート依頼用紙を授業担当者が配付している。

オンライン方式で回答した内容はシステムで集計され、今後の授業内容および方法の改善のため、各授業担当者にフィードバックされる。

授業評価アンケートで使用された質問状は、後ページに掲載している。

（3）分析方法

専任教員が担当する授業科目及び総括については、原則として担当教員が分析している。

（4）フィードバック方法

各担当者が前年度の授業評価アンケートとの比較を行い、授業改善が有効であったか否かを検証した。

(5)対象科目リスト(索引)

類別		授業科目	単位	配当年次	系統	開講学期	頁
導入科目群	選択科目	中級商業簿記	2	1	財務会計	春・秋	11・45
		中級工業簿記	2	1	管理会計	春・秋	12・46
基本科目群	必修科目	上級簿記論	2	1	財務会計	春前・秋	13・14・47
		上級財務会計論	2	1	財務会計	春後・秋	15・16・48
		上級原価計算論	2	1	管理会計	春前・秋	17・18・49
		上級管理会計論	2	1	管理会計	春後・秋	19・50
		監査制度論	2	1	監　査	春後・秋	20・21・51
		監査基準論	2	1	監　査	春・秋	22・23・52
		企業法	2	1	法律・税務	春前・秋	24・25・53
		会計専門職業倫理	2	2	監　査	春・秋	26・27・54
発展科目群	選択必修科目	会計基準論	2	1	財務会計	春	28
		会計制度論	2	1	財務会計	春	29
		財表作成簿記論	2	1	財務会計	秋	55
		戦略管理会計論	2	1	管理会計	秋	
		企業分析論	2	1	管理会計	秋	56
		監査実施論	2	1	監　査	秋	
		監査報告論	2	1	監　査	秋	57
		商取引法	2	1	法律・税務	春	30
		会社法	2	1	法律・税務	秋	58
		民法	2	1	法律・税務	秋	
		法人税法	2	1	法律・税務	春	31
		上級税務会計論	2	1	法律・税務	春	32
		経営学理論	2	1	経営・経済	春	
		経営戦略・組織論	2	1	経営・経済	秋	
		統計学	2	1	経営・経済	秋	
		ミクロ経済学	2	1	経営・経済	秋	
		特殊講義(コンサルティング実務)	2	1	管理会計	秋	
		特殊講義(税務と会計)	2	1	横断科目	秋	59
		特殊講義(会計専門職業数学)	2	1	横断科目	春	
		特殊講義(公会計論)	2	1	財務会計	秋	60
		特殊講義(BATIC演習)	2	1	財務会計	秋	
		特殊講義(IFRS演習)	2	1	財務会計	秋	
		特殊講義(自治体マネジメントと監査)＜公監査論＞	2	2	監査	春	33
		特殊講義(民法(債権))	2	2	法律・税務	春	
		特殊講義(資本市場論)	2	2	経営・経済	春	34
		特殊講義(貸借対照表論)	2	1	財務会計	秋	61
		特殊講義(不正摘発監査論)	2	2	監　査	春	35
		特殊講義(国際監査事例研究)	2	2	監　査	秋	
		特殊講義(起業・株式公開事例研究)	2	2	経営・経済	春	
		特殊講義(会計検査制度論)	2	1	監　査	秋	
		特殊講義(企業情報の読み方と使い方)	2	1	横断科目	秋後	62
		特殊講義(新規ビジネスの立上げと成長戦略)	2	1	横断科目	秋後	
		特殊講義(企業マネジメントと会計)	2	1	横断科目	春	36
		特殊講義(連結会計実務)	2	1	財務会計	秋	63
		特殊講義(実践デジタル監査演習・ICAEA JAPAN寄附講座)	2	2	監　査	秋	

類別		授業科目	単位	配当年次	系統	開講学期	頁
発展科目群	選択必修科目	英文会計論	2	2	財務会計	秋	
		IFRS会計論	2	2	財務会計	春	37
		組織再編会計論	2	2	財務会計	秋	
		コストマネジメント論	2	2	管理会計	秋	
		企業価値マネジメント論	2	2	管理会計	秋	64
		ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ･ｺﾝﾄﾛｰﾙ･ｼｽﾃﾑ論	2	2	管理会計	春	
		内部監査論	2	2	監　査	春	
		国際監査基準論	2	2	監　査	春	
		上級会社法	2	2	法律・税務	春	38
		租税法理論	2	2	法律・税務	秋	65
		租税法会計論	2	2	法律・税務	秋	66
		国際税務論	2	2	法律・税務	春	39
		コーポレート･ファイナンス論	2	2	経営・経済	秋	67
		インベストメント論	2	2	経営・経済	春	40
		マクロ経済学	2	2	経営・経済	春	
応用・実践科目群	選択必修科目	基本会計プログラム演習	2	1	財務会計	秋	68・69
		会計事例研究	2	1	財務会計	春	41
		会社経理実務	2	1	財務会計	秋	70
		管理会計事例研究	2	1	管理会計	秋	
		監査事例研究	2	1	監　査	秋	71
		基本監査プログラム演習	2	1	監　査	秋	72
		アカデミック・ソリューション	2	1	個別演習科目	通隔	73–76
		論文指導(導入)	2	1	個別演習科目	春	42
		論文指導(基礎)	2	1	個別演習科目	秋	77
		実践会計プログラム演習	2	2	財務会計	秋	78
		IFRS事例研究	2	2	財務会計	春	
		ディスクロージャー実務	2	2	財務会計	秋	79
		国際管理会計事例研究	2	2	管理会計	秋	
		実践監査プログラム演習	2	2	監　査	不開講	
		企業法判例演習	2	2	法律・税務	秋	
		税務事例研究	2	2	法律・税務	春	
		企業実践コミュニケーション	2	2	経営・経済	春	
		プロフェッショナル・ソリューション	2	2	個別演習科目	通隔	80–82
		論文指導(実践)	4	2	個別演習科目	通年	83・84
総　括							87

※掲載対象科目は、2022年度開講の会計研究科専任教員担当科目とする。

Ⅱ. 2022 年度授業評価アンケートフォーム

2022 年度　関西大学会計専門職大学院 授業評価アンケート

会計研究科教務・FD 委員会

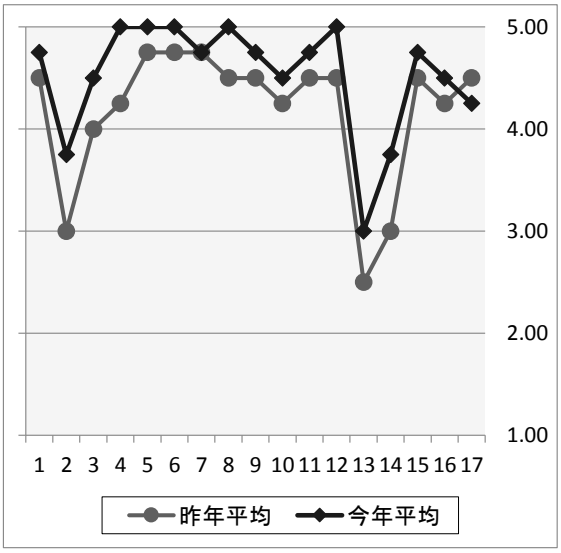
NO	質問内容	回答
1	授業内容は、講義要項、授業計画に示したものに沿った内容でしたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
2	この授業の進度はどうでしたか。 1．かなり遅い　2．遅い　3．ちょうどよい　4．早い　5．かなり早い	
3	この授業は教員によってよく準備されていましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
4	学生の理解を深めよう、能力を高めようとの熱意・努力が感じられましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
5	この授業での教員の話し方や声の大きさ、説明の仕方は適切でしたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
6	教科書・配布資料の利用は適切でしたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
7	ホワイト・ボードや OHP、パソコン等の機材の使い方は適切でしたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
8	教員は、学生からの質問に的確に対応しましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
9	宿題および小テストの内容・回数は、講義内容を理解する上で効果的でしたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
10	この授業のクラスの規模は適切でしたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
11	全体としてこの授業を受講して満足しましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
12	この授業への出席状況はどうでしたか。 1．３０%未満　2．　３０%以上　3．　５０%以上　4．７０%以上　5．９０%以上	
13	この授業についての予習を、毎回どれくらいしましたか。 1．０時間　2．　３０分程度　3．　１時間程度　4．1 時間 30 分程度　5．２時間以上	
14	この授業についての復習を、毎回どれくらいしましたか。 1．０時間　2．　３０分程度　3．　１時間程度　4．1 時間 30 分程度　5．２時間以上	
15	この授業に触発されてさらに深く学習したいと思いましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
16	この授業を通じて、職業会計人に必要な知識が深まった、能力が高まったと感じましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	
17	あなたは全体としてこの授業を受講して理解できましたか。 1．全くそう思わない　2．そう思わない　3．どちらともいえない　4．そう思う　5．強くそう思う	

— 以上 —

Ⅲ-(1). 2022 年度授業評価アンケート(春学期)結果概要

科　　目	中級商業簿記(A)		
配当年次	1	開講時限	春金5
受講者数	4	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.75	5	5	4
2	3.00	3.75	3	5	3
3	4.00	4.50	4・5	5	4
4	4.25	5.00	5	5	5
5	4.75	5.00	5	5	5
6	4.75	5.00	5	5	5
7	4.75	4.75	5	5	4
8	4.50	5.00	5	5	5
9	4.50	4.75	5	5	4
10	4.25	4.50	4・5	5	4
11	4.50	4.75	5	5	4
12	4.50	5.00	5	5	5
13	2.50	3.00	3	4	2
14	3.00	3.75	3	5	3
15	4.50	4.75	5	5	4
16	4.25	4.50	4・5	5	4
17	4.50	4.25	4	5	4
回答者数	4	4			



受講生の傾向

受講生は1年次生で、簿記の習熟度は一人ずつ大きく異なる状況であったが、全員の学習意欲は高く、積極的に課題を進めている様子であった。昨年度とは異なり、今年度は授業の全てを対面授業で行うことができたため、受講生は分からない問題等を気軽に質問することができ、また、受講生同士での意見交換や教え合いも積極的に行われるなど、全体として良い雰囲気であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

例年、この授業では、問題演習を中心として講義を展開し、受講生各自の習熟度に応じて質問対応と個別指導を行うことを重視している。昨年度は、授業の大半が遠隔授業であったため、講義展開に大きな制約を受けた。しかし、今年度は、授業の全てを対面授業で行うことができたため、例年どおり、受講生が課題に取り組んでいる様子を目視して質問対応と個別指導を行い、全員の理解を一人ずつ確認して回ることができた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

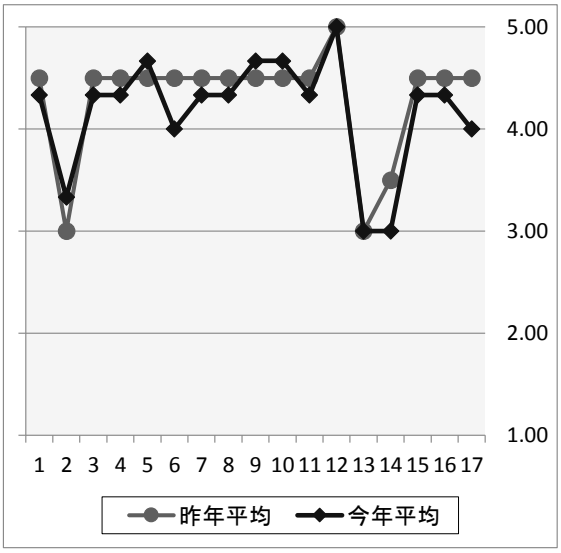
昨年度の遠隔授業(Zoom)と同様に、教員側の理解させたいという気持ちと、受講生側の理解したいという気持ちが噛み合わず、空回りしているように感じた。この講義科目の趣旨や特性に鑑み、遠隔授業よりも対面授業の方が受講生のニーズに合致している。今年度は、数回ではあるが対面授業を行うことができ、受講生とコミュニケーションをとることができたのは幸いであった。次年度は、例年どおり、対面授業によることとしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

科目の特性上、この講義に遠隔授業は馴染まず、対面授業の方が教育効果が高い。また、対面授業の方が受講生のニーズに合致している。今年度のアンケート結果は概ね高いポイントを得ており、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

科　　目	中級工業簿記(A)		
配当年次	1	開講時限	春水1
受講者数	5	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.33	4	5	4
2	3.00	3.33	3	4	3
3	4.50	4.33	4	5	4
4	4.50	4.33	4	5	4
5	4.50	4.67	5	5	4
6	4.50	4.00	3・4・5	5	3
7	4.50	4.33	4	5	4
8	4.50	4.33	4	5	4
9	4.50	4.67	5	5	4
10	4.50	4.67	5	5	4
11	4.50	4.33	4	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	3.00	3.00	2・3・4	4	2
14	3.50	3.00	3	3	3
15	4.50	4.33	4	5	4
16	4.50	4.33	4	5	4
17	4.50	4.00	3・4・5	5	3
回答者数	2	3			



受講生の傾向

真面目に毎回復習してくる生徒とそうでない生徒がはっきり分かれていた。
復習してきた生徒は、期末テストも問題なかったが、復習してこなかった生徒は単位を落とした。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

該当なし(担任者変更)

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

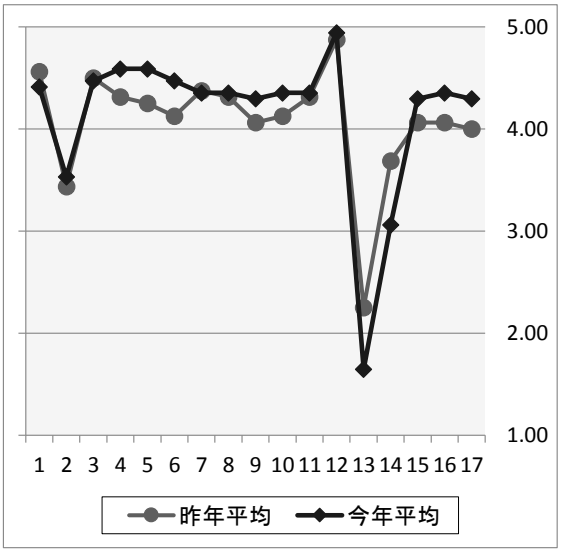
該当なし(担任者変更)

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

毎回復習テストを実施し、次回までに勉強してくることを促したが、復習してこない生徒がいるので、講義時間内で演習する時間を増やして、知識の定着させるようにします。

科　　目	上級簿記論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前月2・木3
受講者数	29	回答者数	17

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.56	4.41	4	5	4
2	3.44	3.53	4	4	3
3	4.50	4.47	4	5	4
4	4.31	4.59	5	5	4
5	4.25	4.59	5	5	3
6	4.13	4.47	5	5	3
7	4.38	4.35	4	5	4
8	4.31	4.35	5	5	3
9	4.06	4.29	4	5	3
10	4.13	4.35	4	5	4
11	4.31	4.35	5	5	2
12	4.88	4.94	5	5	4
13	2.25	1.65	1	4	1
14	3.69	3.06	3	5	1
15	4.06	4.29	4	5	4
16	4.06	4.35	4	5	4
17	4.00	4.29	4	5	3
回答者数	16	17			



受講生の傾向

A1クラスの受講生は、ほぼ1年次生で構成されている。簿記の習熟度が高い受講生が多くいる一方、習熟度が低く基礎力に欠ける受講生も多くいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は、授業の大半が遠隔授業であったため、講義展開に大きな制約を受けた。また、受講生も、この講義科目の特性として遠隔授業に満足していない様子であった。しかし、今年度は、授業の全てを対面授業で行うことができたため、受講生が課題に取り組んでいる様子を目視して個別に指導し、全員の理解を一人ずつ確認して回ることができた。ただ、受講者数が多く、少人数クラス編成の利点が薄れていた感じがあり、受講生にとっては質問しにくい状況であったかもしれない。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

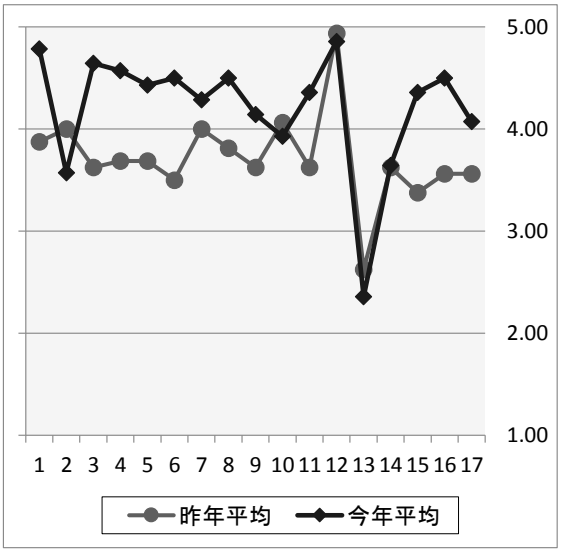
授業評価アンケートの結果は、昨年度(遠隔授業)よりも全体的に下がっている。成績でみると、今年度の成績は、昨年度と比べて芳しくなく、前々年度(対面授業)と比べても芳しくない。教育効果の観点からすれば、この講義科目の特性として、遠隔授業よりも対面授業の方がよいであろう。実際、上級レベルの簿記のテストは、問題の特性上、オンラインでは実力を発揮することが難しく、受講生にヒアリングしても同じ意見であり、対面で受けることを希望する声が多い。次年度は、例年どおり、対面授業によることとしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

科目の特性上、この講義に遠隔授業は馴染まず、対面授業の方が教育効果が高い。また、対面授業の方が受講生のニーズに合致している。ただ、簿記の基礎力に欠ける受講生が多く、日商2級の学力に達していない状態で日商1級の内容を学修することは難しいであろう。日商2級の学力に少しでも不安がある受講生には、「中級商業簿記」の履修を促すことにしたい。

科　　目	上級簿記論(A2)		
配当年次	1	開講時限	春前月3・木2
受講者数	30	回答者数	14

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	3.88	4.79	5	5	4
2	4.00	3.57	3	5	3
3	3.63	4.64	5	5	4
4	3.69	4.57	5	5	4
5	3.69	4.43	5	5	3
6	3.50	4.50	5	5	3
7	4.00	4.29	4・5	5	3
8	3.81	4.50	4・5	5	4
9	3.63	4.14	5	5	2
10	4.06	3.93	5	5	2
11	3.63	4.36	5	5	3
12	4.94	4.86	5	5	4
13	2.63	2.36	2	5	1
14	3.63	3.64	5	5	2
15	3.38	4.36	5	5	3
16	3.56	4.50	4・5	5	4
17	3.56	4.07	5	5	3
回答者数	16	14			



受講生の傾向

A2クラスの受講生は、1年次生と2年次生以上で構成されている。簿記の習熟度が高い受講生が多くいる一方、習熟度が低く基礎力に欠ける受講生も多くいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は、授業の大半が遠隔授業であったため、講義展開に大きな制約を受けた。また、受講生も、この講義科目の特性として遠隔授業に満足していない様子であった。しかし、今年度は、授業の全てを対面授業で行うことができたため、受講生が課題に取り組んでいる様子を目視して個別に指導し、全員の理解を一人ずつ確認して回ることができた。ただ、受講者数が多く、少人数クラス編成の利点が薄れていた感じがあり、受講生にとっては質問しにくい状況であったかもしれない。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

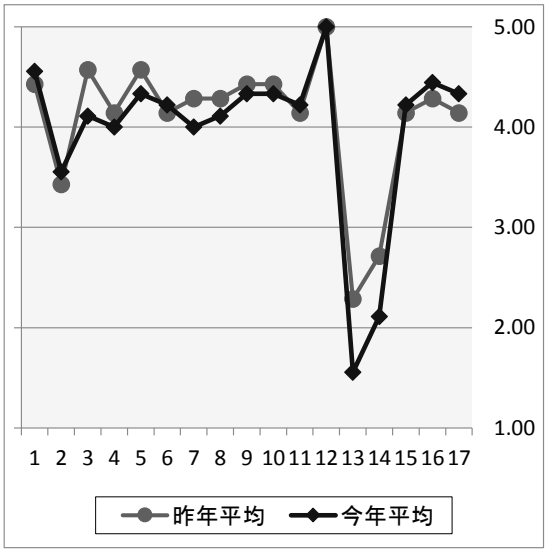
授業評価アンケートの結果は、昨年度(遠隔授業)よりも全体的に下がっている。成績でみると、今年度の成績は、昨年度と比べて芳しくなく、前々年度(対面授業)と比べても芳しくない。教育効果の観点からすれば、この講義科目の特性として、遠隔授業よりも対面授業の方がよいであろう。実際、上級レベルの簿記のテストは、問題の特性上、オンラインでは実力を発揮することが難しく、受講生にヒアリングしても同じ意見であり、対面で受けることを希望する声が多い。次年度は、例年どおり、対面授業によることとしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

科目の特性上、この講義に遠隔授業は馴染まず、対面授業の方が教育効果が高い。また、対面授業の方が受講生のニーズに合致している。ただ、簿記の基礎力に欠ける受講生が多く、日商2級の学力に達していない状態で日商1級の内容を学修することは難しいであろう。日商2級の学力に少しでも不安がある受講生には、「中級商業簿記」の履修を促すことにしたい。

科　　目	上級財務会計論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後月3・木2
受講者数	26	回答者数	9

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.43	4.56	5	5	4
2	3.43	3.56	3	5	3
3	4.57	4.11	5	5	2
4	4.14	4.00	4	5	2
5	4.57	4.33	5	5	2
6	4.14	4.22	5	5	2
7	4.29	4.00	4	5	2
8	4.29	4.11	4	5	3
9	4.43	4.33	4・5	5	3
10	4.43	4.33	4	5	4
11	4.14	4.22	5	5	3
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.29	1.56	1	5	1
14	2.71	2.11	2	5	1
15	4.14	4.22	5	5	3
16	4.29	4.44	5	5	3
17	4.14	4.33	5	5	3
回答者数	7	9			



受講生の傾向

A1クラスA2クラスの2クラス開講だった。大学が授業動画配信システムにパノプトを採用したこともあり、このクラスは月曜3時限がC507、木曜2時限がC506教室での開講であり、教室の規模の大きいC507で後ろに座る傾向にあり、教卓から受講生が物理的に距離が遠くなるためか、授業での緊張感が下がっているように感じられた。半数以上の受講生が2回ほど欠席している状況であり、この点も教室での緊張感が下がっている要因に感じる。授業時間確保のため、小テストについて関大LMSで実施したことも要因と思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

2クラス開講であることから、小テストは2クラス共通問題で関大LMSで実施し、中間試験については合同クラスで教室での実施、講義資料は関大LMSで事前配布した。また、後半は日本基準とIFRSとの比較を随時紹介しつつ、全体の比較が可能となるように説明を行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

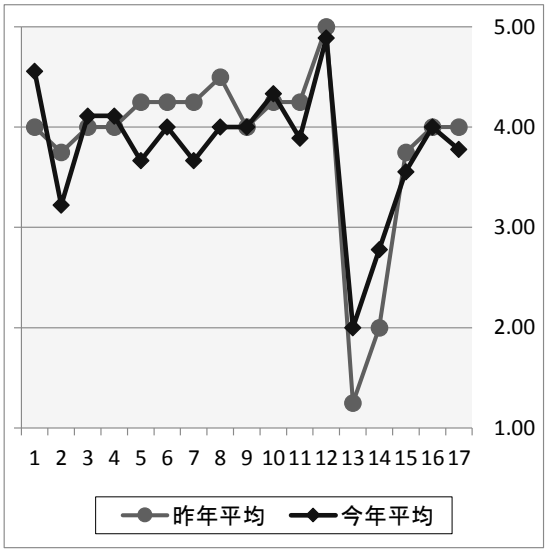
評価結果が全回オンライン授業であった昨年度から一昨年度の対面授業の結果に改善していることを踏まえると、講義内容や実施方法の方向性は変化させる必要がないように思われる。追加的にオンライン授業で習得した手法を追加することで、資料の事前配布及び事後の追加配布などを行い、受講生の学習意欲がより高くなるよう、講義内容の理解のポイントをわかりやすく明示し、より深く正確な理解を促すような講義展開を行うつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

教室の件は、教員にとってコントロール不能であるので、その影響は所与とし、小テストを関大LMSで実施するとしても、授業中の受講態度に緊張感が維持できるような小テストの内容と実施に工夫するつもりである。また、比較をしながらの解説は説明対象の理解がしづらく要点がボケるようであるので、授業での比較の要素を減らし、比較は別途行うように授業内容を再構築するつもりである。

科　　目	上級財務会計論(A2)		
配当年次	1	開講時限	春後月2・木3
受講者数	21	回答者数	9

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.00	4.56	5	5	4
2	3.75	3.22	3	4	2
3	4.00	4.11	4	5	3
4	4.00	4.11	4	5	3
5	4.25	3.67	4	5	2
6	4.25	4.00	4	4	4
7	4.25	3.67	3・4	5	3
8	4.50	4.00	4	5	3
9	4.00	4.00	4	5	3
10	4.25	4.33	4	5	4
11	4.25	3.89	4	4	3
12	5.00	4.89	5	5	4
13	1.25	2.00	2	3	1
14	2.00	2.78	2・3	5	2
15	3.75	3.56	4	4	3
16	4.00	4.00	4	5	3
17	4.00	3.78	4	5	3
回答者数	4	9			



受講生の傾向

A1クラス・A2クラスの2クラス開講だった。大学が授業動画配信システムにパノプトを採用したこともあり、このクラスは月曜2時限がC506、木曜3時限がC507教室での開講であり、教室の規模の大きいC507で後ろに座る傾向にあり、教卓から受講生が物理的に距離が遠くなるためか、授業での緊張感が下がっているように感じられた。半数以上の受講生が2回ほど欠席している状況であり、この点も教室での緊張感が下がっている要因に感じる。授業時間確保のため、小テストについて関大LMSで実施したことも要因と思われる。A1クラスより予習・復習の時間も短く小テストの結果もよくない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

2クラス開講であることから、小テストは2クラス共通問題で関大LMSで実施し、中間試験については合同クラスで教室での実施、講義資料は関大LMSで事前配布した。また、後半は日本基準とIFRSとの比較を随時紹介しつつ、全体の比較が可能となるように説明を行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

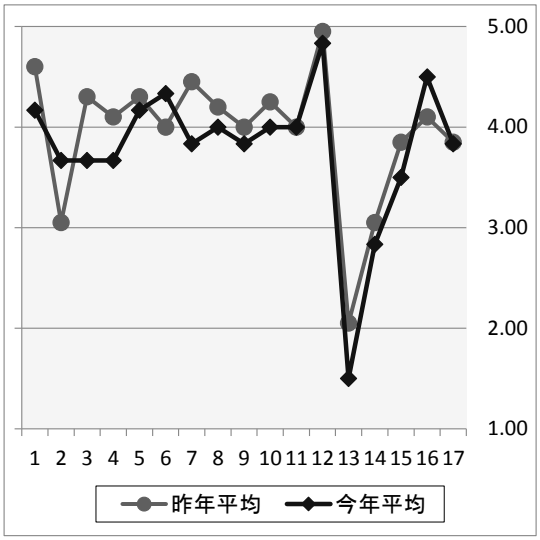
以下は、昨年度A1クラスにおける「今後の対応」を踏まえた記述である。評価結果が全回オンライン授業であった昨年度から一昨年度の対面授業の結果に改善していることを踏まえると、講義内容や実施方法の方向性は変化させる必要がないように思われる。追加的にオンライン授業で習得した手法を追加することで、資料の事前配布及び事後の追加配布などを行い、受講生の学習意欲がより高くなるよう、講義内容の理解のポイントをわかりやすく明示し、より深く正確な理解を促すような講義展開を行うつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

教室の件は、教員にとってコントロール不能であるので、その影響は所与とし、小テストを関大LMSで実施するとしても、授業中の受講態度に緊張感を維持し、予習・復習をしっかりできるような小テストの内容と実施に工夫するつもりである。また、比較をしながらの解説は説明対象の理解がしづらく要点がボケるようであるので、授業での比較の要素を減らし、比較は別途行うように授業内容を再構築するつもりである。

科　　目	上級原価計算論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前月3・木2
受講者数	24	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.60	4.17	4	5	4
2	3.05	3.67	4	5	2
3	4.30	3.67	4	5	2
4	4.10	3.67	4	5	2
5	4.30	4.17	4	5	4
6	4.00	4.33	5	5	3
7	4.45	3.83	4	5	2
8	4.20	4.00	4	4	4
9	4.00	3.83	4	4	3
10	4.25	4.00	4	4	4
11	4.00	4.00	4	5	3
12	4.95	4.83	5	5	4
13	2.05	1.50	1	3	1
14	3.05	2.83	1・3	5	1
15	3.85	3.50	4	5	2
16	4.10	4.50	4・5	5	4
17	3.85	3.83	4	5	3
回答者数	20	6			



受講生の傾向

会計士試験受験予定者とそうでない受講生との差が大きいため、試験の難易度調整が難しい。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の対応に記載したとおり教室にて講義及び試験を実施できている。
問題の解き方などを示すためにホワイトボードを積極的に使用している。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

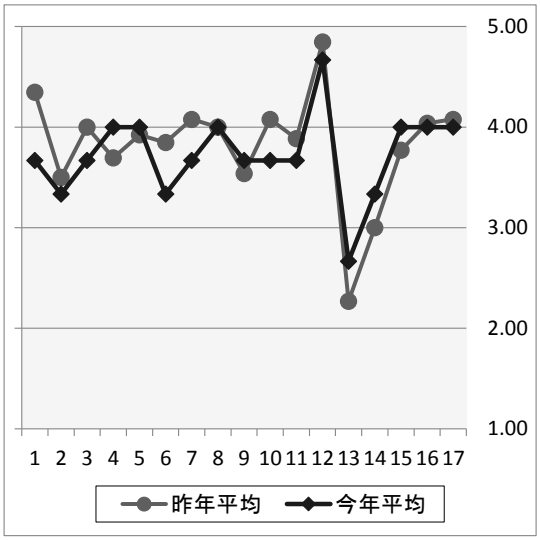
コロナの状況によっては、今後もリモートでの講義となる可能性がある。
しかし、中間試験及び期末試験については、解答方法等についての受講生の混乱を回避する観点及び試験の公平性を担保する観点から可能な限り、教室で試験を実施できるように調整したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

授業前の予習、復習を促し、効果的に学習内容を定着してもらえるような工夫を行いたい。
具体的には、授業の最後に次回までに予習すべき内容と復習をすべき問題などを伝える。

科　　目	上級原価計算論(A2)		
配当年次	1	開講時限	春前月2･木3
受講者数	21	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.35	3.67	4	4	3
2	3.50	3.33	3	4	3
3	4.00	3.67	4	4	3
4	3.69	4.00	4	4	4
5	3.92	4.00	4	4	4
6	3.85	3.33	3	4	3
7	4.08	3.67	4	4	3
8	4.00	4.00	4	4	4
9	3.54	3.67	4	4	3
10	4.08	3.67	4	4	3
11	3.88	3.67	4	4	3
12	4.85	4.67	5	5	4
13	2.27	2.67	1･2･5	5	1
14	3.00	3.33	2･3･5	5	2
15	3.77	4.00	4	4	4
16	4.04	4.00	4	4	4
17	4.08	4.00	4	4	4
回答者数	26	3			



受講生の傾向

会計士試験受験予定者とそうでない受講生との差が大きいため、試験の難易度調整が難しい。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の対応に記載したとおり教室にて講義及び試験を実施できている。
問題の解き方などを示すためにホワイトボードを積極的に使用している。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

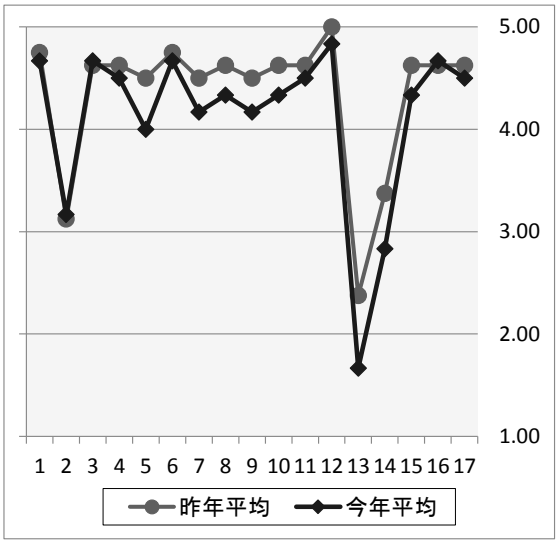
コロナの状況によっては、今後もリモートでの講義となる可能性がある。
しかし、中間試験及び期末試験については、解答方法等についての受講生の混乱を回避する観点及び試験の公平性を担保する観点から可能な限り、教室で試験を実施できるように調整したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

授業前の予習、復習を促し、効果的に学習内容を定着してもらえるような工夫を行いたい。
具体的には、授業の最後に次回までに予習すべき内容と復習をすべき問題などを伝える。

科　　目	上級管理会計論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後月2・木3
受講者数	26	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	4.67	5	5	4
2	3.13	3.17	3	4	3
3	4.63	4.67	5	5	4
4	4.63	4.50	4・5	5	4
5	4.50	4.00	5	5	1
6	4.75	4.67	5	5	4
7	4.50	4.17	4	5	3
8	4.63	4.33	4	5	4
9	4.50	4.17	5	5	3
10	4.63	4.33	4	5	4
11	4.63	4.50	4・5	5	4
12	5.00	4.83	5	5	4
13	2.38	1.67	1	3	1
14	3.38	2.83	3	5	1
15	4.63	4.33	5	5	3
16	4.63	4.67	5	5	3
17	4.63	4.50	4・5	5	4
回答者数	8	6			



受講生の傾向

全体として、まじめに出席していた。ただし、受講生間で学習態度および知識の点においてばらつきが見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の授業評価アンケートでは、多くの項目で評点が増加していた。そのため、本年度も昨年と同様の取り組みを行うように留意した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

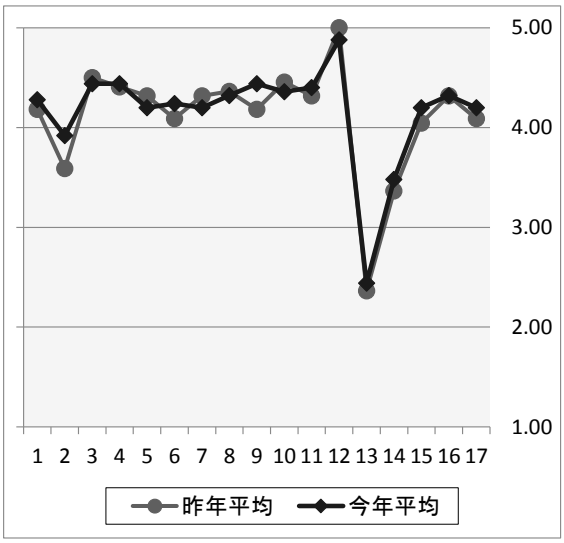
昨年度と比べて、多くの項目で評点が増加した。そのため、本年度の取り組みを継続しながら、細かな改善を積み重ねることが必要だと考えている。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年と同様の取り組みを心掛けていたが、本年度は多くの項目において評点が下がってしまった。そのため、受講生の動向等に注意しながら、改善に取り組むことが必要であると考えている。

科　　目	監査制度論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春後火2・金3
受講者数	28	回答者数	25

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.18	4.28	4	5	3
2	3.59	3.92	4	5	3
3	4.50	4.44	5	5	3
4	4.41	4.44	5	5	3
5	4.32	4.20	5	5	1
6	4.09	4.24	5	5	3
7	4.32	4.20	5	5	2
8	4.36	4.32	5	5	3
9	4.18	4.44	5	5	3
10	4.45	4.36	4	5	3
11	4.32	4.40	5	5	3
12	5.00	4.88	5	5	4
13	2.36	2.44	1	5	1
14	3.36	3.48	3	5	2
15	4.05	4.20	4	5	2
16	4.32	4.32	5	5	3
17	4.09	4.20	4	5	3
回答者数	22	25			



受講生の傾向

基本科目(必修科目)群に属するという関係上、受講生の出席率(項目12)は90%以上と極めて高い出席率であり勉学に対する意欲は非常に高いと解される。

今年度は全回とも対面による講義となったこともあり、講義進度は若干早い(項目2)と評価されてはいるものの、全体的に評価は前年度と同様となっている。機材の使い方(項目7)と質問への対応(項目8)については評価が昨年度より若干低下したものの、配布資料の適切さ(項目6)と小テスト等の効果(項目9)はヨリ高い評価を得ている。

また課題予習(項目13)・復習(項目14)に対する時間も去年とほぼ同様であり、本科目の受講に伴う学習意欲の向上(項目15)、ならびに知識・能力の向上(項目16)の結果に繋がっている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度においても監査基準改訂が行われたため、改訂監査基準及び実務指針を反映した網羅的かつ体系的なパワーポイントによる教材を配布した。また配布資料の最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題に対応するための参考文献を列挙した。さらにこれら配布資料は、講義終了後、関西大学LMSに授業前日までにアップロードし、WEB配信により受講生が予習・復習をできるようにした。

また小テストによる勉学の動機付けについても、例年通り、2回分の授業が終了するごとに理解度を確認する目的と復習を促すために、小テストを授業時間の最初15分程度で実施した。翌週回に小テストの添削後、コメントを付して各自に返却するとともに、添削の際のポイントを解説するとともに優秀答案を氏名を伏せて配布した。

最終的に講義2回→小テスト実施→添削→返却(添削ポイント・講評)を繰り返すことで、各受講生にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるように心懸けた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

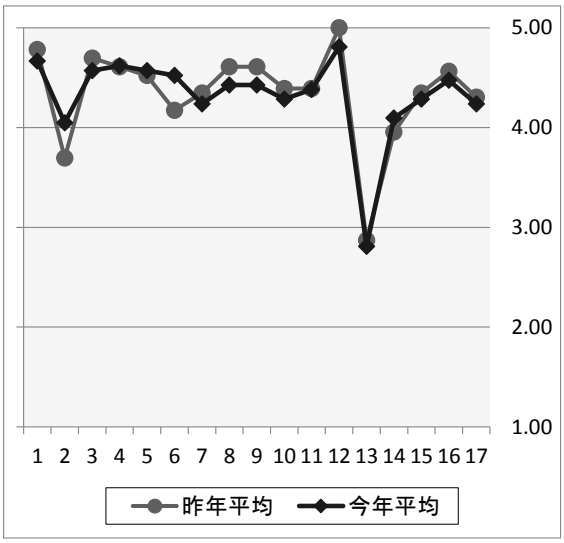
講義終了時に、次に実施する小テストの範囲に言及するとともに、実施可能な復習課題の範囲を明示することで、受講生に復習を促すようにする必要がある。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義終了時に自主的に復習課題の解答を持参し添削を依頼するものや、自発的な質問をするものも出始めたので、これまで通り録画ファイルによる復習とそれに基づく復習課題への対応を促進したい。

科　　目	監査制度論(A2)		
配当年次	1	開講時限	春後火3・金2
受講者数	23	回答者数	21

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.78	4.67	5	5	4
2	3.70	4.05	5	5	3
3	4.70	4.57	5	5	4
4	4.61	4.62	5	5	4
5	4.52	4.57	5	5	4
6	4.17	4.52	5	5	4
7	4.35	4.24	4	5	3
8	4.61	4.43	4	5	4
9	4.61	4.43	4	5	4
10	4.39	4.29	4	5	2
11	4.39	4.38	4・5	5	2
12	5.00	4.81	5	5	4
13	2.87	2.81	2	5	1
14	3.96	4.10	5	5	2
15	4.35	4.29	4	5	2
16	4.57	4.48	5	5	2
17	4.30	4.24	5	5	1
回答者数	23	21			



受講生の傾向

基本科目(必修科目)群に属するという関係上、受講生の出席率(項目12)は90%以上に極めて近い出席率であり勉学に対する意欲は非常に高いと解される。

今年度もA1クラスと並行してA2クラスも開講され、また全面的に対面による講義となったこともあり、講義進度が若干速いという評価が得られているが(項目2)、全体的に評価は昨年度とほぼ同程度の結果となっている。

特に教員側の熱意(項目4)、説明の仕方(項目5)、教科書・配布資料(項目6)の評価が向上し、一方、機材の使い方(項目7)、質問への対応(項目8)、小テスト等の効果(項目9)に対する評価が昨年度より若干低下した。

また課題予習(項目13)・復習(項目14)に対する時間も1時間以上となっており、昨年度と同様の結果が得られている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

A1クラスと同様、今年度においても監査基準改訂が行われたため、改訂監査基準及び実務指針を反映した網羅的かつ体系的なパワーポイントによる教材を配布した。また配布資料の最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題に対応するための参考文献を列挙した。さらにこれら配布資料は、講義終了後、関西大学LMSに授業前日までにアップロードし、WEB配信により受講生が予習・復習をできるようにした。

また小テストによる勉学の動機付けについても、例年通り、2回分の授業が終了するごとに理解度を確認する目的と復習を促すために、小テストを授業時間の最初15分程度で実施した。翌週回に小テストの添削後、コメントを付して各自に返却するとともに、添削の際のポイントを解説するとともに優秀答案を氏名を伏せて配布した。

最終的に講義2回→小テスト実施→添削→返却(添削ポイント・講評)を繰り返すことで、各受講生にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるように心懸けた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

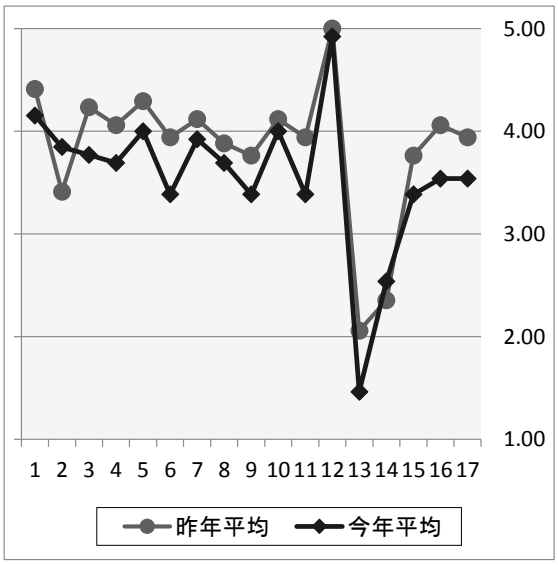
講義終了時に、実施可能な復習課題の範囲を明示し、次に実施する小テストの範囲に言及することで、受講生に復習を促すようにする必要がある。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義終了時に自主的に復習課題の解答を持参し添削を依頼するものや、自発的な質問をするものも出始めたので、これまで通り録画ファイルによる復習とそれに基づく復習課題への対応を促進したい。

科　　目	監査基準論(A1)		
配当年次	1	開講時限	春水2
受講者数	18	回答者数	13

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.41	4.15	4	5	3
2	3.41	3.85	3	5	3
3	4.24	3.77	4	5	2
4	4.06	3.69	4	5	2
5	4.29	4.00	4	5	1
6	3.94	3.38	4	5	1
7	4.12	3.92	4	5	2
8	3.88	3.69	4	5	2
9	3.76	3.38	3	5	2
10	4.12	4.00	4	5	3
11	3.94	3.38	4	5	1
12	5.00	4.92	5	5	4
13	2.06	1.46	1	3	1
14	2.35	2.54	2	5	1
15	3.76	3.38	4	4	1
16	4.06	3.54	4	5	1
17	3.94	3.54	4	5	2
回答者数	17	13			



受講生の傾向

質問No.2「授業スピード」の満足度が、3.41点から3.85点へ上昇している。
質問No.3「授業の教員準備状況」及び質問No.6「配布資料の利用状況」並びに質問No.11「全体評価」の満足度が、各0.5ポイント程度低下している。
さらに、質問No.16「職業会計人に必要な知識が深まった、能力が高まったと感じたか?」が、0.5ポイント程度低下している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

2021年春学期の授業評価アンケートを踏まえて、今回、以下の工夫を行った。
・引き続き授業スピードは抑制する。
・提示資料も継続して抑制する。
・各授業最後の小設問には十分に時間を確保し、質問の時間を確保する。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

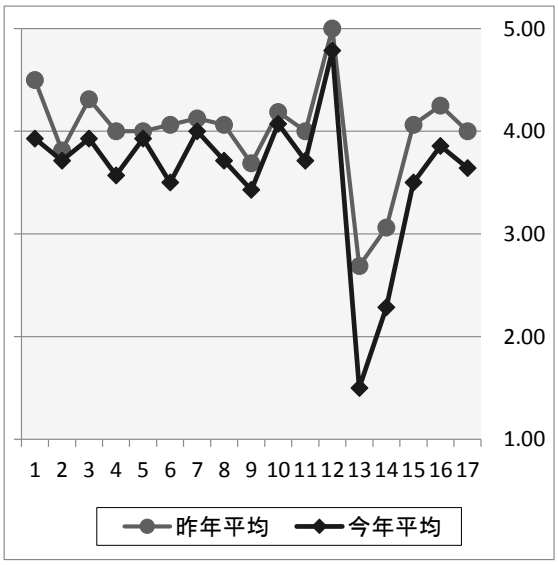
引き続き授業スピードは抑制し、提示資料も抑制のうえ、メリハリをつけた授業を行う。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

・授業スピードは現状を維持する。
・配信提示スライドのページ数や添付資料数を削減し、重点項目の説明により時間をかける。
・また、監査基準論の理解に際しては、基本項目を血肉化させる(一度憶えこむ)事が避けられない点を強調し、受講前に当日のスライド内容の概要を把握しておく事が血肉化に有用である点を伝達する。
・さらに、各授業項目に関し、当該授業項目を理解した後に何が待ち受けているか?監査の現場でのどの論点を解決してくれるのか?を最後に付言する。

科　　目	監査基準論(A2)		
配当年次	1	開講時限	春水3
受講者数	20	回答者数	14

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	3.93	4	5	1
2	3.81	3.71	3	5	3
3	4.31	3.93	4	5	3
4	4.00	3.57	4	5	1
5	4.00	3.93	4	5	3
6	4.06	3.50	4	5	1
7	4.13	4.00	4	5	1
8	4.06	3.71	3・4	5	3
9	3.69	3.43	3	5	1
10	4.19	4.07	4	5	3
11	4.00	3.71	4	5	1
12	5.00	4.79	5	5	4
13	2.69	1.50	1	3	1
14	3.06	2.29	2	5	1
15	4.06	3.50	4	5	1
16	4.25	3.86	4	5	1
17	4.00	3.64	4	5	1
回答者数	16	14			



受講生の傾向

質問No.1「講義要項、授業計画に示したものに沿った内容か?」の満足度が、0.5ポイント程度低下している。
質問No.4「学生の能力を高めようとの熱意・努力が感じられたか?」及び質問No.6「配布資料の利用の適切性」の満足度が、いずれも0.5ポイント程度低下している。
質問No.13「予習時間」及び質問No.14「復習時間」が、いずれも30分程度減少している。
質問No.15「さらに深く学習したいと思ったか?」が、4.06点から3.50点へ低下している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

2021年春学期の授業評価アンケートを踏まえて、今回、以下の工夫を行った。
・引き続き授業スピードは抑制する。
・提示資料も継続して抑制する。
・各授業最後の小設問には十分に時間を確保し、質問の時間を確保する。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

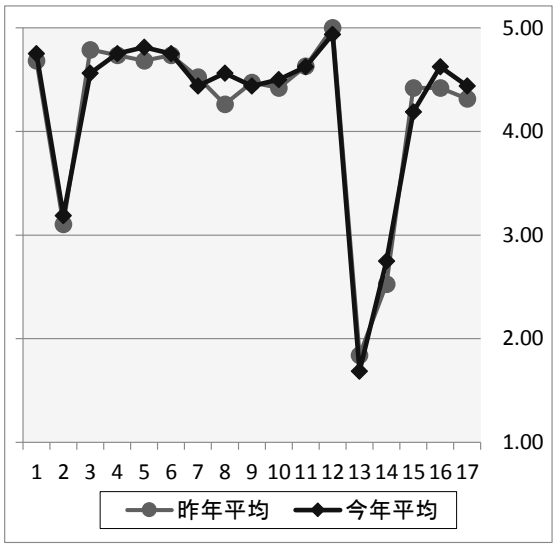
引き続き授業スピードは抑制し、提示資料も抑制のうえ、メリハリをつけた授業を行う。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

・授業スピードは現状を維持する。
・配信提示スライドのページ数や添付資料数を削減し、重点項目の説明により時間をかける。
・また、監査基準論の理解に際しては、基本項目を血肉化させる(一度憶えこむ)事が避けられない点を強調し、受講前に当日のスライド内容の概要を把握しておく事が血肉化に有用である点を伝達する。
・さらに、各授業項目に関し、当該授業項目を理解した後に何が待ち受けているか?監査の現場でのどの論点を解決してくれるのか?を最後に付言する。

科　　目	企業法(A1)		
配当年次	1	開講時限	春前火2・金3
受講者数	25	回答者数	16

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.68	4.75	5	5	4
2	3.11	3.19	3	4	2
3	4.79	4.56	5	5	4
4	4.74	4.75	5	5	4
5	4.68	4.81	5	5	4
6	4.74	4.75	5	5	4
7	4.53	4.44	5	5	3
8	4.26	4.56	5	5	4
9	4.47	4.44	4	5	4
10	4.42	4.50	4・5	5	4
11	4.63	4.63	5	5	4
12	5.00	4.94	5	5	4
13	1.84	1.69	1・2	3	1
14	2.53	2.75	3	5	1
15	4.42	4.19	4	5	3
16	4.42	4.63	5	5	4
17	4.32	4.44	5	5	3
回答者数	19	16			



受講生の傾向

今年度もまた昨年度と同様に入学者数および履修者数の関係で春学期の企業法はA1クラスとA2クラスに分かれている。その結果として、今回の企業法A1クラスは履修者数25名となった。しかしながら、昨年度とは異なり、オンライン授業となることはなく、春学期前半クオーターを通じて対面授業であった。そのような中で、体調不良による欠席も見られたが、全体として出席率もよく、授業態度も良好であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

上でも記載したように、今年度はすべての授業回において対面授業に戻ったので、これまで行ってきたような対面授業の良さを生かした授業を心掛けた。ZOOMによる授業を経験したことで、対面授業の特徴を改めて認識することができ、これを踏まえた授業をすることができた。具体的には、ZOOMによる授業では学生の授業に対する反応が分かりにくいのに対して、対面であるとダイレクトに伝わってくるので、それを敏感に感じ取りながら、授業へとつなげていくことができた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

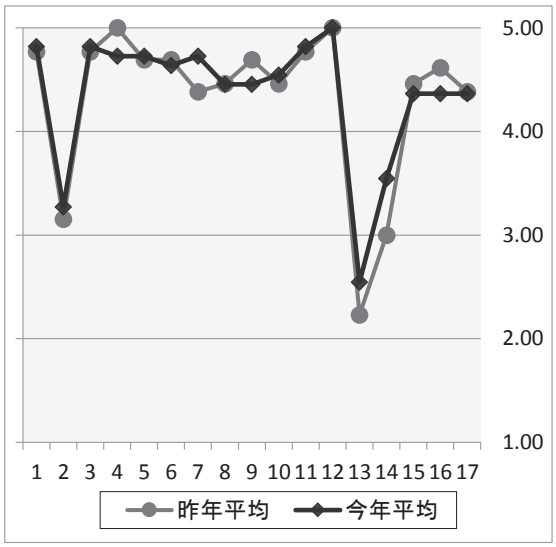
次年度については、コロナ禍の状況がどのように変化し、授業にどのような影響を与えるのかわからないため、これまでの経験を生かして、臨機応変に対応していきたい。また、通常の対面授業に戻ったとしても、オンライン授業下での効果的な取り組みについては、続けていきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

ここ最近の傾向であるが、企業法受講生の学力が向上してきている。以前よりも受講生の授業理解度が高く、小テスト(特に論文式)の結果を見ても成績が上がってきている。これを踏まえて、次年度以降は、受講生の学力を見極めて、もう少し授業のレベルをあげていくことを考えたい。

科　　目	企業法(A2)		
配当年次	1	開講時限	春前火3・金2
受講者数	20	回答者数	11

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.77	4.82	5	5	4
2	3.15	3.27	3	4	3
3	4.77	4.82	5	5	4
4	5.00	4.73	5	5	4
5	4.69	4.73	5	5	4
6	4.69	4.64	5	5	4
7	4.38	4.73	5	5	4
8	4.46	4.45	4	5	4
9	4.69	4.45	5	5	3
10	4.46	4.55	5	5	4
11	4.77	4.82	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.23	2.55	2	5	1
14	3.00	3.55	5	5	2
15	4.46	4.36	4	5	4
16	4.62	4.36	4・5	5	3
17	4.38	4.36	4	5	4
回答者数	13	11			



受講生の傾向

A1クラスでも述べたが、今年度もまた昨年度と同様に入学者数および履修者数の関係で春学期の企業法はA1クラスとA2クラスに分かれている。その結果として、今回の企業法A2クラスは履修者数20名となった。しかしながら、昨年度とは異なり、オンライン授業となることはなく、春学期前半クオーターを通じて対面授業であった。そのような中で、体調不良による欠席も見られたが、全体として出席率もよく、授業態度も良好であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

上でも記載したように、今年度はすべての授業回において対面授業に戻ったので、これまで行ってきたような対面授業の良さを生かした授業を心掛けた。オンラインによる授業を経験したことで、対面授業の特徴を改めて認識することができ、これを踏まえた授業をすることができた。具体的には、オンラインによる授業では学生の授業に対する反応が分かりにくいのに対して、対面であるとダイレクトに伝わってくるので、それを敏感に感じ取りながら、授業へとつなげていくことができた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

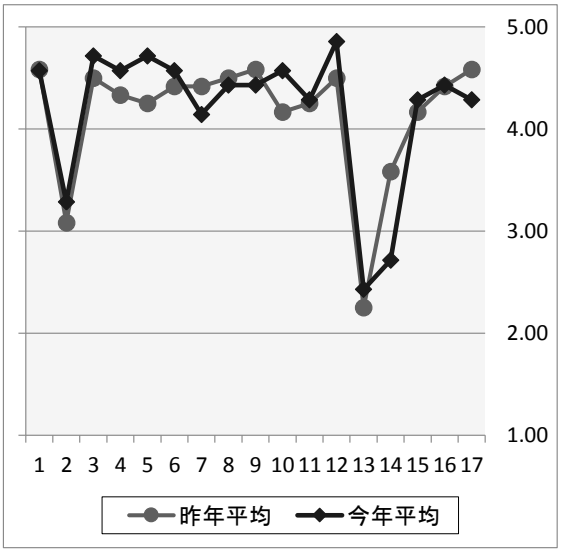
次年度については、コロナ禍の状況がどのように変化し、授業にどのような影響を与えるのかわからないため、これまでの経験を生かして、臨機応変に対応していきたい。また、通常の対面授業に戻ったとしても、オンライン授業下での効果的な取り組みについては、続けていきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

ここ最近の傾向であるが、A1クラスと同様に企業法受講生の学力が向上してきている。以前よりも受講生の授業理解度が高く、小テスト(特に論文式)の結果を見ても成績が上がってきている。これはA2クラスに所属する2年生受講生も同様である。これを踏まえて、次年度以降は、受講生の学力を見極めて、もう少し授業のレベルをあげていくことを考えたい。

科　　目	会計専門職業倫理(A1)		
配当年次	2	開講時限	春木1
受講者数	24	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.58	4.57	5	5	4
2	3.08	3.29	3	4	3
3	4.50	4.71	5	5	4
4	4.33	4.57	5	5	4
5	4.25	4.71	5	5	4
6	4.42	4.57	5	5	4
7	4.42	4.14	4	5	4
8	4.50	4.43	5	5	3
9	4.58	4.43	4	5	4
10	4.17	4.57	5	5	4
11	4.25	4.29	4	5	4
12	4.50	4.86	5	5	4
13	2.25	2.43	2	4	1
14	3.58	2.71	2	4	2
15	4.17	4.29	4・5	5	3
16	4.42	4.43	4	5	4
17	4.58	4.29	4	5	4
回答者数	12	7			



受講生の傾向

クラス分けにより20名の受講生が割り当てられた。留学生も2割程度おり、職業倫理に対する理解度のレベルも様々な受講生が混在していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

アンケート結果では、「予習」は殆ど行っていないとの結果が続いていた。それに対してなるべく早く事例研究の課題を割り当てるなどして、グループでの事前準備を進めるよう声掛けを行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

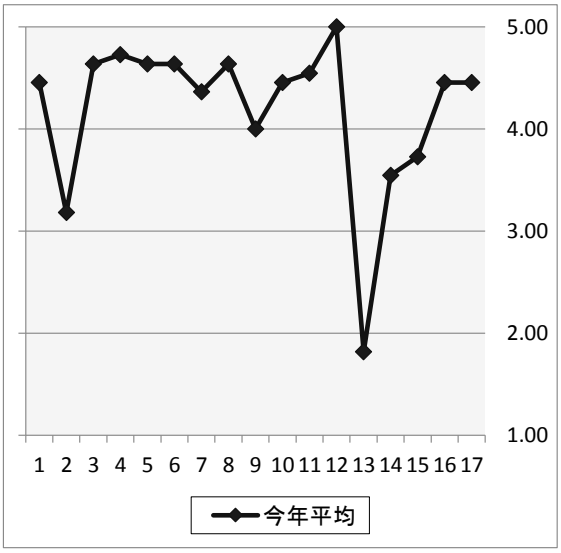
該当なし(担任者変更)

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

職業倫理の重要性を再認識する機会を与えるとともに、自らで倫理抵触事例の問題点を掘り下げるような自発的な取組みを促していきたい。

科　　目	会計専門職業倫理(A2)		
配当年次	2	開講時限	春木2
受講者数	23	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.45	5	5	3
2	—	3.18	3	4	3
3	—	4.64	5	5	3
4	—	4.73	5	5	3
5	—	4.64	5	5	4
6	—	4.64	5	5	4
7	—	4.36	5	5	3
8	—	4.64	5	5	4
9	—	4.00	4	5	2
10	—	4.45	4	5	4
11	—	4.55	5	5	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	1.82	1	5	1
14	—	3.55	5	5	1
15	—	3.73	4	5	1
16	—	4.45	5	5	3
17	—	4.45	5	5	3
回答者数	—	11			



受講生の傾向

受講生の内訳は、公認会計士志望者15名、税理士志望者3名、国税専門官志望者3名、その他2名であり、また、論文試験合格者は1名、留学生は3名であった。進路希望は監査法人のほか、税理士法人、一般事業会社等であった。必修科目であり、全体的に出席状況はよく、課題もほぼ提出され内容に対しても丁寧に取り組んでいた。また、発表を含むグループワークについても、資料作成、内容検討、発表等、それぞれに役割分担し、真面目に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

一方的な座学とならないよう、講義では質疑応答を重視し、規則、制度の解説・背景の説明だけでなく、実務での体験談等を交えながら、さまざまなケース・スタディやディスカッションを取り入れ、受講生が具体的なイメージを持てるように留意した。またグループワークにより、討議、発表を通じ、各事例の概要だけでなく、その背景等を深く掘り下げて検討する機会を用意した。グループワーク(発表を含む)については、準備が大変という面もありつつ、他の受講生との交流を図ることができ、プレゼンの機会にもなり、また他のグループの発表を聴くことができ、概ね受講生の満足度は高かったようである。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

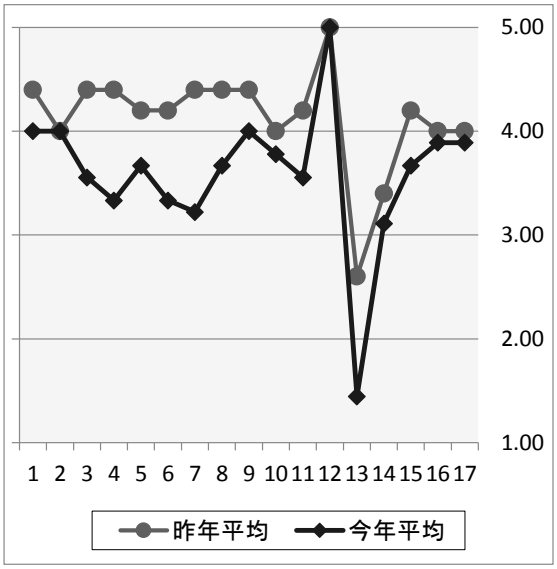
該当なし(昨年度不開講)

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き、質疑応答、ケース・スタディ、グループワーク等を通じ、受講生が主体的に講義に取り組めるように努める。ディスカッションは、やや特定の受講生に発言が偏りがちであったため、議題を早期に提示するなどし、受講者全員に発言の機会を求めるなど、受講生が主体的に参加できるような工夫をしていきたい。

科　　目	会計基準論		
配当年次	1	開講時限	春火1
受講者数	36	回答者数	9

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.40	4.00	4	5	3
2	4.00	4.00	4	5	3
3	4.40	3.56	4	5	2
4	4.40	3.33	2	5	2
5	4.20	3.67	3･4	5	2
6	4.20	3.33	3	5	2
7	4.40	3.22	3･4	5	1
8	4.40	3.67	3･4	5	3
9	4.40	4.00	4	5	3
10	4.00	3.78	4	5	1
11	4.20	3.56	3	5	2
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.60	1.44	1	3	1
14	3.40	3.11	4	5	1
15	4.20	3.67	3･4	5	2
16	4.00	3.89	4	5	2
17	4.00	3.89	4	5	3
回答者数	5	9			



受講生の傾向

今年度は、コロナ禍によるオンライン授業での実施がなく、これに伴う受講生の戸惑いはなかった。また、全員がほぼ毎回出席し真摯に受講していたと思われる。オンライン授業が併用された年度以前と比較すると、教科書あるいは授業で取り扱う会計基準をプリントアウトして持参する受講生が大幅に減少し、授業開始後スマートフォンやタブレットで検索し準備する受講生が散見された。学生の受講方法もしくは学習ツールが変化していると想像される。その影響によるか不明であるが、授業中の受講生の理解度が今ひとつ掴みづらい印象を持った。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

オンライン授業となる可能性が極めて低くなったため、オンラインを想定して作成した資料を取りやめ、従来どおりの対面授業を前提とした資料に戻し、小テストも紙媒体に戻している。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

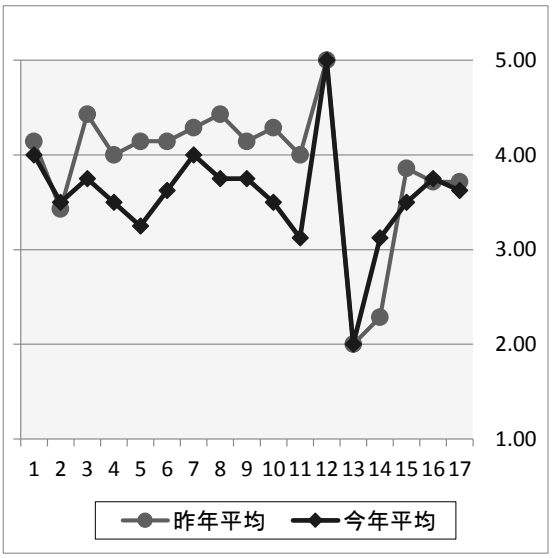
オンライン授業となった場合に備えた資料の調整を進めるとともに、一昨年度以前まで生じていたと思われる受講生の受講態度や学習意欲の二極化については、充分に受講の準備ができていない受講生に対しては、予習・復習を促し、小テストの結果に応じた追加的な資料作成などの工夫を模索してみようと思う。また、充分に受講準備ができている受講生には、より正確な理解ができるような説明や資料作成など工夫を講じるつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

アンケート結果から、昨年度より予習・復習の時間が減少し、一方で従来どおりの対面授業での講義資料を教員の準備不足であると感じる受講生が増えていると思われる。「受講生の傾向」に示したとおり、受講生の受講方法あるいは学習ツールに変化が生じている結果として生じた現象であると想像され、このような変化に適合するように学習の誘導や資料作成を調整する工夫を講じる。

科　　目	会計制度論		
配当年次	1	開講時限	春月4
受講者数	28	回答者数	8

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.14	4.00	4・5	5	2
2	3.43	3.50	3	5	3
3	4.43	3.75	4	5	2
4	4.00	3.50	4	5	2
5	4.14	3.25	4	5	1
6	4.14	3.63	4	5	2
7	4.29	4.00	4・5	5	2
8	4.43	3.75	3	5	3
9	4.14	3.75	4	5	3
10	4.29	3.50	4	5	1
11	4.00	3.13	4	5	1
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.00	2.00	2	5	1
14	2.29	3.13	2・3・5	5	1
15	3.86	3.50	4	5	1
16	3.71	3.75	4	5	2
17	3.71	3.63	4	5	2
回答者数	7	8			



受講生の傾向

出席は例年通りきわめて高い。予習にかける時間は昨年と同様、復習にかける時間は大きく伸びている。一方、授業の進度については、昨年、「少し早い」という感想になっている。ところで、その他指標については、概ね評価が下がっている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

対面での授業として、教室での対話を増やしている。昨年度は11回の課題を出していたが、今回は大幅に削減して、教室で発言させることにした。教室で発言させる回数が大きく増えたことで、授業に対する評価が下がったと考えざるをえない。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

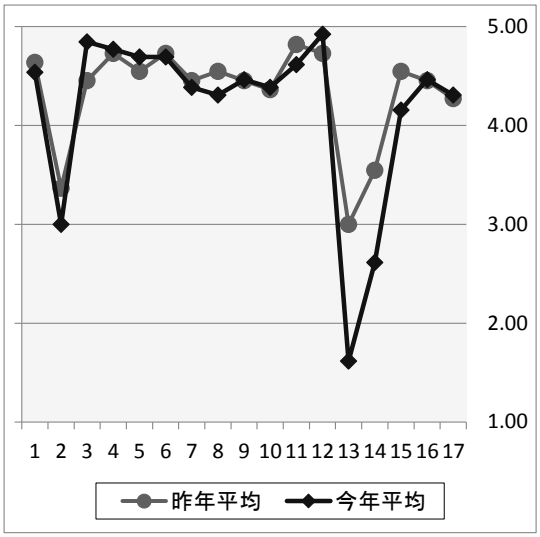
来年度も対面であろうと、遠隔であろうと基本方針は変えないが、遠隔の場合には授業中の履修者の理解度を表情から読み取りにくく、課題が有効な手段となろう。対面の場合にも回数を減らして課題を与えることを考える。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度に記した対応が今年の受講者に受け入れがたく勉学意欲を下げたのであれば、教室での議論を下げて、講義外での課題を増やす（つまり昨年の方針へ少し戻す）ことが必要かと思う。

科　　目	商取引法		
配当年次	1	開講時限	春金4
受講者数	18	回答者数	13

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.64	4.54	5	5	4
2	3.36	3.00	3	3	3
3	4.45	4.85	5	5	4
4	4.73	4.77	5	5	4
5	4.55	4.69	5	5	4
6	4.73	4.69	5	5	4
7	4.45	4.38	5	5	3
8	4.55	4.31	4	5	3
9	4.45	4.46	5	5	3
10	4.36	4.38	4	5	4
11	4.82	4.62	5	5	4
12	4.73	4.92	5	5	4
13	3.00	1.62	1・2	3	1
14	3.55	2.62	2・3	4	2
15	4.55	4.15	4	5	3
16	4.45	4.46	5	5	3
17	4.27	4.31	4	5	4
回答者数	11	13			



受講生の傾向

今年度は、昨年度よりも若干受講者数が増えて18名であった。2年生の受講生もいたが、ほとんどは1年生で、1年生の春学期で受講するには、若干難しい科目であるが、受講生の出席率もよく、コロナの影響もほとんどなかったように思う。また、ほとんどの学生は熱心に授業および小テストにも取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は前半対面授業で途中オンライン授業、次いで後半再び対面授業というスタイルで授業を行ったが、今年はフルで対面授業が行われ、これまでの通常の授業スタイルに戻った。対面授業の良さを生かしながら、オンライン授業の中で得た授業方法も取り入れて、より効果的な授業となるよう心掛けた。具体的には、自ら授業動画を録画して、補助教材として、適宜みられるように配信した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

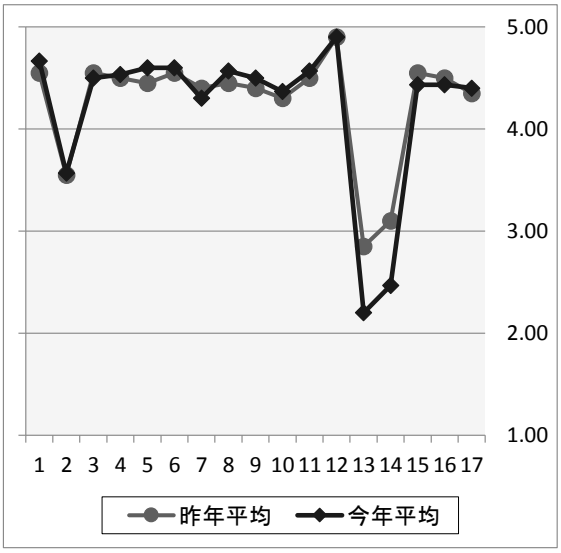
今後もコロナ禍の状況はどのようになるかわからないので、オンライン授業となっても対面授業よりも教育効果が下がらないよう配慮し、さらにはオンライン授業の体験をもとに、対面授業の場合にも生かしていきたい。 自ら授業動画を録画して配信するという補助授業（教材）の利用など、活用していきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

この商取引法という授業は、商法総則商行為法および金融商品取引法を扱うものであるから、分量も多くやや難易度も高い。さらには、1年生の春学期からの授業ということもある。そういう意味では、15回の授業を効率的に進めていくのと同時に、上でも述べた動画等を利用した補助教材を併せて、効果的な授業を行っていきたい。

科　　目	法人税法		
配当年次	1	開講時限	春木4
受講者数	32	回答者数	30

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.55	4.67	5	5	3
2	3.55	3.57	3	5	3
3	4.55	4.50	5	5	3
4	4.50	4.53	5	5	2
5	4.45	4.60	5	5	3
6	4.55	4.60	5	5	3
7	4.40	4.30	5	5	2
8	4.45	4.57	5	5	3
9	4.40	4.50	5	5	3
10	4.30	4.37	5	5	2
11	4.50	4.57	5	5	2
12	4.90	4.90	5	5	4
13	2.85	2.20	3	5	1
14	3.10	2.47	2	5	1
15	4.55	4.43	5	5	2
16	4.50	4.43	5	5	3
17	4.35	4.40	5	5	2
回答者数	20	30			



受講生の傾向

受講生32名の構成は、税理士志望者が13名、残りが公認会計士志望者と留学生であった。授業評価アンケートの結果のうち、No.13(予習時間)が昨年度と比べ0.65減少、No.14(復習時間)が0.63減少していた点は、最低値によるかもしれないが、法人税法の学習に対する受講生の姿勢が気になった点である。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

まず、公認会計士試験の過去問に対し、少なくとも3名以上から解答を述べさせ、受講生間で誤解答の情報を共有するように努めた。次に、多くの過去問が最高裁判決に依拠して作成されていると思われるため、重要な租税判例をピックアップし、合計10回の課題レポートを受講生に課することにした。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

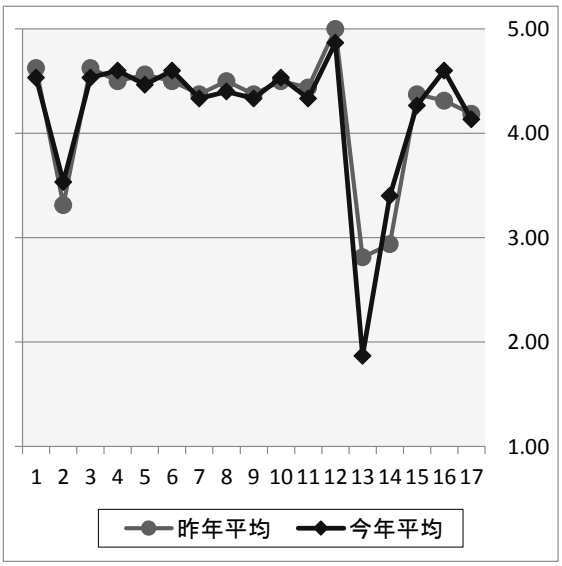
定期試験の結果から、論述を苦手とする多くの受講生がいることを確認した。授業内で論述問題を解かせ、その解答を受講生間で共有し、受講生の論述力向上を図りたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

まず、公認会計士試験の過去問に対し、複数の受講生に解答を述べさせる方法は、誤解答の傾向が明らかになる点で、単なる情報共有以上の意味を有しているように思われたため、次年度も引き続き実施したい。

科　　目	上級税務会計論		
配当年次	1	開講時限	春金4
受講者数	17	回答者数	15

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.63	4.53	5	5	4
2	3.31	3.53	3	5	3
3	4.63	4.53	5	5	4
4	4.50	4.60	5	5	4
5	4.56	4.47	5	5	3
6	4.50	4.60	5	5	3
7	4.38	4.33	4	5	3
8	4.50	4.40	4･5	5	3
9	4.38	4.33	5	5	3
10	4.50	4.53	5	5	4
11	4.44	4.33	4･5	5	2
12	5.00	4.87	5	5	4
13	2.81	1.87	1	5	1
14	2.94	3.40	3	5	1
15	4.38	4.27	4	5	3
16	4.31	4.60	5	5	4
17	4.19	4.13	5	5	2
回答者数	16	15			



受講生の傾向

受講生は、公認会計士志望者と税理士志望者から構成されていた。昨年度と同様、税務会計の初学者をフォローする意味から、授業の進みを緩やかにしたが、受講生にはいくぶん進みが早かったようである（アンケートのNo.2）。また、今年度の受講生の特徴としては、予習よりも復習を重視して本科目に取り組んでいたことが伺われる（アンケートのNo.13及び14）。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

まず、公認会計士試験の過去問が解けない初学者をフォローするため、過去問の解答を授業開始時点で配布し、過去問の解説は主として計算プロセスにウェイトを置くようにした。次に、昨年度を踏まえて、今年度は第9回講義以降の内容を見直し、各回で取り扱う項目を均等化させ、受講生の学習負担を平準化した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

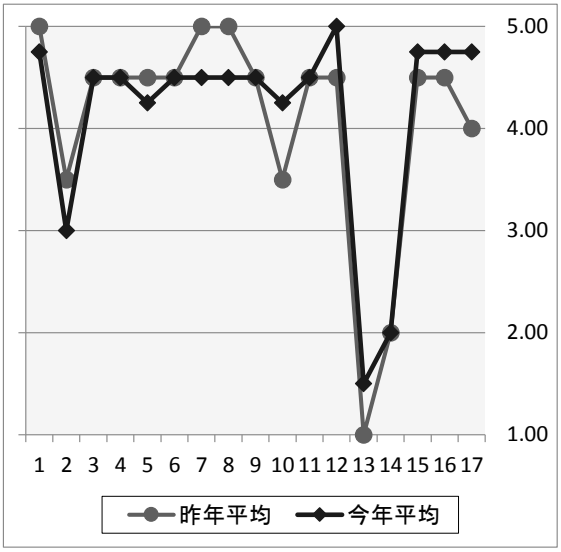
本年度の対応は、特に税務会計の初学者に対して計算プロセスを理解させるという意味において有効だったようである。今後も継続して行っていきたい。また、今年度の特徴として、第9回講義以降の内容に上手くついていけない受講生が多かったと思われる。第9回講義以降の内容を一部前倒しするなど、各回の学習量を再検討したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

まず、公認会計士試験の過去問の解答を授業開始時点で配布し、計算過程を主として解説する方法は、初学者の定期試験の結果から有効であったと思われるため、次年度も継続したい。次に、第9回講義以降に取り扱う項目の見直しは今年度有効であったと思われるが、取り扱うべき項目が増えていく状況下、次年度も更なる見直しを検討したい。

科　　目	特殊講義（自治体マネジメントと監査） ＜特殊講義（公監査論）＞		
配当年次	1	開講時限	春金1
受講者数	4	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.75	5	5	4
2	3.50	3.00	3	3	3
3	4.50	4.50	4・5	5	4
4	4.50	4.50	4・5	5	4
5	4.50	4.25	5	5	3
6	4.50	4.50	4・5	5	4
7	5.00	4.50	4・5	5	4
8	5.00	4.50	4・5	5	4
9	4.50	4.50	4・5	5	4
10	3.50	4.25	4	5	4
11	4.50	4.50	4・5	5	4
12	4.50	5.00	5	5	5
13	1.00	1.50	1	3	1
14	2.00	2.00	1・3	3	1
15	4.50	4.75	5	5	4
16	4.50	4.75	5	5	4
17	4.00	4.75	5	5	4
回答者数	2	4			



受講生の傾向

元自治体職員や政治家志望の学生を含む4名の受講生が参加した（1年次生）。公監査は初めてという受講生も身近な話題に関心を持ち、自ら様々な自治体運営の課題について調べるなどして積極的な取り組みが見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

各自が居住している自治体の新公会計や監査に関する課題を出し報告させた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

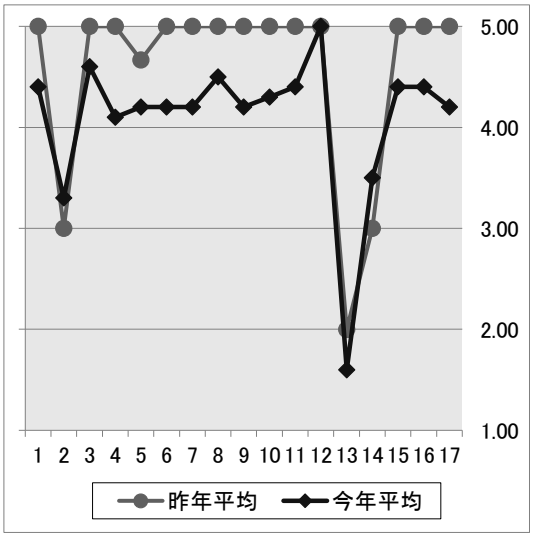
予習の時間がゼロとの回答であったが、確かに授業内容を説明するので精一杯であり、事前の課題を出すところまではいかなかった。やはり身近な課題と公会計・公監査との関係を知るうえでも事前の学習を課題として与えることを検討する。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生の関心が持てるようさらに身近な話題を取り上げ、課題を与えて積極的に調べ報告するなどの方策を採りたい。

科　　目	特殊講義（資本市場論）		
配当年次	2	開講時限	春木3
受講者数	14	回答者数	10

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.40	5	5	3
2	3.00	3.30	3	4	3
3	5.00	4.60	5	5	4
4	5.00	4.10	4	5	3
5	4.67	4.20	4	5	4
6	5.00	4.20	4	5	3
7	5.00	4.20	4	5	3
8	5.00	4.50	4・5	5	4
9	5.00	4.20	4	5	3
10	5.00	4.30	4	5	4
11	5.00	4.40	4	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.00	1.60	1	5	1
14	3.00	3.50	5	5	2
15	5.00	4.40	4	5	4
16	5.00	4.40	4	5	4
17	5.00	4.20	4	5	3
回答者数	3	10			



受講生の傾向

受講生の内訳は、公認会計士志望者5名（論文試験合格者2名を含む）、税理士志望者3名、国税専門官志望者1名、その他5名であり、うち留学生は5名であった。進路希望は、監査法人のほか、税理士法人、一般事業会社等様々であった。この講義を選択した理由としては、企業価値評価や企業の資金調達、資本市場等に興味があるなどであり、出席率も概ね高く、課題についてもほぼすべてが提出され、内容的にも丁寧に取り組んでおり、全体として講義内容への関心の高さが感じられた。しかしながら、一部の留学生については語学力の問題があり、講義、課題への取組みに苦労している印象を受けた。また、受講生は会計税務の基本的な知識はあるものの、専門・応用分野の知識の習得等にややばらつきがあり、課題の理解度・深度についても個人差が見受けられた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義では、実践的な知識の習得、多角的・複眼的な分析ができるようになること、自分なりの見解をまとめ発表できることを到達目標としており、できるだけタイムリーな事例、受講生が興味を持ちやすい事例、実務上有用な事例等を選定した。さらに新聞記事等を積極的に紹介し、議題や課題に取り上げて考える機会を提供し、受講生が身近な問題として感じられるように留意した。講義においては質疑応答を重視し、また事例問題について、発表を含むグループワークを設けた。グループワークは準備期間が必要となるものの、グループとしての結論をまとめる中で、多面的に検討する機会にもなり、全体的に積極的な参加が見られた。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

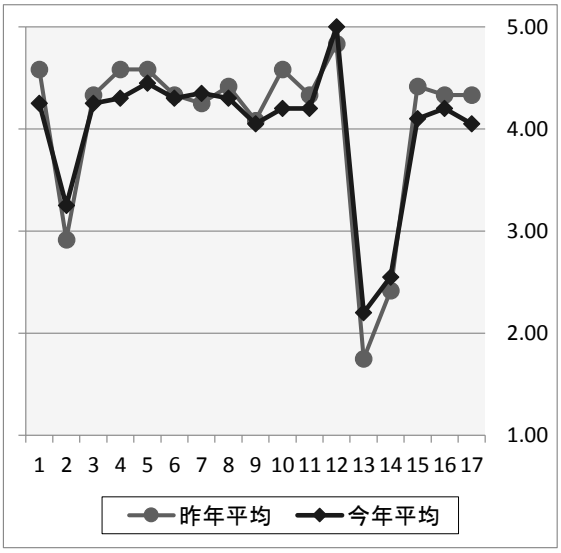
該当なし（担任者変更）

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生各人の学習の進捗度等に配慮しつつ、グループワーク、ディスカッション等を積極的に取り入れ、全体的な知識の習得の底上げを図り、受講生が主体的に講義に取り組めるように努める。

科　　目	特殊講義（不正摘発監査論）		
配当年次	2	開講時限	春水3
受講者数	24	回答者数	20

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.58	4.25	4	5	3
2	2.92	3.25	3	5	3
3	4.33	4.25	4	5	3
4	4.58	4.30	4	5	3
5	4.58	4.45	4	5	4
6	4.33	4.30	4	5	3
7	4.25	4.35	4	5	4
8	4.42	4.30	4	5	3
9	4.08	4.05	4	5	2
10	4.58	4.20	4	5	3
11	4.33	4.20	4	5	3
12	4.83	5.00	5	5	5
13	1.75	2.20	2	5	1
14	2.42	2.55	2	5	1
15	4.42	4.10	4	5	3
16	4.33	4.20	4	5	3
17	4.33	4.05	4	5	2
回答者数	12	20			



受講生の傾向

公認会計士試験の勉強をしている人が多く、皆熱心に講義を聴いている。
レポートの内容もよく、期末テストの結果も概ね良好であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

こちらから積極的に問いかけ、答えてもらう形式にはできたと思う。
復習と予習の時間が少ない問題に対しては、課題やレポートを増やした。

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

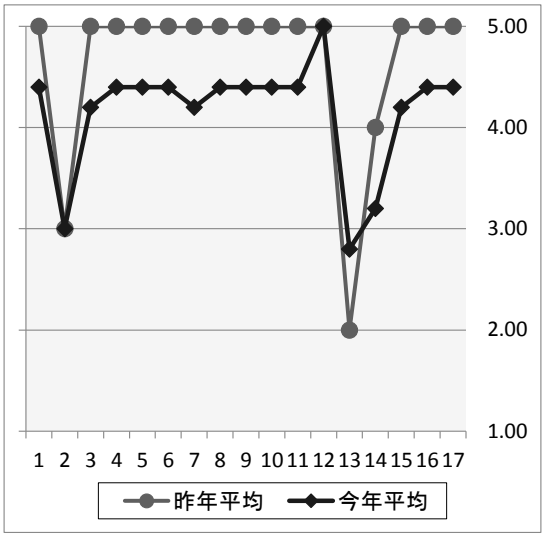
こちらからの問いかけに答えてもらう形はできたが、次は受講生同士の議論が活発に行えるようにしていきたい。また、復習と予習の時間が少ないようなので、もう少し課題を出す等、講義の内容の定着を図れるようにしていきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

ディスカッション形式も取り入れて、生徒同士の議論でより理解が深まるようにしていきたい。

科　　目	特殊講義（企業マネジメントと会計）		
配当年次	1	開講時限	春火4
受講者数	12	回答者数	5

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.40	4	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	4.20	4	5	4
4	5.00	4.40	4	5	4
5	5.00	4.40	4	5	4
6	5.00	4.40	4	5	4
7	5.00	4.20	4	5	4
8	5.00	4.40	4	5	4
9	5.00	4.40	4	5	4
10	5.00	4.40	4	5	4
11	5.00	4.40	4	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.00	2.80	3	5	1
14	4.00	3.20	2	5	2
15	5.00	4.20	4･5	5	3
16	5.00	4.40	4	5	4
17	5.00	4.40	4	5	4
回答者数	1	5			



受講生の傾向

出席率は高く、授業の進度も適切だと感じ、分析課題を与える方法から復習時間が増えている。ただ、昨年度の回答者が1名であったため、今年度の評点が（下がったというよりは）概ね評点をされたと考えている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年以上に現実の企業を題材として、財務諸表分析を含む企業研究を進めた。座学が多いので、作業を求める授業に積極的に取り組んでもらえたようである。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

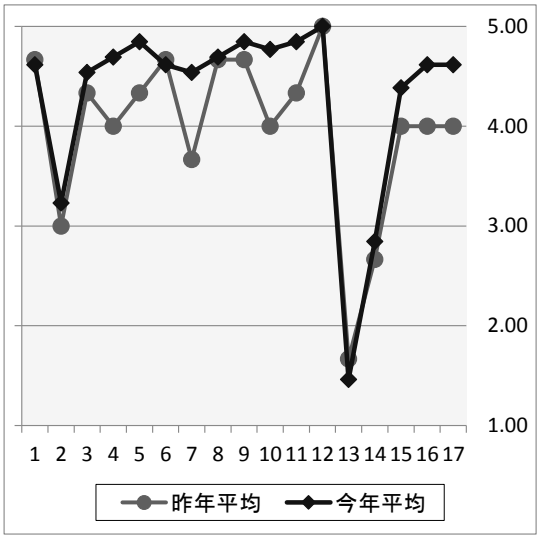
おおむね昨年、今年と講義の方針を理解して、日ごろあまり時間をかけない企業研究は新鮮なようであった。来年の授業も方針を踏襲したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年同様に評価が高かったようなので、来年の授業も継続したい。

科　　目	IFRS会計論		
配当年次	2	開講時限	春月4
受講者数	16	回答者数	13

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.62	5	5	4
2	3.00	3.23	3	5	3
3	4.33	4.54	5	5	4
4	4.00	4.69	5	5	4
5	4.33	4.85	5	5	4
6	4.67	4.62	5	5	4
7	3.67	4.54	5	5	4
8	4.67	4.69	5	5	4
9	4.67	4.85	5	5	4
10	4.00	4.77	5	5	4
11	4.33	4.85	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.67	1.46	1	5	1
14	2.67	2.85	3	5	2
15	4.00	4.38	4	5	4
16	4.00	4.62	5	5	4
17	4.00	4.62	5	5	4
回答者数	3	13			



受講生の傾向

今年度は全回対面授業での実施であり、1度の出席で受講を取りやめた受講生を除き、全員が毎回出席し真摯に受講していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

各回で取り扱うIFRSの各基準をできるだけ詳細に紹介することをやめ、各基準に反映されたIFRSの特徴と日本基準との相違に焦点を絞り、特徴と典型となる内容に絞り込んで、理解しやすい授業となるように心がけた。また、ほぼ毎回実施する小テストも当該特徴をちゃんと復習できていれば点数となるようなテストを心がけた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

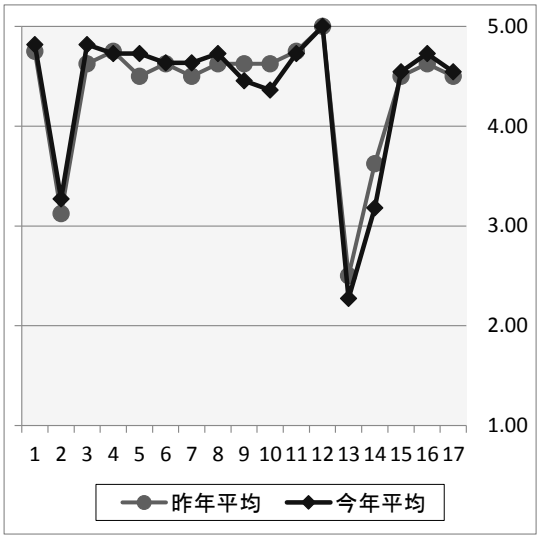
受講生のうち半数のみのアンケート結果であることを踏まえる必要はあるが、受講生の反応が概ね良好であるため、基本的には今年度と同様に重要内容に絞り込み、理解しやすさを維持しようと考える。また、日本の会計基準との比較をしつつ、IFRSの特徴もより一層理解できるように工夫を講じるつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生のほとんどかアンケートに回答していることから、全体傾向であると理解している。受講生の反応は、昨年度に引き続き、概ね良好であるため、基本的に各基準の重要内容に絞りこみ、特徴の理解のしやすさを維持しようと考える。さらに、できるだけ日本基準との比較においての理解も深まるよう工夫を講じる。

科　　目	上級会社法		
配当年次	2	開講時限	春火4
受講者数	15	回答者数	11

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.75	4.82	5	5	4
2	3.13	3.27	3	5	3
3	4.63	4.82	5	5	4
4	4.75	4.73	5	5	4
5	4.50	4.73	5	5	4
6	4.63	4.64	5	5	4
7	4.50	4.64	5	5	4
8	4.63	4.73	5	5	4
9	4.63	4.45	4	5	4
10	4.63	4.36	4・5	5	3
11	4.75	4.73	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.50	2.27	1	5	1
14	3.63	3.18	2・3・5	5	1
15	4.50	4.55	5	5	4
16	4.63	4.73	5	5	4
17	4.50	4.55	5	5	4
回答者数	8	11			



受講生の傾向

今年度の受講生は、15名と昨年度の8名と比べると大きく増加した。この科目は2年生以上が受講することのできる科目で、授業難易度も高く設定し、基本的に公認会計士試験の受験を控えた学生が受講する科目であるので、あまり受講生は多くないのがこれまでの傾向であった。ただ、受講生が例年より増えても、学生の会社法に関する学力レベルは高く、授業態度もよかった。また、短答式や論文式の小テストに対しても真摯に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は前半対面授業で途中オンライン授業、次いで後半再び対面授業というスタイルで授業を行ったが、今年はフルで対面授業が行われ、これまでの通常の授業スタイルに戻った。対面授業の良さを生かしながら、オンライン授業の中で得た授業方法も取り入れて、より効果的な授業となるよう心掛けた。具体的には、自ら授業動画を録画して、補助教材として、適宜みられるように配信した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

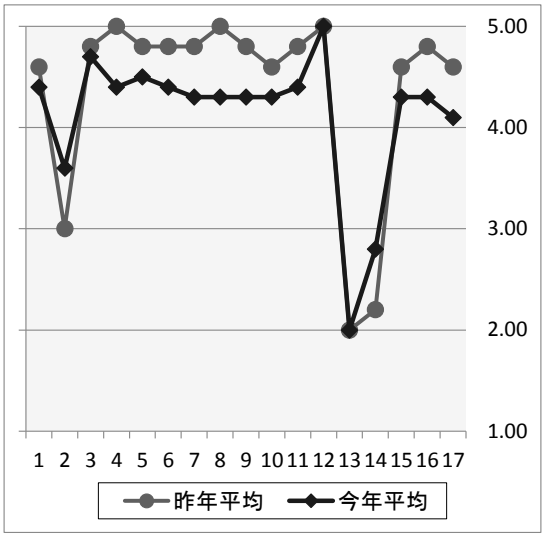
今年度は対面授業とオンライン授業が複合した形態で授業を行ったが、来年度以降はどのような形態で授業が行われても対応できるように準備しておきたい。また、対面授業に戻った場合であっても、オンライン授業の利点を生かして対面授業に応用していきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度はこれまでと同様に全15回対面授業となり、今後もおそらく従来通りの対面授業に戻ると思われる。そういう状況であっても、対面授業の良さを生かしながら、オンライン授業の中で得た授業方法も取り入れて、より効果的な授業となるよう心掛けたい。

科　　目	国際税務論		
配当年次	2	開講時限	春金3
受講者数	11	回答者数	10

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.60	4.40	4	5	4
2	3.00	3.60	4	4	3
3	4.80	4.70	5	5	4
4	5.00	4.40	4	5	4
5	4.80	4.50	4・5	5	4
6	4.80	4.40	5	5	3
7	4.80	4.30	4	5	4
8	5.00	4.30	4	5	4
9	4.80	4.30	4	5	4
10	4.60	4.30	4	5	4
11	4.80	4.40	5	5	3
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.00	2.00	1	4	1
14	2.20	2.80	3	4	1
15	4.60	4.30	4	5	3
16	4.80	4.30	4	5	4
17	4.60	4.10	4	5	3
回答者数	5	10			



受講生の傾向

受講生は税理士志望者と会計士志望者が多かったが、受講生全員が国際租税法の初学者であった。特に、質問No.2が昨年度との対比で0.6上昇していることから、今年度の受講生には本授業の進みが早かったように感じられていたようである(使用したテキストや配布資料は、昨年度とほぼ同一)。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

国際租税法のフレームワーク(国内税法と租税条約の組み合わせ)の理解向上を目指すべく、まずは国内税法の解説からスタートし、その後、租税条約の解説をし、その後、両者の関係性を解説するという講義計画を立てて実施した。また、講義では出来る限り、図を多用するとともに、テキスト記載の問題を利用して、条文の当てはめの練習を繰り返すことにした。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

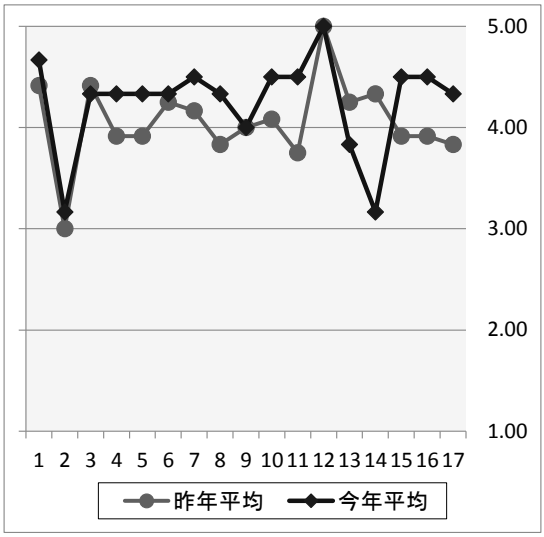
定期試験の結果から、今年度の受講生は、国際租税法のフレームワーク(国内税法と租税条約の組み合わせ)をきちんと理解できなかったと思われる。次年度は、国際租税法のフレームワークを中心に、講義内容を再検討したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度の方法で、受講生に国際租税法のフレームワーク自体を理解させることは出来たように思われる。次年度は、個々の規定の具体的な解釈適用のレベルまで、受講生の理解が及ぶよう講義計画を見直していきたい。具体的には、インバウンド(対内)取引に関する取扱いを学習する時間を増やすことである。

科　　目	インベストメント論		
配当年次	2	開講時限	春月3
受講者数	7	回答者数	6

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.42	4.67	5	5	4
2	3.00	3.17	3	4	3
3	4.42	4.33	4	5	4
4	3.92	4.33	5	5	3
5	3.92	4.33	4	5	4
6	4.25	4.33	4	5	4
7	4.17	4.50	4･5	5	4
8	3.83	4.33	5	5	3
9	4.00	4.00	3･4･5	5	3
10	4.08	4.50	5	5	3
11	3.75	4.50	5	5	3
12	5.00	5.00	5	5	5
13	4.25	3.83	5	5	1
14	4.33	3.17	2	5	2
15	3.92	4.50	4･5	5	4
16	3.92	4.50	4･5	5	4
17	3.83	4.33	5	5	3
回答者数	12	6			



受講生の傾向

熱心な学生が多く、会計学の科目とは異なる、新しい分野の新しい考え方で、数学も利用したにもかかわらず、熱心についてきてくれた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

予習よりも復習を中心とした授業構成としたこと、毎回、課題を課し、ポイントの項目についてはレポートを課すことで、受講者の理解を高めるようにした。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

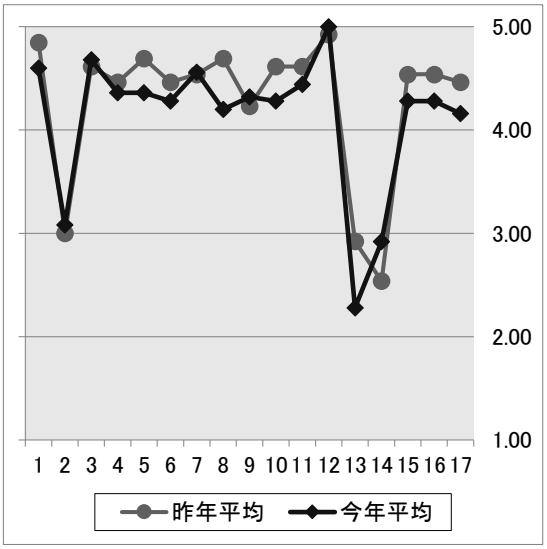
オンデマンド授業、ZOOMによる授業のみならず、対面授業においても、今年度行った「反転授業」的要素『前回に係る課題の答え合わせ⇒その回の授業⇒その回に係る課題の掲示（⇒時間外授業で問題解答・提出）』を取り入れた授業を行っていきたい。
さらに、小テスト等も組み合わせて、効果的な授業を行いたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今回行った授業を元に、オンデマンド授業、ZOOMによる授業のみならず、対面授業においても、今年度行った「反転授業」的要素『前回に係る課題の答え合わせ⇒その回の授業⇒その回に係る課題の掲示（⇒時間外授業で問題解答・提出）』を取り入れた授業を行っていきたい。
さらに、小テスト等も組み合わせて、効果的な授業を行いたい。

科　　目	会計事例研究		
配当年次	1	開講時限	春水1
受講者数	31	回答者数	25

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.85	4.60	5	5	3
2	3.00	3.08	3	4	3
3	4.62	4.68	5	5	4
4	4.46	4.36	5	5	2
5	4.69	4.36	5	5	2
6	4.46	4.28	4・5	5	2
7	4.54	4.56	5	5	4
8	4.69	4.20	4	5	2
9	4.23	4.32	4・5	5	3
10	4.62	4.28	4	5	3
11	4.62	4.44	5	5	3
12	4.92	5.00	5	5	5
13	2.92	2.28	1	5	1
14	2.54	2.92	2	5	1
15	4.54	4.28	4	5	3
16	4.54	4.28	4	5	1
17	4.46	4.16	4	5	1
回答者数	13	25			



受講生の傾向

質問№8「学生からの質問対応」の満足度が、4.69点から4.20点へ0.5ポイント程度低下している。
質問№13「予習時間」が、1時間程度から30分強へ低下している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

関大LMS添付資料は削減し、講義対象とする各会計基準の説明も、ポイントを絞った内容に変えた。
論点となった会計不正事例の紹介を行った。
院生発表時のフィードバックを院生発表時個々に行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

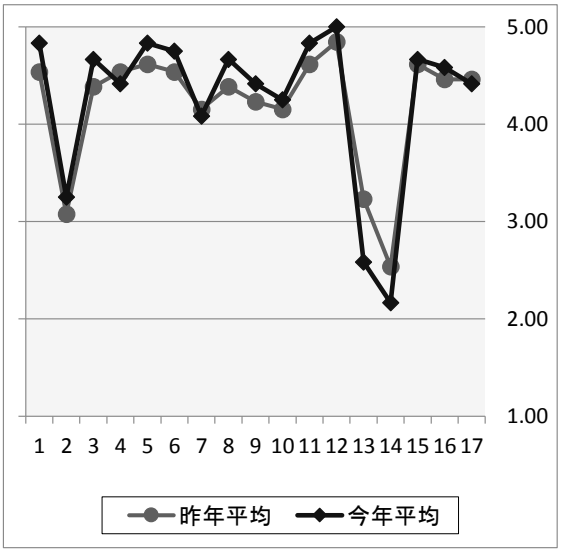
引き続き、グループディスカッションは控えつつ、配布資料を削減し、質問時間を十分にとるように努めたい。説明する会計基準の論点も、消化不良にならないよう、よりポイントを絞った内容に変え、時間的な余裕をもって理解度をアップさせた上で、事例紹介や、院生発表へのフィードバックを進めたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

・関大LMS添付資料やスライド枚数はもっと削減して説明論点を絞り、院生の「解った」感を引き出す。
・グループディスカッションを控える点は継続。各自発表時のフィードバックはより丁寧に個々へ行う。良い着眼点は口頭でその旨を言う。
・関大LMSへ添付した事前提示資料を事前に斜め読みする事だけでも、授業の理解が深まる点を伝える。

科　　目	論文指導(導入)(中村クラス)		
配当年次	1	開講時限	春月5
受講者数	13	回答者数	12

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.54	4.83	5	5	4
2	3.08	3.25	3	4	3
3	4.38	4.67	5	5	4
4	4.54	4.42	4	5	4
5	4.62	4.83	5	5	4
6	4.54	4.75	5	5	4
7	4.15	4.08	4	5	3
8	4.38	4.67	5	5	4
9	4.23	4.42	4	5	4
10	4.15	4.25	4・5	5	3
11	4.62	4.83	5	5	4
12	4.85	5.00	5	5	5
13	3.23	2.58	3	4	1
14	2.54	2.17	3	3	1
15	4.62	4.67	5	5	4
16	4.46	4.58	5	5	4
17	4.46	4.42	4	5	4
回答者数	13	12			



受講生の傾向

本年度の受講生は、1名の実務経験者を除き、所得税法の初学者であったため、所得税法の基本書を輪読させることにした。また、本年度の受講生は、質疑応答を苦手とするようであった。そのため、質疑応答の前にグループワーク(3人～4人ずつのペア)の時間を設け、かつ、質疑応答をペア単位で行わせる方法を採用した。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

本年度も条文を読まずにレジュメを作成した事例が複数発生したため、その事実が確認できた時点で学生に条文の重要性を指導した。また、ペアによる質疑応答において、本年度も条文とは関係のない質疑応答が展開される場面が頻繁に散見されたため、条文に基づく質疑応答が必要な旨、繰り返し指導した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

質疑応答に窮する理由の1つに、所得税法の条文を読まないまま、レジュメを作成していることが確認できた。受講生に対して、条文を必ず付してレジュメを作成すること、また、条文を根拠にした質疑応答を行うようにすることを(出来るようになるまで)繰り返し指導していきたい。

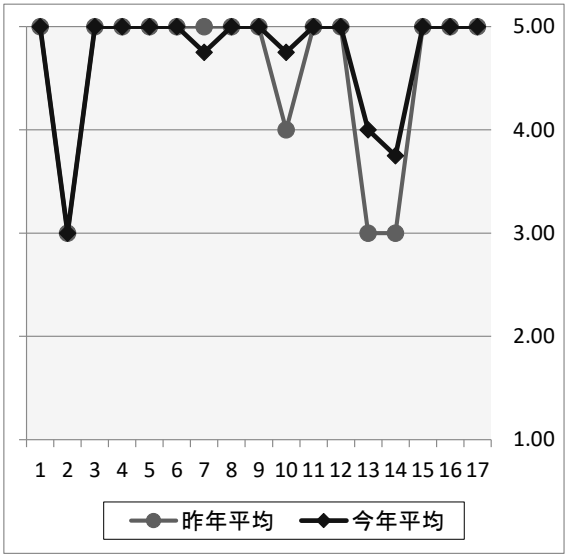
○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

受講生に条文をベースとした質疑応答をしてもらうため、報告レジュメに参考条文を記載させ、条文の内容についても報告させることにしたい。また、質疑応答を活発化させるべく、次年度もペア方式を採用したい。

Ⅲ-(2). 2022 年度授業評価アンケート(秋学期)結果概要

科　　目	中級商業簿記(B)		
配当年次	1	開講時限	秋金5
受講者数	5	回答者数	4

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	5.00	5	5	5
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	4.75	5	5	4
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	5.00	5	5	5
10	4.00	4.75	5	5	4
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	3.00	4.00	4	5	3
14	3.00	3.75	4	4	3
15	5.00	5.00	5	5	5
16	5.00	5.00	5	5	5
17	5.00	5.00	5	5	5
回答者数	1	4			



受講生の傾向

受講生は、再履修の学生と科目等履修生の学生であった。受講態度は真面目で意欲的であった。簿記の習熟度は、ひとりひとり異なる状況であり、学習が進んでいる受講生もいれば、そうでない受講生もいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

簿記一巡の流れを明確に意識するように指導した。講義中は問題演習と質問対応に重点をおき、個々人の習熟度に応じて個別に指導するなど、全員の理解を一人ずつ確認して回った。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

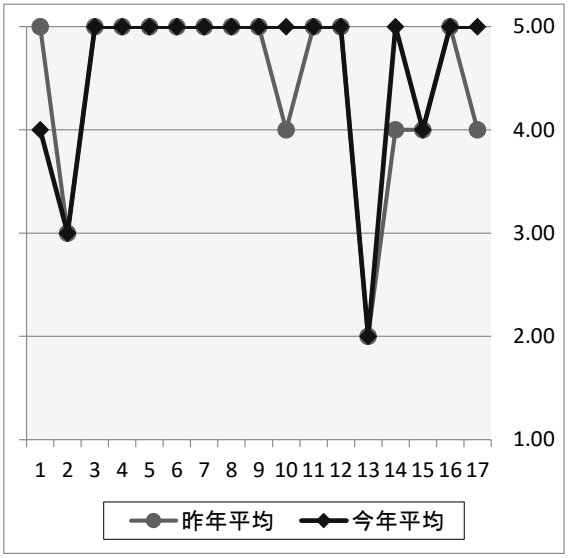
今年度のアンケート結果は概ね高いポイントを得ており、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度のアンケート結果は概ね高いポイントを得ており、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

	中級工業簿記(B)		
配当年次	1	開講時限	秋金1
受講者数	2	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.00	4	4	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	5.00	5	5	5
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	5.00	5	5	5
10	4.00	5.00	5	5	5
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.00	2.00	2	2	2
14	4.00	5.00	5	5	5
15	4.00	4.00	4	4	4
16	5.00	5.00	5	5	5
17	4.00	5.00	5	5	5
回答者数	1	1			



受講生の傾向

本講義は、導入科目の再履修クラスである。受講生はまじめに毎回出席していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

本年度より担任者が変更されたため、本項目は該当しない。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

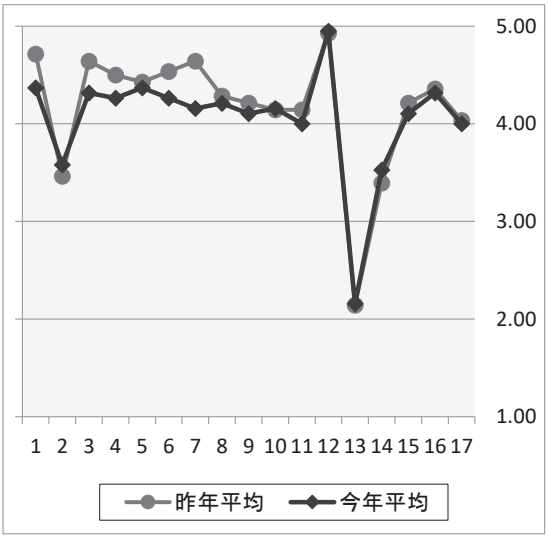
該当なし(担任者変更)

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

本年度の評点は、全体的に良好であったと解釈している。そのため、次年度も本年度と同様の取り組みを継続することが重要であると考えている。

科　　目	上級簿記論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋木4
受講者数	26	回答者数	19

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.71	4.37	4	5	3
2	3.46	3.58	3	5	3
3	4.64	4.32	5	5	1
4	4.50	4.26	5	5	1
5	4.43	4.37	5	5	2
6	4.54	4.26	4	5	2
7	4.64	4.16	4	5	2
8	4.29	4.21	5	5	1
9	4.21	4.11	4	5	2
10	4.14	4.16	4	5	1
11	4.14	4.00	4	5	1
12	4.93	4.95	5	5	4
13	2.14	2.16	1	5	1
14	3.39	3.53	3	5	2
15	4.21	4.11	4	5	2
16	4.36	4.32	5	5	2
17	4.04	4.00	4	5	2
回答者数	28	19			



受講生の傾向

受講生は、未履修の学生と再履修の学生であった。一部の受講生を除き、簿記の習熟度は全体的に低く、学習意欲もあまり高いようには感じられなかった。簿記の基礎力に欠ける受講生も多くいた。また、講義に集中せずに、持ち込んだ端末で別のことをしている受講生も散見された。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義中の説明は、「覚えて解く」(暗記)ではなく、「考えて解く」(理解)を意識するように指導した。また、基本的で重要な論点を優先的に取り上げるようにした。問題演習の時間には、個々人の習熟度に応じて個別に指導するなど、できるかぎり全員の理解を確認して回った。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

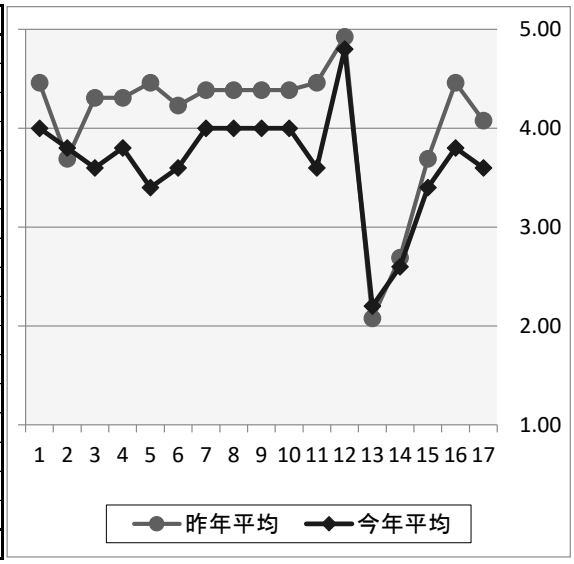
春学期(遠隔授業)のアンケート結果と比べると、今学期の対面授業の方が概ね高いポイントを得ており、受講生のニーズに合致していると考えてよい。全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。ただ、今学期は受講者数が多く、少人数クラス編成とはいえない人数であった。適正なクラス規模で、受講生の全員に対して丁寧な指導ができるようにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度のアンケート結果は昨年度と比べて若干低い項目はあるが、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。ただ、日商2級までの内容を理解できていない受講生に対して、この講義で日商1級レベルの指導をすることには限界がある。授業時間外の学習として講義動画の視聴や積極的な反復練習を勧めることのほか、基礎力の強化として導入科目「中級商業簿記」の履修を推奨していきたい。

科　　目	上級財務会計論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋火2
受講者数	22	回答者数	5

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.46	4.00	4	4	4
2	3.69	3.80	4	4	3
3	4.31	3.60	4	4	2
4	4.31	3.80	4	4	3
5	4.46	3.40	4	4	2
6	4.23	3.60	4	4	2
7	4.38	4.00	4	4	4
8	4.38	4.00	4	4	4
9	4.38	4.00	4	5	3
10	4.38	4.00	4	4	4
11	4.46	3.60	4	4	2
12	4.92	4.80	5	5	4
13	2.08	2.20	2	3	2
14	2.69	2.60	3	3	2
15	3.69	3.40	4	4	1
16	4.46	3.80	4	4	3
17	4.08	3.60	4	4	3
回答者数	13	5			



受講生の傾向

概ね全ての受講生が真摯に受講していたように感じる。今回、聴講生や先取り履修と思われる学生も少なくなかったが、今学期の当該受講生の復習の程度や理解度に疑問を感じることも少なくなかった。また、受講生全体に言えるが、理解度を深めようと意欲のある学生とそうではないと感じる学生との分離を感じた。また、小テストや中間試験の結果と比較すると最終試験の結果が芳しくない。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

オンラインでの講義が数回混じった昨年度と異なり、全ての講義が対面で行われ、小テストも全て教室で紙での実施とした。また、IFRSを扱った講義回での理解度が高くならなかったことを踏まえ、できるだけ他の制度との比較での説明を避け、IFRSのみの内容にとどめ、他制度との比較はまとめて話すようにし、講義速度を上げないように心がけた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

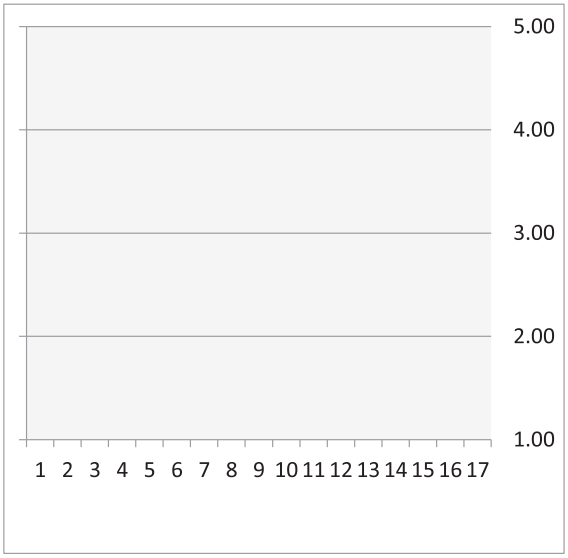
小テストを教室でペーパーで実施することで予習・復習の時間を増加させることができたと推測されるため、小テストについては同様の方法で行うつもりである。最終試験の結果、後半になるほど小テストの結果が悪化する部分があり、より制度比較に基づく理解を深めやすいように講義のポイントや前回までの講義とのつながりを概説するだけでなく、比較という点でもポイントや重要な相違点をまとめて概説し、より正確で深い理解を促すつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

アンケートの回答者が受講生22名中5名しかおらず、アンケート結果がどこまで受講生の全体像を表現しているか不明であり、この結果だけで今後を決定することの危険性は無視できない。その上で対応を考えると、小テストを教室でペーパーで実施することに一定の効果は確認できるため、そのまま継続するとし、説明時間の減少を避けるためIFRS関連の講義回での小テストをしなかったが、復習を促すため、小テストの回数を増加させるだけでなく、重要ポイントの理解度を高めるため、できるだけ純度の高い内容に限定し、骨子だけでも理解しやすいように講義内容を見直すつもりである。

科　　目	上級原価計算論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋金1
受講者数	16	回答者数	0

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	—	—	—	—
2	—	—	—	—	—
3	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—
7	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—
9	—	—	—	—	—
10	—	—	—	—	—
11	—	—	—	—	—
12	—	—	—	—	—
13	—	—	—	—	—
14	—	—	—	—	—
15	—	—	—	—	—
16	—	—	—	—	—
17	—	—	—	—	—
回答者数	0	—			



受講生の傾向

会計士試験受験予定者とそうでない受講生との差が大きいため、試験の難易度調整が難しい。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

春学期同様の科目のアンケートでは復習時間が短いと答えている一方で、一定数の受講者が必要な素点を獲得できずに単位を取得できていない状況がある。
中間及び期末試験への対応として、授業後の原価計算基準の読み込みや計算問題の復習を受講生に呼びかけるように対応したい。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

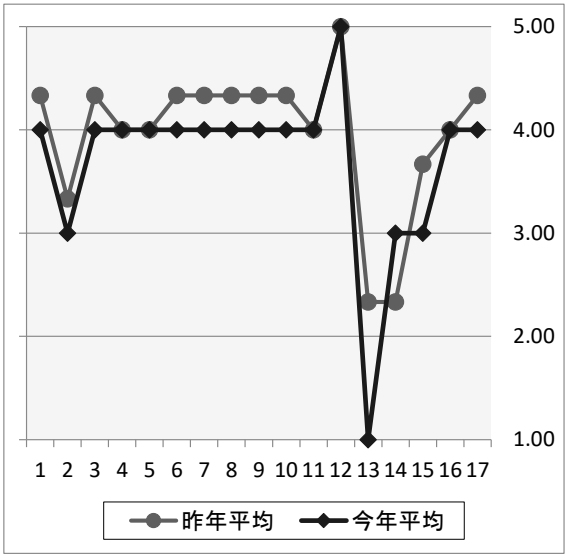
該当なし(昨年度未実施)

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

授業前の予習、復習を促し、効果的に学習内容を定着してもらえるような工夫を行いたい。
また、ホワイトボードを積極的に活用して、計算問題の解法をわかりやすく説明するように努めたい。

科　　目	上級管理会計論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋火4
受講者数	23	回答者数	1

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.33	4.00	4	4	4
2	3.33	3.00	3	3	3
3	4.33	4.00	4	4	4
4	4.00	4.00	4	4	4
5	4.00	4.00	4	4	4
6	4.33	4.00	4	4	4
7	4.33	4.00	4	4	4
8	4.33	4.00	4	4	4
9	4.33	4.00	4	4	4
10	4.33	4.00	4	4	4
11	4.00	4.00	4	4	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.33	1.00	1	1	1
14	2.33	3.00	3	3	3
15	3.67	3.00	3	3	3
16	4.00	4.00	4	4	4
17	4.33	4.00	4	4	4
回答者数	3	1			



受講生の傾向

本クラスは、基本科目のひとつである。受講生は全体としてまじめに出席していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度の評点が全体として良好であったため、本年度も昨年度と同様に、丁寧に講義を行うように留意した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

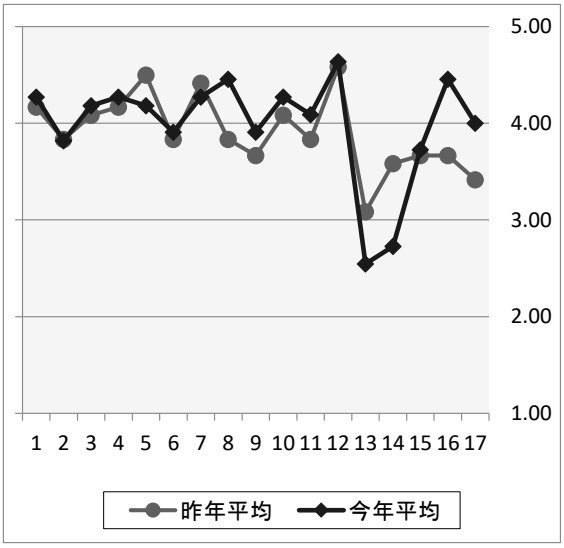
教員の声の大きさなど一部の項目で評点が低下していたが、全体としては多くの点で評点が向上したと考えられる。そのため、今年度に引き続き、次年度も同様の取り組みを継続することが必要だと考えている。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年よりも評点が低下する傾向にあるとはいえ、全体としては良好な評点であったと考えられる。そのため、次年度も今年度と同様の取り組みを継続することが必要だと考えている。ただし、授業の予習と復習に関する結果は十分であるとは言いがたい。そのため、次年度は予習と復習に関する意識付けを行うよう対応策を検討する予定である。

科　　目	監査制度論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋金4
受講者数	19	回答者数	11

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.17	4.27	4	5	3
2	3.83	3.82	4	5	2
3	4.08	4.18	4	5	3
4	4.17	4.27	5	5	3
5	4.50	4.18	4	5	2
6	3.83	3.91	5	5	2
7	4.42	4.27	5	5	3
8	3.83	4.45	4	5	4
9	3.67	3.91	4・5	5	1
10	4.08	4.27	5	5	3
11	3.83	4.09	4・5	5	3
12	4.58	4.64	5	5	4
13	3.08	2.55	2	5	1
14	3.58	2.73	2・3	5	2
15	3.67	3.73	5	5	1
16	3.67	4.45	4	5	4
17	3.42	4.00	4	5	2
回答者数	12	11			



受講生の傾向

基本科目(必修科目)群に属するという関係上、出席率(項目12)は昨年と同レベルの80%以上となっており、相対的に高い出席率であり勉学に対する意欲は相対的に高いように解される。

昨年度の秋学期の評価に比べると全体的に評価が向上している。特に質問への対応(項目8)、宿題と小テスト(項目9)、クラス規模(項目10)、満足度(項目11)といった項目において、昨年実績より向上している。

一方、課題予習(項目13)と復習(項目14)はかなり低下してしまった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

直近改訂の報告基準を含む監査基準及び監査実務指針を反映した網羅的かつ体系的なスライドに基づきつつ、監査論の基礎概念を盛り込んだ講義資料を作成し、LMSを通して事前に配布した。これら講義資料の最後に受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題に対応するための参考文献を列挙した。

講義が2回終了する毎に講義の理解度を確認する目的と復習を動機付けるために、小テストを実施し翌週までにそれらを添削しコメントを付記した上で各個に返却した。返却に当たっては、返却時の講義の冒頭で添削上のポイントを解説した。

講義2回→復習課題実施→添削→返却(添削ポイント・講評)を繰り返すことで、各受講生にエッセイの書き方(重要論点の抽出と一貫した論旨の展開)を習得できるように心懸けた。

LMSによる動画配信のための講義録画を適時に行い、配信を当日中に行えるように措置した。

今後の対応

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

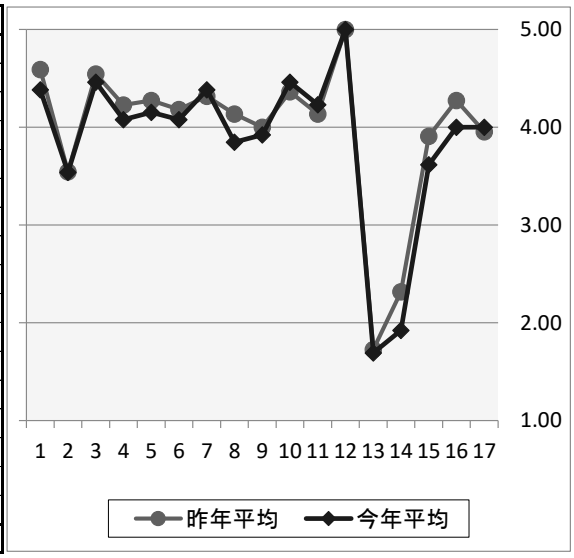
講義形式が全面的に対面となったため、一方通行の講義とならないように小テスト等による教育効果の確認方法を考え、添削済み小テスト解答用紙の見直しを促すような措置を講じることにしたい。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

添削済みの小テストの解答用紙を翌講義で返却する際に採点のポイントとともに模範答案へのコメントも説明すると同時に、復習課題の予復習を促すよう講義時に毎回言及するようにしたい。

科　　目	監査基準論(B)		
配当年次	1	開講時限	秋水1
受講者数	18	回答者数	13

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.59	4.38	4	5	4
2	3.55	3.54	3	5	3
3	4.55	4.46	4	5	4
4	4.23	4.08	4	5	3
5	4.27	4.15	4	5	3
6	4.18	4.08	4	5	1
7	4.32	4.38	4･5	5	3
8	4.14	3.85	4	5	3
9	4.00	3.92	3	5	3
10	4.36	4.46	4	5	4
11	4.14	4.23	4	5	3
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.73	1.69	1	5	1
14	2.32	1.92	1･2	4	1
15	3.91	3.62	3	5	3
16	4.27	4.00	4	5	3
17	3.95	4.00	4	5	3
回答者数	22	13			



受講生の傾向

全体的に昨年と同様の傾向を示している。
ただし、質問№.14の復習時間が昨年の2.32から1.92へ0.4ポイント低下している。これは、45分前後から30分前後への減少を表している。パノプトの有効活用が影響している可能性がある(授業の振り返りに際し、パノプト動画の操作性は以前より向上していると思われる事から)。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

授業スピードは現状維持を意識した。
配信提示スライドのページ数や添付資料数を削減し、重点項目の説明により時間をかけた。
また、監査基準論の理解に際しては、基本項目を血肉化させる(一度憶えこむ)事が避けられない点を強調し、受講前に当日のスライド内容の概要を把握しておく事が血肉化に有用である点を伝達した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

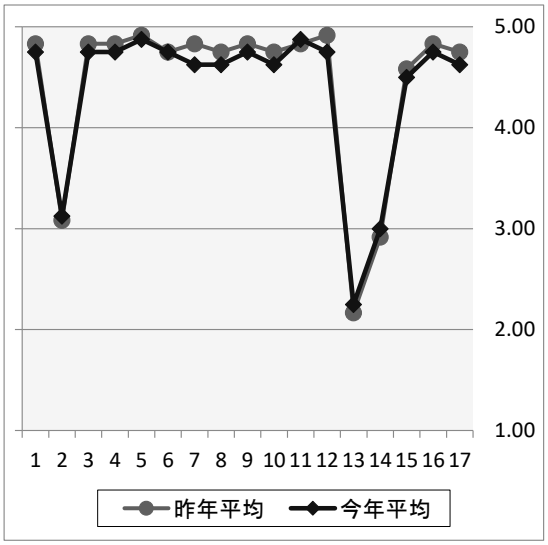
引き続き授業スピードは抑制する。
提示資料も継続して抑制する。
各授業最後の小設問には十分に時間を確保し、質問の時間を確保する。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

授業スピードは現状維持を心掛ける。
配信提示スライドのページ数や添付資料数は削減する。重点項目の説明により時間をかける。
監査基準論の理解に際しては、基本項目を一度憶えこむ事が避けられない点を強調する。受講前に当日のスライド内容の概要を把握しておく事が憶えこみに有用である点を伝達する。
さらに、各授業項目に関し、当該授業項目を理解した後に何が待ち受けているか？監査の現場でのどの論点を解決してくれるのか？を最後に付言する。

科　　目	企業法(B)		
配当年次	1	開講時限	秋木1
受講者数	17	回答者数	8

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.83	4.75	5	5	4
2	3.08	3.13	3	4	3
3	4.83	4.75	5	5	4
4	4.83	4.75	5	5	4
5	4.92	4.88	5	5	4
6	4.75	4.75	5	5	4
7	4.83	4.63	5	5	4
8	4.75	4.63	5	5	4
9	4.83	4.75	5	5	4
10	4.75	4.63	5	5	4
11	4.83	4.88	5	5	4
12	4.92	4.75	5	5	4
13	2.17	2.25	2	4	1
14	2.92	3.00	2・4	4	2
15	4.58	4.50	5	5	3
16	4.83	4.75	5	5	4
17	4.75	4.63	5	5	4
回答者数	12	8			



受講生の傾向

今年度の受講生は17名であって、授業を運営するにはちょうどいい人数であった。昨年度よりも若干減少しているが、平年通りの人数といえる。授業に関しては、出席率はよく、授業に対して受講時のみならず、小テスト対応においてもまじめに取り組んでいた。ただ、その理解度についてはばらつきはあった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度も、講義による企業法の知識の習得のみならず、習得した内容を企業法の問題解決、すなわち短答式の問題や論述ができる学力を習得できるように心がけた。限られた時間ではあるが、企業法の講義で学んだ内容を応用して問題を解く方法や法的の文章の組み立て方や文章表現の仕方などを、とりわけ小テストを通じて教授した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

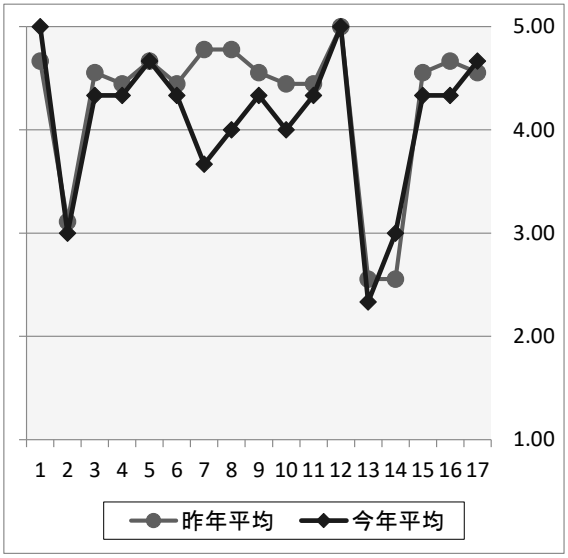
授業が企業法の知識の習得にとどまらないよう工夫していきたい。授業の中では、小テストとして短答式と論述式を扱っているが、そこで単なる習得した知識の確認にとどまらず、それを応用したりその内容を自ら論述できる能力を身につけることができるように心がけたい。また、企業法基礎講座と内容は並行しているので、うまく組み合わせることで、相乗効果が出るようにもしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

企業法の講義内容の理解ということはできているが、それを用いて応用的に問題を解決したり、文章で書いたりということになると難しくなる学生が多い。このギャップを埋められるような授業、すなわち、講義と問題解決および文章作成のバランスをうまく考慮した授業を行いたい。

科　　目	会計専門職業倫理(B)		
配当年次	2	開講時限	秋木1
受講者数	6	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	5.00	5	5	5
2	3.11	3.00	3	3	3
3	4.56	4.33	4	5	4
4	4.44	4.33	4	5	4
5	4.67	4.67	5	5	4
6	4.44	4.33	4	5	4
7	4.78	3.67	4	4	3
8	4.78	4.00	3・4・5	5	3
9	4.56	4.33	4	5	4
10	4.44	4.00	3・4・5	5	3
11	4.44	4.33	4	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.56	2.33	2	3	2
14	2.56	3.00	2・3・4	4	2
15	4.56	4.33	4	5	4
16	4.67	4.33	4	5	4
17	4.56	4.67	5	5	4
回答者数	9	3			



受講生の傾向

CPA受験者4名、留学生2名(うち1名は単位取得断念)という構成であり、全体的にレベルは高かった。留学生も税務の実務に携わっており、相対的に良く理解できていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

少人数のクラスでグループを編成すると、負担が偏るため、今回は事例研究を1人ですることとした。対象は、最近の事例で、興味のある不正事案を取り上げることとした。そのため、負担の偏りは回避できたと考えられる。受講者の人数次第で対応を検討していく。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

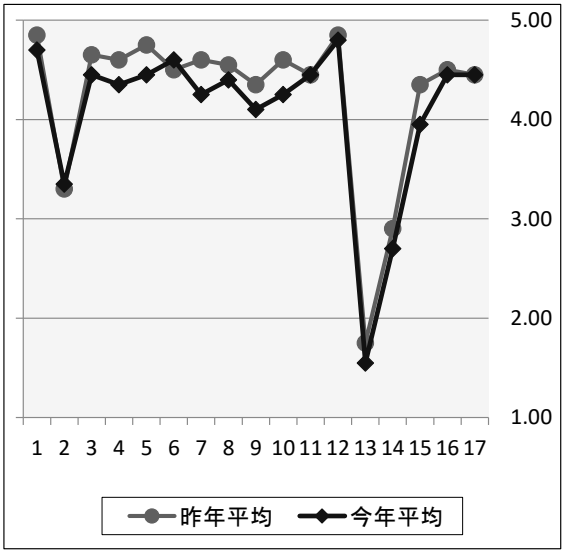
受講生のレベルによって、グループワークが特定の受講生の負担になってしまう結果が見られ反省した。今後はグループの編成等(人数、レベルの差のある受講生の組み合わせ)に配慮をしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

まずは、授業中にアンケートを実施したにも拘わらず、3名の実施者しか居なかったことを反省している。今後は必ず実施させることとしたい。受講者の人数及びレベルにより、進め方を変えていく必要がある。

科　　目	財表作成簿記論		
配当年次	1	開講時限	秋金3
受講者数	25	回答者数	20

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.85	4.70	5	5	3
2	3.30	3.35	3	5	3
3	4.65	4.45	4	5	4
4	4.60	4.35	4	5	3
5	4.75	4.45	5	5	3
6	4.50	4.60	5	5	4
7	4.60	4.25	4	5	3
8	4.55	4.40	4	5	3
9	4.35	4.10	4	5	3
10	4.60	4.25	4	5	3
11	4.45	4.45	5	5	3
12	4.85	4.80	5	5	4
13	1.75	1.55	1	3	1
14	2.90	2.70	3	4	1
15	4.35	3.95	4	5	1
16	4.50	4.45	5	5	3
17	4.45	4.45	5	5	3
回答者数	20	20			



受講生の傾向

受講生は、資格試験の勉強に取り組んでいる学生が多く、全体的に簿記の習熟度が高い状況であった。ほとんどの受講生は向上心が高く、資格試験対策に注力している受講生も講義の趣旨を理解し、この機会に知見を深めようと努めていた。しかし、ごく一部の受講生は、自分の解き方に固執して講義の趣旨を受け入れようとしなかったり、資格試験での重要度が低いと考えて真面目に取り組んでいなかったり、講義中に関係ない内容のテキスト等を開いて勉強しているなど、関心がない様子であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

基本的で重要な論点を優先的かつ反復的に取り扱うことで、知識の定着が図られるようにした。とくに連結財務諸表を作成するときには、計算問題としてテクニカルに解くのではなく、簿記一巡の流れを明確に意識して仕訳するように、そしてその仕訳の意味を理解するように指導し、そのように講義資料も工夫した。問題演習の時間には、個々人の習熟度に応じて個別に指導するなど、できるかぎり全員の理解を確認して回った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

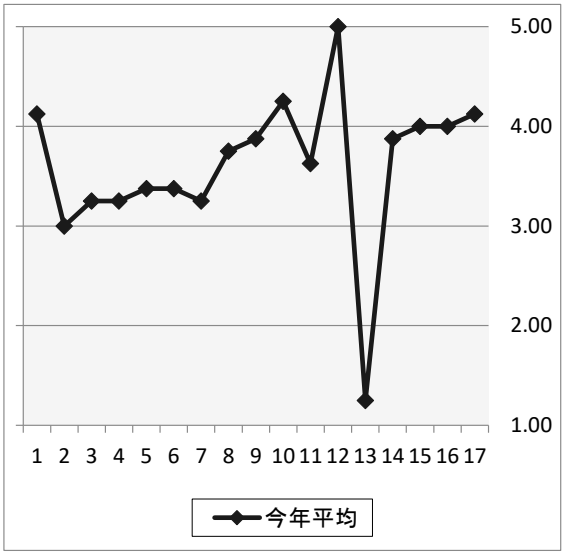
今年度のアンケート結果は概ね高いポイントを得ており、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度のアンケート結果は昨年度と比べて若干低い項目はあるが、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

科　　目	企業分析論		
配当年次	1	開講時限	秋火3
受講者数	16	回答者数	8

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.13	4	5	3
2	—	3.00	3	3	3
3	—	3.25	4	5	1
4	—	3.25	3	5	1
5	—	3.38	3	5	2
6	—	3.38	4	5	1
7	—	3.25	4	5	1
8	—	3.75	5	5	2
9	—	3.88	4	5	2
10	—	4.25	4	5	4
11	—	3.63	3	5	2
12	—	5.00	5	5	5
13	—	1.25	1	2	1
14	—	3.88	5	5	2
15	—	4.00	4	5	3
16	—	4.00	4	5	3
17	—	4.13	4	5	3
回答者数	—	8			



受講生の傾向

受講生はおおむね基礎的な学力が高く、さらに、非常に熱心に学習していた。ただし、一部の受講生は必ずしも熱心とは言えない学生もいた。
毎回、大量の計算を伴う課題を出したが、ほぼ毎回提出し、間違いについては修正して再提出をしていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は授業評価を行わなかったが、ZOOMによる少人数の授業であり、毎回の授業を通してアンケート的なものを行っていた。今年度もZOOMによる授業を行い、反転授業的要素を取り入れ、前回の授業に係る課題の提出⇒「受講者による答え合わせ（プレゼンテーション）⇒授業⇒課題の提示」⇒前回の授業に係る課題の再提出・今回の授業に係る課題の提出（カッコ内を授業で行い、それ以外は時間外学習）という流れで授業を行った。答え合わせの解説並びに授業は、テキストに加え、関連資料を用意して受講生の理解を助けるように努めた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

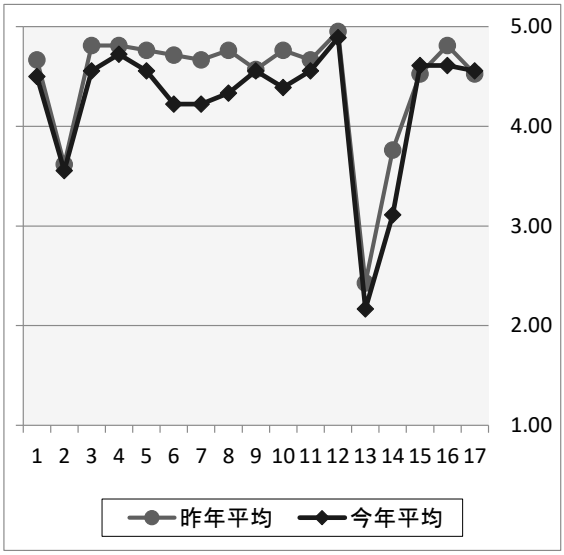
該当なし（昨年度未実施）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

来年度からは「対面授業」を実施することになるが、これまで同様、反転授業的要素を取り入れた授業の流れを行っていきたい。

科　　目	監査報告論		
配当年次	1	開講時限	秋月3
受講者数	24	回答者数	18

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.50	4・5	5	4
2	3.62	3.56	3	5	3
3	4.81	4.56	5	5	4
4	4.81	4.72	5	5	4
5	4.76	4.56	5	5	4
6	4.71	4.22	4	5	2
7	4.67	4.22	4	5	3
8	4.76	4.33	4	5	3
9	4.57	4.56	5	5	4
10	4.76	4.39	4	5	3
11	4.67	4.56	5	5	4
12	4.95	4.89	5	5	3
13	2.43	2.17	3	4	1
14	3.76	3.11	3	5	2
15	4.52	4.61	5	5	4
16	4.81	4.61	5	5	4
17	4.52	4.56	5	5	4
回答者数	21	18			



受講生の傾向

直近改訂の監査基準及び報告基準を反映するとともに監査論の基礎概念を盛り込んだ講義資料を作成し、LMSを通して事前に配布した。受講生の出席状況（項目12）は昨年と同様にほぼ90%を確保し極めて高い出席率となっており、受講生のモラールも相対的に高いと看做し得る。

しかし授業評価に係わる全ての項目（項目3～11）で、受講生による評価が昨年度より低下している。一方、予習時間（項目13）と復習時間（項目14）も昨年度より若干、悪化している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

監査報告に関連する監査基準と関連する監査理論の基礎概念に基づき講義資料を作成しLMSで配布するとともに、重要論点とともに解説を加えた。当該講義資料の最後には、受講生に復習を促すための復習課題と、当該課題を遂行するために必要となる参考文献を列挙した。

2回分の講義が終了する毎に理解度を確認するための論述式小テストを隔週で実施し、添削後に採点のポイントを全員に配布し模範答案にコメントを付して解説を行った。個々に返却することで各自がエッセイの書き方（重要論点の抽出と一貫した論旨の展開）を習得できるよう心懸けた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

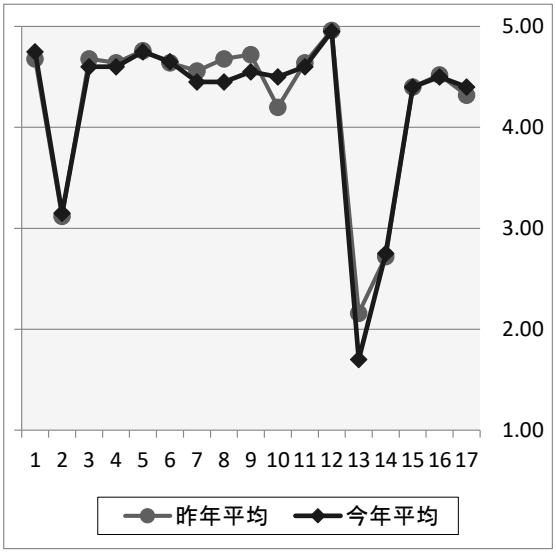
対面を前提にして出席者のモラールを高めるべく講義→復習（小テスト）→添削→返却・講評を行い、さらに小テストの見直しを動機付けるような措置を講じるよう努力する。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義中に復習課題として実施すべき範囲を毎回明示することで、復習を促すよう動機付けたい。

科　　目	会社法		
配当年次	1	開講時限	秋木3
受講者数	31	回答者数	20

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.68	4.75	5	5	4
2	3.12	3.15	3	4	3
3	4.68	4.60	5	5	4
4	4.64	4.60	5	5	4
5	4.76	4.75	5	5	4
6	4.64	4.65	5	5	3
7	4.56	4.45	5	5	3
8	4.68	4.45	5	5	3
9	4.72	4.55	5	5	3
10	4.20	4.50	5	5	3
11	4.64	4.60	5	5	4
12	4.96	4.95	5	5	4
13	2.16	1.70	1	3	1
14	2.72	2.75	2	5	1
15	4.40	4.40	5	5	2
16	4.52	4.50	4･5	5	4
17	4.32	4.40	4	5	3
回答者数	25	20			



受講生の傾向

今回の会社法の受講生は、31人と近年の会社法の受講者数から考えると平均的であった。公認会計士試験を受験する学生にとっては、必須の科目になるが、必ずしも公認会計士試験を受験しない学生もまた多く受講しているようであった。受講態度はおおむね良好であり、熱心に取り組んでいるようであった。ただ、理解度についてはそもそもの事前勉強量の違いなどからさまざまであったように思う。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今年度は会社法について広く全体的な理解ということを心掛けた。深い内容については、極力上級会社法で扱うこととした。さらに、広い内容とはいえお互いの項目がリンクしている部分も多く、これらを結びつけながら授業するということを工夫した。また、本科目は企業法の延長にある科目であるので、企業法で扱った部分については、すでに理解していることとして進め、会社法が単なる企業法の復習科目とならないように意識した。さらには、課外講座ではあるが、基礎講座を用いて、問題演習や論文の書き方について会社法の復習をすることとした。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

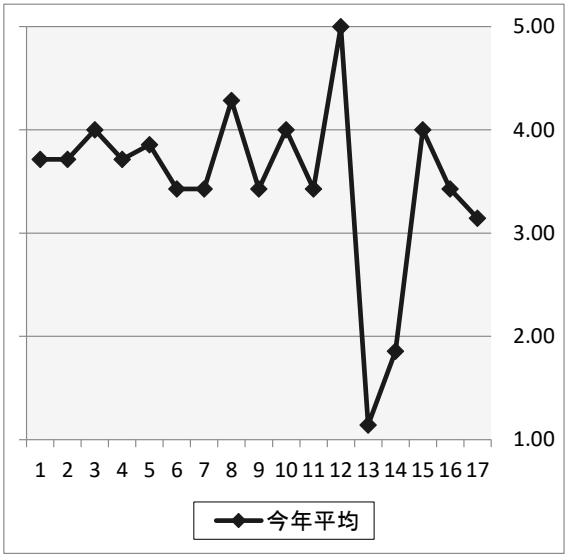
企業法と会社法の授業の連携を意識しながら、受講生には授業を聞いてもらうよう工夫をしていくことは継続して行っていく。その他、企業法に加えて、会社法でも基礎講座を実施している。会社法の学習内容は企業法よりも内容が発展的であるため、学生の理解をアシストし、かつ学生の応用力および論述能力を向上させて行くためにも、より効果的な基礎講座の活用を模索していきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

会社法は、企業法の発展科目としての位置づけであり、かつ上級会社法の前提となる科目である。また、会社法の授業については、これに対応した基礎講座を開講している。重要なことは、これらの連携である。課外講座を含めてこれらの各種科目を有機的に結合させて授業を行うことが必要となる。企業法関連科目の中の一つとしての会社法としての位置づけを意識しながら、受講生がトータルとして、会社法ひいては企業法全体を理解できるように心がけたい。

科　　目	特殊講義（税務と会計）		
配当年次	1	開講時限	秋前火6～7
受講者数	12	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	3.71	3・4・5	5	2
2	—	3.71	3	5	3
3	—	4.00	4	5	3
4	—	3.71	4	5	2
5	—	3.86	4	5	3
6	—	3.43	3	5	2
7	—	3.43	3	5	2
8	—	4.29	4	5	4
9	—	3.43	3	5	3
10	—	4.00	4	5	2
11	—	3.43	4	5	1
12	—	5.00	5	5	5
13	—	1.14	1	2	1
14	—	1.86	2	2	1
15	—	4.00	4	4	4
16	—	3.43	4	4	1
17	—	3.14	3・4	4	1
回答者数	—	7			



受講生の傾向

本科目の受講者数は12名であるが、大学院生と社会人の共同授業であって、うち社会人は5名であった。本科目の授業は、コロナ禍の影響を受け久しぶりの授業となったが、対面形式での実施で、出席率はよく、学生もまじめに授業に取り組んでいた。なお、授業のスタートは18時30分であるため、社会人にとってはこれに間に合うことが難しく、若干の遅刻者が見られた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度まではコロナ禍の影響で不開講となっていたが、今年度はようやく開講することができた。しかしながら、いまだコロナ禍の影響を受けたものとならざるを得なかったが、梅田キャンパスにおける院生と社会人との共同授業という特性を、極力生かしたような授業運営、例えば、授業における対話やグループ演習などを心掛けた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

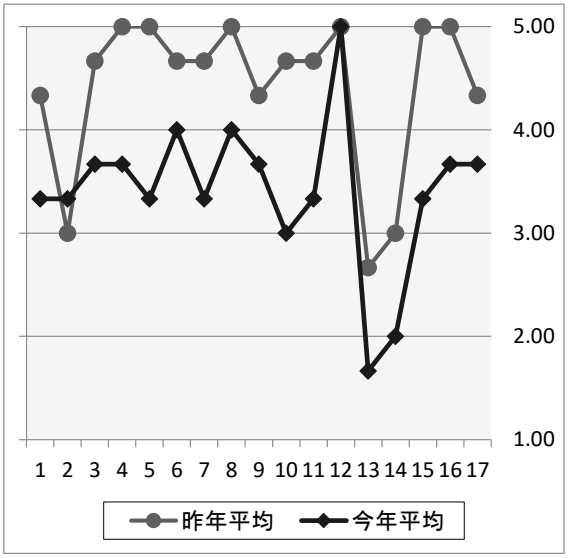
該当なし（昨年度不開講）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後は、大学の方針として授業におけるコロナ対応は緩和されるとのことなので、授業中での学生と社会人との交流が積極的に行われるような授業運営、すなわち対話およびグループ演習を多く取り組んだ授業運営としていきたい。

科　　目	特殊講義（公会計論）		
配当年次	1	開講時限	秋月2
受講者数	10	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.33	3.33	3	4	3
2	3.00	3.33	3	4	3
3	4.67	3.67	4	4	3
4	5.00	3.67	3	5	3
5	5.00	3.33	2・3・5	5	2
6	4.67	4.00	3・4・5	5	3
7	4.67	3.33	2・3・5	5	2
8	5.00	4.00	3・4・5	5	3
9	4.33	3.67	3	5	3
10	4.67	3.00	3	3	3
11	4.67	3.33	2・3・5	5	2
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.67	1.67	1	3	1
14	3.00	2.00	1・2・3	3	1
15	5.00	3.33	2・3・5	5	2
16	5.00	3.67	3	5	3
17	4.33	3.67	3	5	3
回答者数	3	3			



受講生の傾向

サンプル数が少ないため断定できないことが多いが、昨年も回答数が3であり、比較可能だとすると、昨年度の評価と今年度の評価の差が大きい。出席率は高いものの、予習・復習に欠ける時間が大幅に減っている。これと他の項目の落ち込みに連動性があるように感じる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は演習形式で行ったが、今年は負担を減らす目的もあり、自治体の分析に限定することにした。また、分析手順を示すため、そのサンプルを示したが、そのため履修者による創意工夫の余地を減らしたようである。総じて、今年度の工夫は効果が薄かったように思う。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

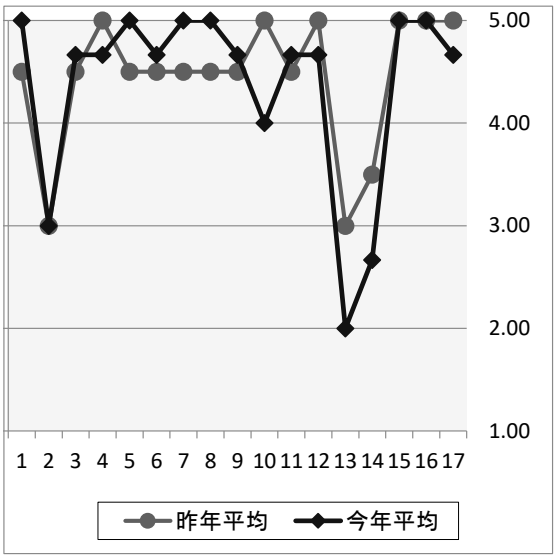
今年度も人数は大きく増えないようであると、昨年同様に、自治体や非営利法人の実際の財務諸表を分析させながら、公会計の論点を講じるという演習形式をも取り入れる。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

次年度は履修者の緊張度を維持できるように昨年度並みに負荷を高めようと思う。端的には予習復習の時間を高めるということ、そのことにより、参加意識を高めるようにしたい。

科　　目	特殊講義（貸借対照表論）		
配当年次	1	開講時限	秋月3
受講者数	7	回答者数	3

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	5.00	5	5	5
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.50	4.67	5	5	4
4	5.00	4.67	5	5	4
5	4.50	5.00	5	5	5
6	4.50	4.67	5	5	4
7	4.50	5.00	5	5	5
8	4.50	5.00	5	5	5
9	4.50	4.67	5	5	4
10	5.00	4.00	3・4・5	5	3
11	4.50	4.67	5	5	4
12	5.00	4.67	5	5	4
13	3.00	2.00	1・2・3	3	1
14	3.50	2.67	3	3	2
15	5.00	5.00	5	5	5
16	5.00	5.00	5	5	5
17	5.00	4.67	5	5	4
回答者数	2	3			



受講生の傾向

受講者の傾向は例年と変わらないが、今年度は予習復習にかける時間が少し少ないようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

履修人数が少ないことから演習形式を採用し、全員に何度も発言機会を与えるようにした。本科目の主題だけでなく、会計全般を通して質問し、回答へ誘導した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

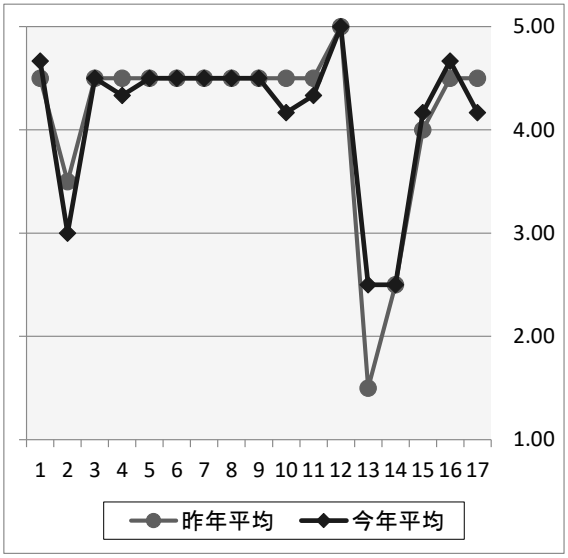
人数次第であるが、本年度・前年度同様に、随時演習形式を取り入れる。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

次年度も人数次第であるが、10名を超えるまでは、昨年度・今年度と同じ方法を採用したい。

科　　目	特殊講義（企業情報の読み方と使い方）		
配当年次	1	開講時限	秋後火6～7
受講者数	13	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.50	4.67	5	5	4
2	3.50	3.00	3	3	3
3	4.50	4.50	4・5	5	4
4	4.50	4.33	4	5	4
5	4.50	4.50	4・5	5	4
6	4.50	4.50	4・5	5	4
7	4.50	4.50	4・5	5	4
8	4.50	4.50	4・5	5	4
9	4.50	4.50	4・5	5	4
10	4.50	4.17	4	5	3
11	4.50	4.33	4	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.50	2.50	2・3	4	1
14	2.50	2.50	2・3	3	2
15	4.00	4.17	4	5	4
16	4.50	4.67	5	5	4
17	4.50	4.17	4	5	3
回答者数	2	6			



受講生の傾向

大学院生が8割、社会人が2割ほどで、会計の知識は大学院生の方が圧倒的にあり、コミュニケーション能力は社会人が高いという傾向にある。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

大学院生と社会人のディスカッションの機会を増やすことに留意した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

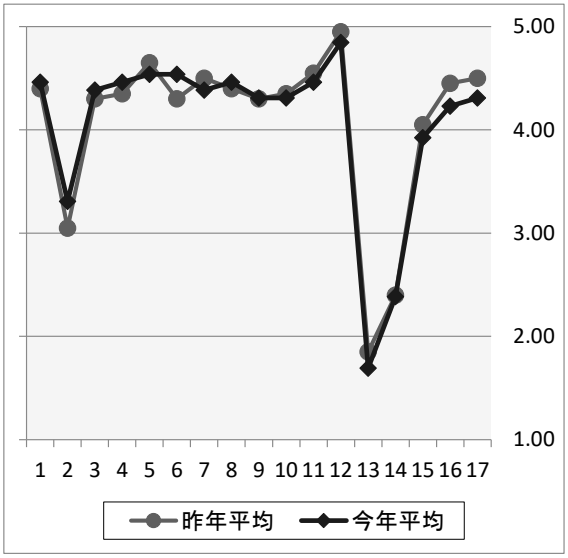
社会人向けの講義構成のため、大学院生には簡単な内容となっている。
ディスカッションの機会を増やしたいと考えている。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

社会人には会計の基礎知識の習得を、大学院生にはコミュニケーション能力の向上をはかれるように留意したい。
今年は社会人と大学院生のディスカッションの機会を設けることができたが、次年度も引き続きディスカッションの機会を増やしていきたい。

科　　目	特殊講義（連結会計実務）		
配当年次	1	開講時限	秋水3
受講者数	18	回答者数	13

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.40	4.46	4	5	4
2	3.05	3.31	3	4	3
3	4.30	4.38	4	5	4
4	4.35	4.46	5	5	3
5	4.65	4.54	5	5	4
6	4.30	4.54	5	5	4
7	4.50	4.38	4･5	5	3
8	4.40	4.46	5	5	3
9	4.30	4.31	4	5	4
10	4.35	4.31	4	5	4
11	4.55	4.46	4	5	4
12	4.95	4.85	5	5	4
13	1.85	1.69	2	3	1
14	2.40	2.38	2	3	2
15	4.05	3.92	4	4	3
16	4.45	4.23	4	5	4
17	4.50	4.31	4	5	4
回答者数	20	13			



受講生の傾向

公認会計士受験を考えている、学習意欲の高い生徒が多く受講していた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

受験に必要な解法テクニックを教えるのではなく、会計処理の背景、考え方を習得してもらえるように意識して講義を行った。また、講義中に問題演習を行う時間を増やして、期末テストまでに理解の状況確認及び期末テストに向けた各自の課題に気づいてもらえるように工夫した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

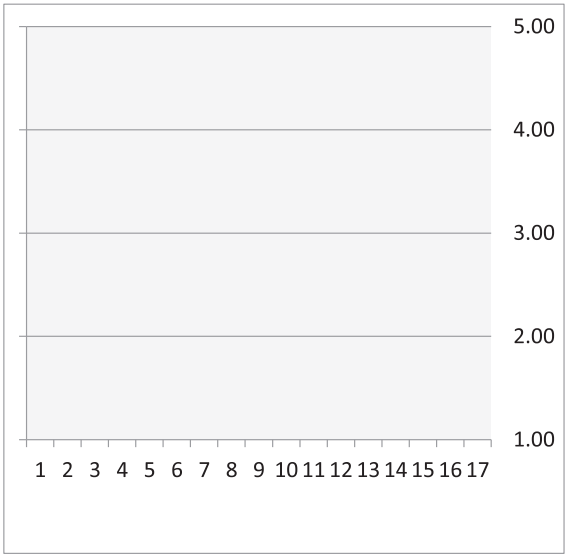
テストの様子を見ると、もう少し難しかったように思うので、次年度はこまめに小テストを実施し、学生の復習時間を確保させたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度で本講義は終了となるため、特に本講義に対する今後の対応はない。

科　　目	企業価値マネジメント論		
配当年次	2	開講時限	秋金2
受講者数	2	回答者数	0

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	—	—	—	—
2	—	—	—	—	—
3	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—
7	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—
9	—	—	—	—	—
10	—	—	—	—	—
11	—	—	—	—	—
12	—	—	—	—	—
13	—	—	—	—	—
14	—	—	—	—	—
15	—	—	—	—	—
16	—	—	—	—	—
17	—	—	—	—	—
回答者数	0	—			



受講生の傾向

少人数であるが授業には積極的に参加してくれている。
しっかりと自分の考えをもって発言される受講生が選択してくれていると思う。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

授業の内容としては、財務会計・管理会計・税務会計の基本的な知識を有することを前提として、伊藤レポートを題材として企業価値向上のための理論を伝えるとともに、昨今の企業活動(開示情報など)の動向を伝えるようにしている。また、こちらから一方的に情報を提供するのではなく、受講生の意見を聞いてその意見に対して議論するように努めた。
限られた選択単位のなかで任意の科目を選んでくれた受講生に対して、今後社会に出た後で役に立つと考える情報や経験談を講義の中でできる限り伝えるようにしている。受講してくれた学生の活躍に期待している。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

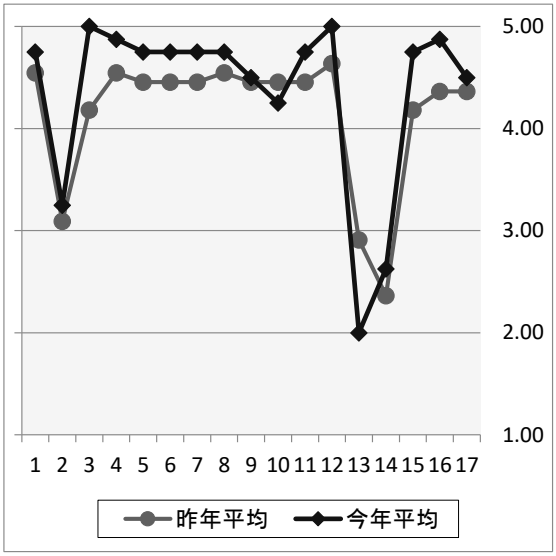
該当なし（昨年度未実施）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨今の企業価値をめぐる議論の潮流をアップデートし、受講者が社会に出た後に役立つ講義となるよう努めたい。
具体的には、「伊藤レポート3.0（SX版伊藤レポート）」の内容等を講義にて取り入れたい。

科　　目	租税法理論		
配当年次	2	開講時限	秋火4
受講者数	10	回答者数	8

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.55	4.75	5	5	4
2	3.09	3.25	3	4	3
3	4.18	5.00	5	5	5
4	4.55	4.88	5	5	4
5	4.45	4.75	5	5	4
6	4.45	4.75	5	5	4
7	4.45	4.75	5	5	4
8	4.55	4.75	5	5	4
9	4.45	4.50	4・5	5	4
10	4.45	4.25	4	5	3
11	4.45	4.75	5	5	4
12	4.64	5.00	5	5	5
13	2.91	2.00	1	5	1
14	2.36	2.63	3	4	1
15	4.18	4.75	5	5	4
16	4.36	4.88	5	5	4
17	4.36	4.50	4・5	5	4
回答者数	11	8			



受講生の傾向

受講生10名の内訳は、会計士志望1名、税理士志望7名、その他2名であった。質問No.15及び16の結果から、受講生は、本科目を通じて知識向上を実感できたようである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度と同様、公認会計士試験の過去問を題材に受講生との議論に時間を多くとるようにした。また、当該時間を確保するため、講義内容を絞り込み、講義レジュメの見直しを行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

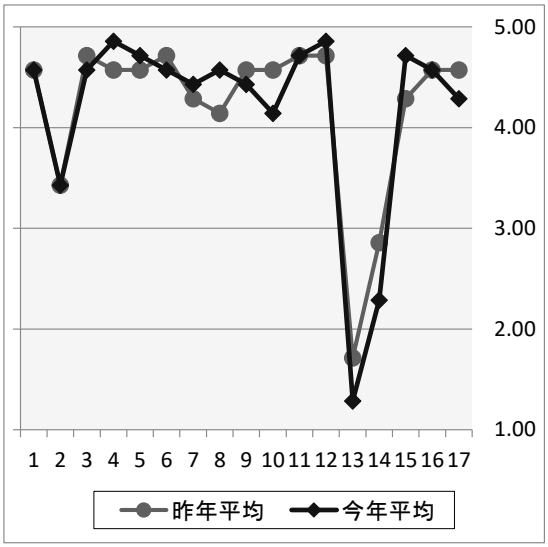
公認会計士試験の過去問を題材に受講生との議論を行うことは、受講生の理解向上に有効であると思われる。次年度も引き続き、受講生との議論の時間を確保すべく、講義内容の更なる絞り込みと講義レジュメの充実を行っていきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義内で取り扱うべき公認会計士試験の過去問は増え続けているが、過去問を題材に受講生と議論を行うことは教育効果が高いと考える。このため、議論の時間を出来る限り多く確保すべく、講義内容の更なる絞り込みと講義レジュメの見直しを引き続き行っていきたい。

科　　目	租税法会計論		
配当年次	2	開講時限	秋月4
受講者数	9	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.57	4.57	5	5	4
2	3.43	3.43	3	4	3
3	4.71	4.57	5	5	4
4	4.57	4.86	5	5	4
5	4.57	4.71	5	5	4
6	4.71	4.57	5	5	4
7	4.29	4.43	4	5	4
8	4.14	4.57	5	5	4
9	4.57	4.43	4	5	4
10	4.57	4.14	4	5	4
11	4.71	4.71	5	5	4
12	4.71	4.86	5	5	4
13	1.71	1.29	1	3	1
14	2.86	2.29	2・3	3	1
15	4.29	4.71	5	5	4
16	4.57	4.57	5	5	4
17	4.57	4.29	4	5	4
回答者数	7	7			



受講生の傾向

受講生9名の内訳は、会計士志望2名、税理士志望4名、他の志望3名であった。本科目では、所得税法と消費税法を学習する関係から、受講生は講義時間外の学習が必要となる。しかし、質問No.13及び14の通り、当該学習時間は昨年度を下回る結果となった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度と同様、公認会計士試験の過去問を難易度に沿って講義レジュメに配列し、受講生が授業内で出来る限り多くの過去問を解答できるようにした。また、解答は計算プロセスを含むものを別途配布した上で、難度の高い箇所を重点的に解説した。あと、欠席者の学習をフォローすべく、今年度はパナプトを使って授業録画を行い、講義後速やかにLMSにアップした(講義レジュメ等も含めて)。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

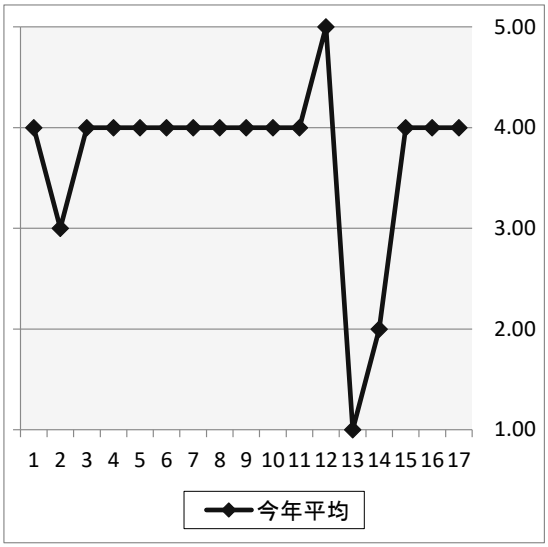
今年度に採用した方法は、初学者だけでなく、既修者への対応も兼ねたものであり、教育上ある程度の効果があったものと思われる。この方法の前提には、講義レジュメと解答(別配布資料)の内容充実が不可欠である。次年度も引き続き、それらの内容の充実を図りつつ、今年度に採用した方法を継続したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

講義レジュメの充実(特に、最新の過去問の取り込み)、重点を置いた解答解説、授業録画等のLMSアップを今後も行うことで、教育効果の更なる向上を目指していきたい。

科　　目	コーポレート・ファイナンス論		
配当年次	2	開講時限	秋月3
受講者数	3	回答者数	1

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.00	4	4	4
2	—	3.00	3	3	3
3	—	4.00	4	4	4
4	—	4.00	4	4	4
5	—	4.00	4	4	4
6	—	4.00	4	4	4
7	—	4.00	4	4	4
8	—	4.00	4	4	4
9	—	4.00	4	4	4
10	—	4.00	4	4	4
11	—	4.00	4	4	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	1.00	1	1	1
14	—	2.00	2	2	2
15	—	4.00	4	4	4
16	—	4.00	4	4	4
17	—	4.00	4	4	4
回答者数	—	1			



受講生の傾向

受講生は基礎的な学力が高く、さらに、非常に熱心に学習していた。
毎回、3名は理論問題と必要に応じて計算問題の課題を出したが、毎回提出し、間違いについては修正して再提出をしていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は授業評価を行わなかったが、ZOOMによる少人数の授業であり、毎回の授業を通してアンケート的なものを行っていた。今年度もZOOMによる授業を行い、反転授業的要素を取り入れ、前回の授業に係る課題の提出⇒「受講者による答え合わせ（プレゼンテーション）⇒授業⇒課題の提示」⇒前回の授業に係る課題の再提出・今回の授業に係る課題の提出（カッコ内を授業で行い、それ以外は時間外学習）という流れで授業を行った。答え合わせの解説並びに授業は、テキストに加え、関連資料を用意して受講生の理解を助けるように努めた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

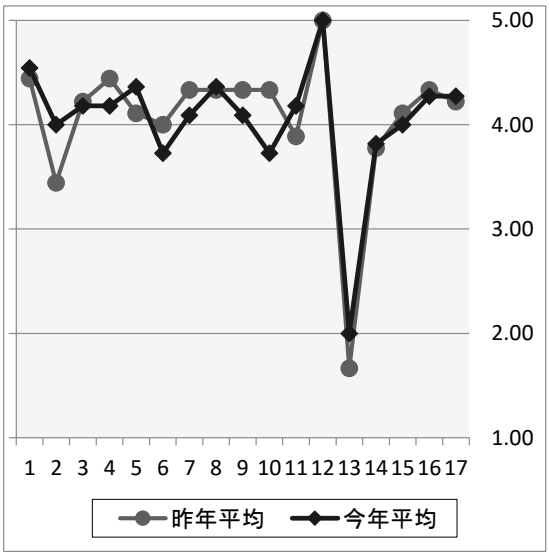
該当なし（昨年度未実施）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

来年度からは「対面授業」を実施することになるが、これまで同様、反転授業的要素を取り入れた授業の流れを行っていきたい。

科　　目	基本会計プログラム演習(1)		
配当年次	1	開講時限	秋月4
受講者数	22	回答者数	11

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.44	4.55	5	5	4
2	3.44	4.00	4	5	3
3	4.22	4.18	5	5	2
4	4.44	4.18	4	5	2
5	4.11	4.36	4･5	5	3
6	4.00	3.73	4	5	2
7	4.33	4.09	4	5	2
8	4.33	4.36	5	5	2
9	4.33	4.09	4	5	3
10	4.33	3.73	4	5	2
11	3.89	4.18	4	5	2
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.67	2.00	1	5	1
14	3.78	3.82	3･5	5	2
15	4.11	4.00	4･5	5	2
16	4.33	4.27	4･5	5	2
17	4.22	4.27	4･5	5	2
回答者数	9	11			



受講生の傾向

ほとんどの受講生が真摯に受講していたと感じ、都合で出席できない場合に事前の許可を得て席に余裕のある火曜日の授業に振り替えて出席する形でフォローする受講生も多かった。毎回のことではあるが、若干名ではあるが、真摯に受講しているとは感じられない受講生もいた。また、IT関連ということもあり、理解度に差が生じていると感じる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

重要ポイントが演習では理解できない学生も少なくなく、板書によって講義内容のポイントや前回の講義から付加される部分を繰り返し説明し、理解における注意点についても繰り返し解説した。同時に、重要となる講義内容を繰り返し、アドバンストとなる部分は紹介に止めるなどして、内容の濃淡をはっきりさせた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

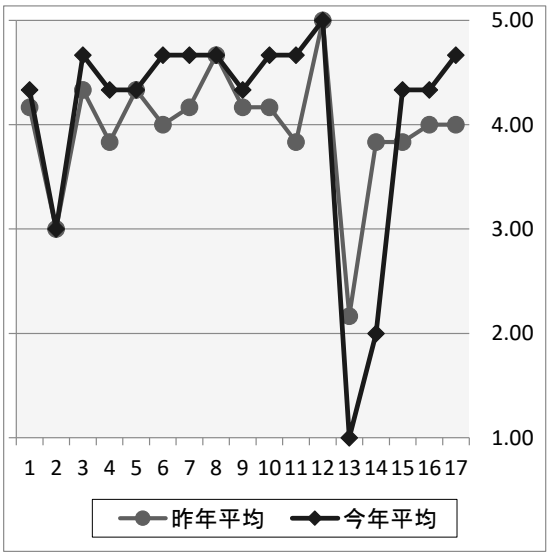
コンピュータを使用した演習を含む授業でオンライン講義が部分的になされたため、その部分の影響は「今後の対応」に含める必要はないと思われる。板書によって講義内容のポイント及び前回授業とのつながりを引き続き明示しつつ、演習時には個々の実施状況を把握しつつ、補足的な説明とともに理解度が低いと思われる箇所については、ポイントを強調して説明し、演習において反映されていることを確認しつつ実施するつもりである。また、授業内容をアレンジしなおし、理解しやすい流れを再構築するつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

コンピュータの処理について、会計や従来の簿記とは異なり理解しづらいところも多いようであるため、基本的な処理の流れ、相違点や変異点を繰り返し説明することを継続しようと考えている。また、授業内容もアドバンストとなる部分は紹介にとどめて基本形の理解を徹底するつもりである。また、引き続き、演習時には個々の実施状況を把握し、補足的な説明やポイントを強調した説明を繰り返し理解の定着に心がけるつもりである。

科　　目	基本会計プログラム演習(2)		
配当年次	1	開講時限	秋火1
受講者数	5	回答者数	3

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.17	4.33	5	5	3
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.33	4.67	5	5	4
4	3.83	4.33	5	5	3
5	4.33	4.33	5	5	3
6	4.00	4.67	5	5	4
7	4.17	4.67	5	5	4
8	4.67	4.67	5	5	4
9	4.17	4.33	5	5	3
10	4.17	4.67	5	5	4
11	3.83	4.67	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.17	1.00	1	1	1
14	3.83	2.00	1	4	1
15	3.83	4.33	5	5	3
16	4.00	4.33	5	5	3
17	4.00	4.67	5	5	4
回答者数	6	3			



受講生の傾向

講義時間中は真摯に受講していたが、火曜1時限であったことと少人数であったことからか、授業開始時間丁度に来室する学生がほとんどであった。また、少人数であることから、演習の進捗状況の把握がしやすく、関連して理解度の把握も非常に行いやすかった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

重要ポイントが演習では理解できない学生も少なくなく、板書によって講義内容のポイントや前回の講義から付加される部分を繰り返し説明し、理解における注意点についても繰り返し解説した。同時に、重要となる講義内容を繰り返し、アドバンストとなる部分は紹介に止めるなどして、内容の濃淡をはっきりさせた。また、月曜4時限でも開講されたことから、講義の進度が一致するように、内容の深度をある程度一致するように留意した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

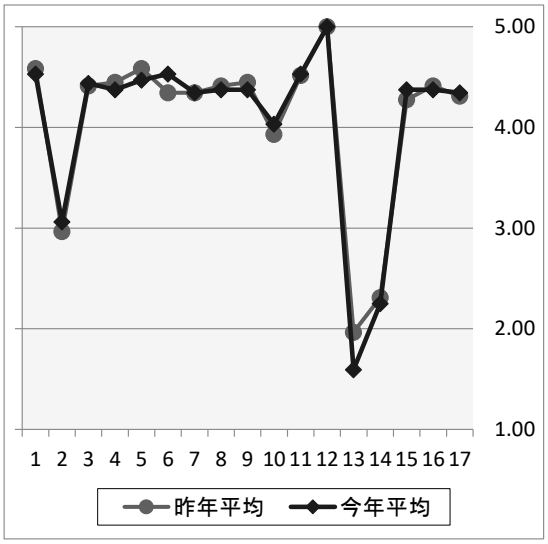
コンピュータを使用した演習を含む授業でオンライン講義が部分的になされたため、その部分の影響は「今後の対応」に含める必要はないと思われる。板書によって講義内容のポイント及び前回授業とのつながりを引き続き明示しつつ、演習時には個々の実施状況を把握しつつ、補足的な説明とともに理解度が低いと思われる箇所については、ポイントを強調して説明し、演習において反映されていることを確認しつつ実施するつもりである。同時に、授業内容をアレンジしなおし、理解しやすい流れを再構築するつもりである。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

コンピュータの処理について、会計や従来の簿記とは異なり理解しづらいところも多いようであるため、基本的な処理の流れ、相違点や変異点を繰り返し説明することを継続しようと考えている。また、授業内容もアドバンストとなる部分は紹介にとどめて基本形の理解を徹底するつもりである。また、引き続き、演習時には個々の実施状況を把握し、補足的な説明やポイントを強調した説明を繰り返し理解の定着に心がけるつもりである。

科　　目	会社経理実務		
配当年次	1	開講時限	秋水5
受講者数	49	回答者数	32

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.59	4.53	5	5	4
2	2.97	3.06	3	5	2
3	4.41	4.44	4	5	4
4	4.45	4.38	4	5	4
5	4.59	4.47	5	5	3
6	4.34	4.53	5	5	4
7	4.34	4.34	4	5	3
8	4.41	4.38	4	5	3
9	4.45	4.38	4・5	5	2
10	3.93	4.03	4	5	3
11	4.52	4.53	5	5	3
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.97	1.59	1	4	1
14	2.31	2.25	2	4	1
15	4.28	4.38	4	5	4
16	4.41	4.38	4	5	3
17	4.31	4.34	4	5	4
回答者数	29	32			



受講生の傾向

1年次の学生が多く、企業の経理全般に対する知識がない人が多い。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

理解の定着を図るため、ほぼ毎回、課題を実施し、次回講義で提出してもらい、学生の自習時間の確保に努めた。

○昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

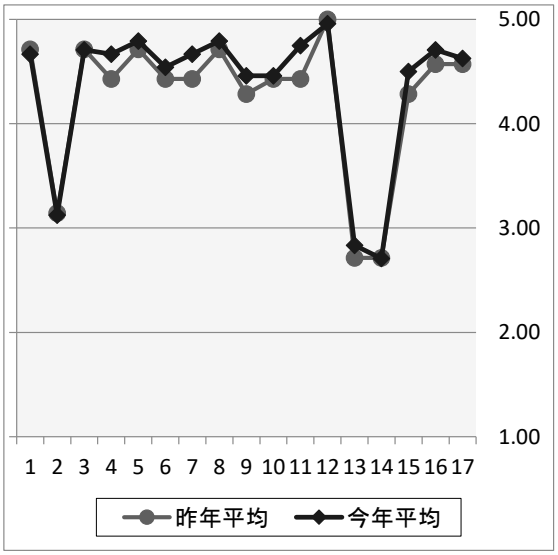
まだ、予習、復習といった受講生自身の勉強時間が少ないようなので、課題等の内容、出し方を工夫しようと思う。

○上記の内容を踏まえた「今後の対応」

課題をほぼ毎回課すことにより、学生の復習の機会を増やせたので、次年度も今年度と同じように実施していきたい。

科　　目	監査事例研究		
配当年次	1	開講時限	秋水3
受講者数	32	回答者数	24

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.71	4.67	5	5	4
2	3.14	3.13	3	4	3
3	4.71	4.71	5	5	4
4	4.43	4.67	5	5	4
5	4.71	4.79	5	5	4
6	4.43	4.54	5	5	3
7	4.43	4.67	5	5	4
8	4.71	4.79	5	5	4
9	4.29	4.46	5	5	3
10	4.43	4.46	5	5	2
11	4.43	4.75	5	5	4
12	5.00	4.96	5	5	4
13	2.71	2.83	2	5	1
14	2.71	2.71	1・2	5	1
15	4.29	4.50	4・5	5	4
16	4.57	4.71	5	5	4
17	4.57	4.63	5	5	4
回答者数	7	24			



受講生の傾向

昨年に比し、顕著な変動は見られなかった。
最も変動が大きかった質問№11授業満足度は、昨年の4.43から今年の4.75へ0.3ポイント上昇している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

質問の時間は授業の最後に確保するよう声掛けを行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

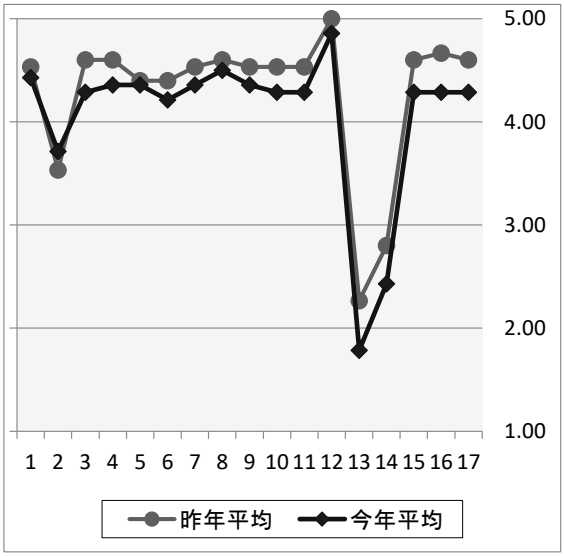
質問の時間は授業の最後に確保する。
来学形式が定着しだした場合、説明フェーズの授業後半に、近くのグループでの「ディスカッション機会」を設定する。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

質問の時間は、授業の最後に確保し、声掛けも行う。
来学形式が定着した場合、説明フェーズの授業後半に、近くのグループでの「ディスカッション機会」を設定し、「リスク評価」と「リスク対応」の案を各グループで話し合わせたい。

科　　目	基本監査プログラム演習		
配当年次	1	開講時限	秋月1
受講者数	23	回答者数	14

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.53	4.43	4	5	4
2	3.53	3.71	4	5	3
3	4.60	4.29	4	5	4
4	4.60	4.36	4	5	3
5	4.40	4.36	4	5	4
6	4.40	4.21	4	5	3
7	4.53	4.36	4	5	4
8	4.60	4.50	4・5	5	4
9	4.53	4.36	4	5	4
10	4.53	4.29	4	5	3
11	4.53	4.29	4	5	4
12	5.00	4.86	5	5	3
13	2.27	1.79	1	5	1
14	2.80	2.43	2	5	1
15	4.60	4.29	4	5	4
16	4.67	4.29	4	5	4
17	4.60	4.29	4	5	4
回答者数	15	14			



受講生の傾向

授業参加度を測る出席率（項目12）においてほぼ100%を達成しており、昨年度と同様に非常に熱心な受講生の傾向が見受けられる。また昨年度と同様にPC実習を対面で実施できたものの、授業評価に関するほぼ全ての項目（項目3～11）において昨年度より悪化した。

また、受講生側の項目においても、授業の予復習（項目13・14）を含め全体的な理解度等（項目15～17）も低下してしまっている。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

監査実施に関する監査基準改訂はなかったため、監査実施に関する基礎概念を纏めた講義資料及びテキストに基づいて作成したスライドと、必要に応じて監査基準や実務指針等の参考資料を配布し、監査実施に関する重要論点を確実に講義の前半で押さえるようにした。

今年度は、監査実施プロセスと内部統制評価に関する理解度を確認するため、3度の課題（掛け仕入取引に関するフローチャートの作成、当該取引に係る内部統制の整備状況評価、ならびに運用評価）を課した。加えて、PCを利用した監査手続（銀行預金・売掛金）を経験するとともに、証憑突合による実証手続の実施、ならびに監査調書の作成を課題とした。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

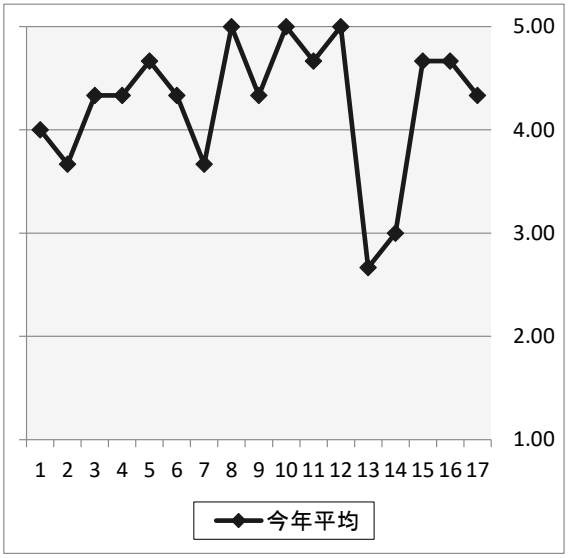
対面による講義に移行したため、ヨリ多くのPCを用いた監査手続の実施と文書化を習得できるような機会を増やしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

監査実施に関する基礎理論の修得とともにそれがPCを用いた監査手続の実施ならびに文書化（監査調書）にどのように反映されるかをヨリ具体的に講義に取り入れることで、授業への参加意欲を向上させたい。

科　　目	アカデミック・ソリューション（富田クラス）		
配当年次	1	開講時限	通隔月5
受講者数	10	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	—	4.00	4	4	4
2	—	3.67	4	4	3
3	—	4.33	4	5	4
4	—	4.33	4	5	4
5	—	4.67	5	5	4
6	—	4.33	5	5	3
7	—	3.67	4	4	3
8	—	5.00	5	5	5
9	—	4.33	4	5	4
10	—	5.00	5	5	5
11	—	4.67	5	5	4
12	—	5.00	5	5	5
13	—	2.67	2	4	2
14	—	3.00	2	5	2
15	—	4.67	5	5	4
16	—	4.67	5	5	4
17	—	4.33	4	5	4
回答者数	—	3			



受講生の傾向

全ての受講生が真摯に受講し取り組んでいたと感じる。学習意欲については、押し並べて高かったと思われるが、それでも意欲的に学習し参加している学生とそうではない学生がいた感じである。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度は不開講であったため、昨年度の授業評価アンケートを踏まえることはできないが、一昨年度に加えて工夫したこととは、できる限り、双方向となるよう、また学生の学習が反映されるようなアウトプットの機会を増やすよう努めた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

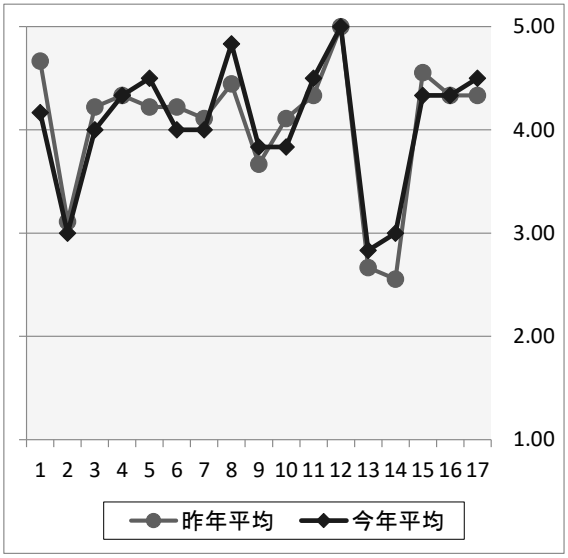
該当なし（昨年度不開講）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

昨年度は不開講であったため、上記の内容を踏まえることはできないが、十分なインプットを促し、そのポイントや方法が伝わるように工夫を講じるつもりである。また、アウトプットやディスカッションについては、より主体的に行えるように課題設定を行い、促進するよう更なる工夫を講じるつもりである。

科　　目	アカデミック・ソリューション（中村クラス）		
配当年次	1	開講時限	通隔木5
受講者数	13	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.17	4	5	4
2	3.11	3.00	3	3	3
3	4.22	4.00	4	4	4
4	4.33	4.33	4	5	4
5	4.22	4.50	4・5	5	4
6	4.22	4.00	4	4	4
7	4.11	4.00	4	4	4
8	4.44	4.83	5	5	4
9	3.67	3.83	4	4	3
10	4.11	3.83	4	4	3
11	4.33	4.50	4・5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	2.67	2.83	3	3	2
14	2.56	3.00	3	3	3
15	4.56	4.33	4	5	4
16	4.33	4.33	4	5	4
17	4.33	4.50	4・5	5	4
回答者数	9	6			



受講生の傾向

13名の受講生は当初、全て税理士志望者であったが、最終的には税理士志望8名、公認会計士志望2名、その他3名となった。本科目では判例分析を学習するが、既修者は1名のみであった。質問No.13と14の結果が昨年度よりも改善している通り、今年度の受講生は初学となる判例分析に真摯に取り組んでいたと思われる。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度に確認できた第一の課題については、第1回講義で最低限必要な引用標記を講義レジュメに記載し、解説した。また、第二の課題については、第2回講義で行ったデモンストレーション時に解説し、その後、受講生の報告の度に繰り返し私見の作り方について指導を行った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

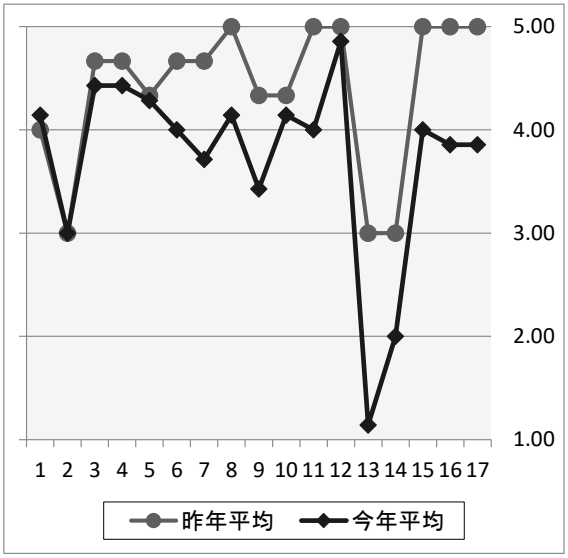
昨年度に確認できた2つの課題に対し、受講生の立場からみると克服するための難度に違いがあるように思われる。そこで、まずは第一の課題である不適切な引用表記を学生に理解させ、適切な引用表記ができるよう指導を行いたい。その上で、次のステップとして、第二の課題である私見の不十分さに対する指導を行いたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引用表記と私見が不十分であるという課題のうち、前者は今年度の方法で改善傾向にあるが、後者はあまり改善されなかった。その原因の1つとして、入手すべき評釈を入手しないまま私見を述べる事例が散見された。次年度は評釈の入手方法を第1回講義に行うとともに、評釈の重要性を繰り返し指導していきたい。

科　　目	アカデミック・ソリューション（松本クラス）		
配当年次	1	開講時限	通隔月5
受講者数	8	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.00	4.14	5	5	3
2	3.00	3.00	3	4	2
3	4.67	4.43	5	5	3
4	4.67	4.43	5	5	3
5	4.33	4.29	4・5	5	3
6	4.67	4.00	4	5	3
7	4.67	3.71	3・4	5	3
8	5.00	4.14	5	5	3
9	4.33	3.43	3	5	3
10	4.33	4.14	5	5	3
11	5.00	4.00	4	5	3
12	5.00	4.86	5	5	4
13	3.00	1.14	1	2	1
14	3.00	2.00	2	3	1
15	5.00	4.00	4	5	3
16	5.00	3.86	3	5	3
17	5.00	3.86	4	5	3
回答者数	3	7			



受講生の傾向

受講生の授業参加意欲を測る出席率（項目12）においてはほぼ90%以上を達成しているが、授業評価におけるほぼ全ての項目（項目3～11）で悪化しており、また演習参加のための予習時間（項目13）と復習（項目14）時間も減少した。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

演習生からの希望を聴取した上で課題に対するアウトプットを効果的に実施できるような演習形式とし、監査論に関する諸論点を自主的に解答させ、演習時間中に全員で検討すると同時に解説を行った。
複数の課題については事前に配布して予習を促し（項目13）と復習時間（項目14）も確保するように努めた。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

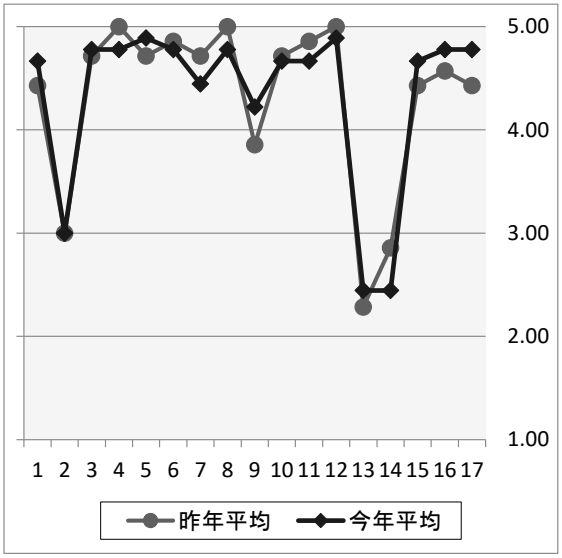
クラウドに共有フォルダを設けることで、演習生側からの課題提出を事前に共有フォルダに提出させ、演習生全員で点検したい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

課題を用いたアウトプット中心の演習が参加演習生にとってモラールの低下をもたらした可能性が高いため、解答中心の演習だけでなく監査論の基礎概念のインプットのための措置を講じたい。

科　　目	アカデミック・ソリューション（三島クラス）		
配当年次	1	開講時限	通隔火5
受講者数	9	回答者数	9

質問№.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.43	4.67	5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.71	4.78	5	5	4
4	5.00	4.78	5	5	4
5	4.71	4.89	5	5	4
6	4.86	4.78	5	5	4
7	4.71	4.44	5	5	3
8	5.00	4.78	5	5	4
9	3.86	4.22	4	5	3
10	4.71	4.67	5	5	4
11	4.86	4.67	5	5	4
12	5.00	4.89	5	5	4
13	2.29	2.44	3	4	1
14	2.86	2.44	2	4	1
15	4.43	4.67	5	5	4
16	4.57	4.78	5	5	4
17	4.43	4.78	5	5	4
回答者数	7	9			



受講生の傾向

今回はこの授業の受講生は9人であってやや多い印象があるが、その全員が公認会計士を目指しているというのもあり、授業には熱心かつまじめに取り組んでいた。また、予習・復習もしっかりと行っていた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

今回の授業においては、いまだコロナ禍の影響もあって、受講生によるグループ学習は回避し、教員と受講生との対話という形式を中心とする組立で授業を行った。今回の授業で特に工夫したこととしては、対話の中でもなるべく考えて答えてもらうよう心掛けた。すなわち、対話においても即答が可能なもの、たとえば、知っているか知らないかというものよりもむしろ、本人であれば答えを導き出せるような内容について、じっくり考えてもらって、解答してもらうということを心掛けた。さらに、解答が出ない場合であっても、何らかのヒントを与えて、自らが考えて答えを導き出すという習慣を身につけてもらうということを意識した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

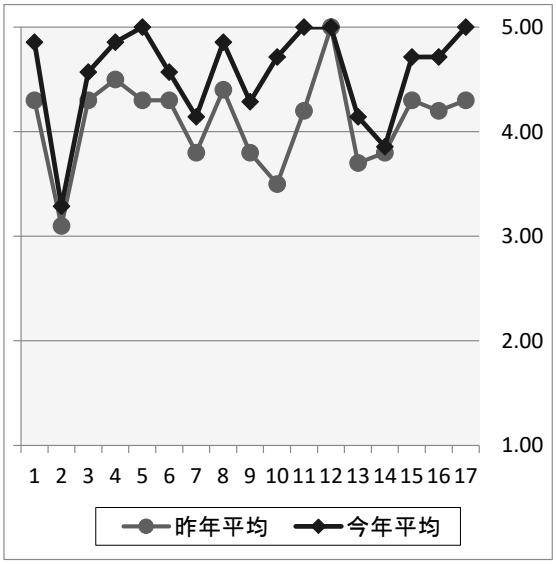
今後も隔週1年間開講という仕組みをうまく利用していきたい。学生の学力の伸びというものに授業を合わせることができるし、夏季休暇期間もまた指導の一環ととらえることもできる。今後はより一層の学生の学習進度やレベルに配慮し、対応でるようにしていきたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後の対応としては、大学の授業方針としてこれまでのコロナ禍対応の授業方法は解除されるものであるので、ソリューション授業としてふさわしい授業形態に戻したい。具体的には、受講生同士による意見交換および議論その結果としての結論としてのまとめなどを、グループ学習によって実行したい。

科　　目	論文指導(基礎)(中村クラス)		
配当年次	1	開講時限	秋月5
受講者数	9	回答者数	7

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.30	4.86	5	5	4
2	3.10	3.29	3	4	3
3	4.30	4.57	5	5	4
4	4.50	4.86	5	5	4
5	4.30	5.00	5	5	5
6	4.30	4.57	5	5	4
7	3.80	4.14	5	5	3
8	4.40	4.86	5	5	4
9	3.80	4.29	4・5	5	3
10	3.50	4.71	5	5	4
11	4.20	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	3.70	4.14	5	5	3
14	3.80	3.86	3	5	3
15	4.30	4.71	5	5	3
16	4.20	4.71	5	5	4
17	4.30	5.00	5	5	5
回答者数	10	7			



受講生の傾向

受講生9名は全て、税理士試験の税法科目免除を希望していた。受講者数は昨年度の13名から9名に減少しており、質問No.10(クラスの規模)の結果が改善している。受講生は真面目に取り組んでいたが、結果として2名が論題設定に至らなかった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

判例分析を早い段階で理解させるべく、アカデミック・ソリューションの報告を本科目よりも早いペースで行うことにした。次に、受講生が論題設定できるように、最高で5回の報告機会を提供した。また、報告者への質問は、複数グループによる形式を採用した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

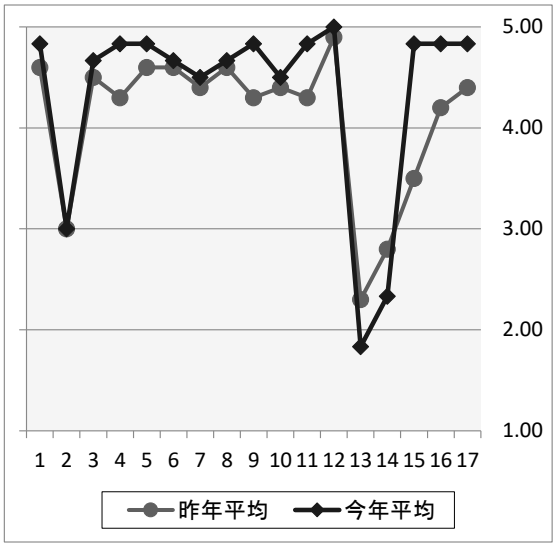
論題設定に至らなかった受講生が2名いた。一人は、研究テーマを5回全て異なって報告した受講生である。もう一人は、判例分析ができず、解釈論自体が理解できなかった学生である。前者は昨年度からの課題であるが、後者は、アカデミック・ソリューションでの学習を習得できなかった結果である。従って、後者への対応として、隔週通年科目であるアカデミック・ソリューションとの連携を意識し、指導を行いたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度も2名が論題設定に至らなかったが、その原因としては先行研究者の論文をきちんと理解できなかった点にあると思われる。次年度も引き続き、アカデミック・ソリューションとの連携を行いつつ、先行研究者の論文理解に資する情報を提供し、指導を行っていきたい。

科　　目	実践会計プログラム演習		
配当年次	2	開講時限	秋水2
受講者数	15	回答者数	6

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.60	4.83	5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.50	4.67	5	5	4
4	4.30	4.83	5	5	4
5	4.60	4.83	5	5	4
6	4.60	4.67	5	5	4
7	4.40	4.50	4・5	5	4
8	4.60	4.67	5	5	4
9	4.30	4.83	5	5	4
10	4.40	4.50	4・5	5	4
11	4.30	4.83	5	5	4
12	4.90	5.00	5	5	5
13	2.30	1.83	1	4	1
14	2.80	2.33	1・3	4	1
15	3.50	4.83	5	5	4
16	4.20	4.83	5	5	4
17	4.40	4.83	5	5	4
回答者数	10	6			



受講生の傾向

受講生の内訳は、公認会計士志望者7名（うち論文試験合格者2名）、USCPA志望者1名、税理士志望者3名、国税専門官志望者1名、証券会社、一般企業の経理への就職希望者など3名の計15名で、うち留学生は3名であった。本講義は実際の会計ソフトである「勘定奉行」を利用した実践的な演習講義であり、受講理由は、会計システムに対する知識を深めたい、実際の会計ソフトを利用してみたい、会計データの活用方法を学びたい、パソコンのスキルを学びたいなど、「勘定奉行」を実際に利用できる点及び実践的な内容を取り扱う点に魅力を感じている者が多数であり、全体的に出席率も良好で、講義内の演習にも熱心に取り組んでいた。また、会計ソフトやパソコンの操作やエクセルの算式などを受講生同士で教えあう姿もよく見受けられた。演習課題は、PC操作・会計ソフトの利用などを伴うため、なるべく講義時間内に終了する程度の分量としており、実際に講義終了後同日中に提出が完了することがほとんどで、提出状況も良好であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

「勘定奉行」を利用して仕訳から決算書作成までの一連の過程を学ぶほか、作成した会計データのエクセルでの活用方法、エクセルでのキャッシュ・フロー計算書の作成、中期経営計画の作成など、より実践的な内容も演習に取り入れ、また、できるだけ身近な事例を取り上げ、エクセルを利用した利益計画の作成・株価の算定などの演習も行った。受講生は会計ソフトやエクセルの財務データを扱う機会がほとんどなく、また、PC操作の習熟度は個人差があるため、講師が受講生の間を巡回し、受講生のPCを逐次確認しながら、理解度、進度などを確かめつつアドバイスし、コミュニケーションを図った。受講生も、講師が巡回すると質問等がしやすいようで、積極的な質問も多かった。課題については翌週にPC操作をしながら解説を行い、受講生の復習に活用できるようにした。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

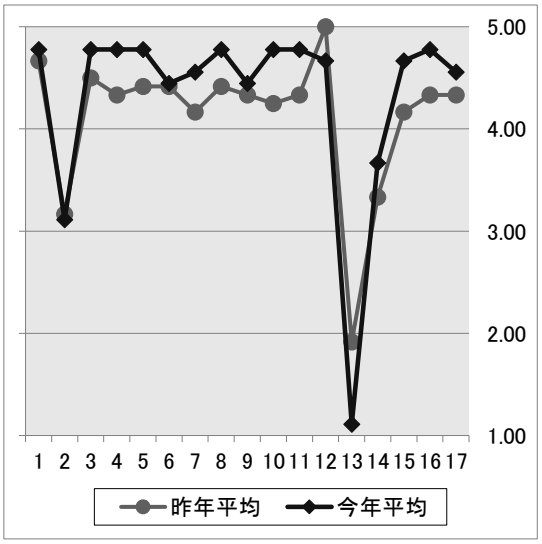
該当なし（担任者変更）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後も「勘定奉行」を使用するという本講義の特色を生かし、経理業務の一連の作業を演習にて実施するとともに、受講生がより興味を持てるよう実践的な内容も取り扱う。また、PC操作等については、引き続き受講生の間を巡回し、各々の状況に応じてアドバイスし、質問等に対応するなど、受講生の理解に努める。

科　　目	ディスクロージャー実務		
配当年次	2	開講時限	秋木2
受講者数	21	回答者数	9

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.78	5	5	4
2	3.17	3.11	3	4	3
3	4.50	4.78	5	5	4
4	4.33	4.78	5	5	4
5	4.42	4.78	5	5	4
6	4.42	4.44	5	5	3
7	4.17	4.56	5	5	4
8	4.42	4.78	5	5	4
9	4.33	4.44	5	5	3
10	4.25	4.78	5	5	4
11	4.33	4.78	5	5	4
12	5.00	4.67	5	5	4
13	1.92	1.11	1	2	1
14	3.33	3.67	3・5	5	1
15	4.17	4.67	5	5	3
16	4.33	4.78	5	5	4
17	4.33	4.56	5	5	3
回答者数	12	9			



受講生の傾向

受講生の内訳は、公認会計士志望者9名、会計に関する専門知識の習得を目標とする者9名、国税専門官志望者1名、税理士志望者1名、USCPA志望者1名であり、うち留学生は5名であった。進路の希望は、監査法人、公務員等のほか、金融機関、IT企業、コンサル等（内定を含む）であった。本講義の履修理由は、ディスクロージャー制度に関する知識の習得や、職業会計人としての実務面の知識の習得が多数であり、全体的に出席率も高く受講態度等も良好であり、課題についてもほぼすべて提出されていた。ただ、課題に丁寧に取り組み、分析を行い、多角的な検討を加えたうえで自己の結論を導く者が見られる一方、複眼的な検討を行わず、簡単な主張で完結しているものもあり、講義・課題の内容の分析・考察などに差が見受けられた。また、一部の留学生にとっては、言語が障壁となり、講義の理解や課題に苦戦している様子であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

講義では質疑応答を重視するとしていたが、受講生からの積極的な質問はあまりなかったため、できるだけ受講生に質問し回答してもらうようにした。また、テーマを示し、グループ内で討議し全体に発表する機会を複数回設定し、受講生同士の意見交換、見解のとりまとめ、発表等を通じて各受講生が積極的に関わり、また多面的な検討を行う機会を設けた。講義で扱う内容に関しては、受講生が興味をもてるように、講義や課題の内容に関連する直近の新聞や雑誌の記事等を多数紹介するとともに、現在進行形で行われている制度改革を紹介した。実際、ディスクロージャー制度に関する将来の展望を各自検討してもらったことは、多くの受講生にとって興味深かったようである。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

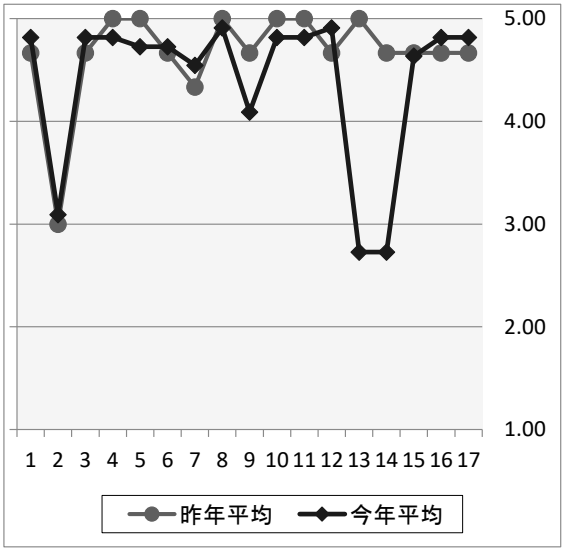
該当なし（担任者変更）

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

引き続き、受講生が興味をもてるように直近の事例を取入れながら、講義を進めていく予定である。また、グループディスカッション等の機会を複数回設定し、多角的な検討や、主体的に取り組む姿勢などを促していくように努める。

科　　目	プロフェッショナル・ソリューション（三島クラス）		
配当年次	2	開講時限	通隔木5
受講者数	12	回答者数	11

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.67	4.82	5	5	4
2	3.00	3.09	3	4	3
3	4.67	4.82	5	5	4
4	5.00	4.82	5	5	4
5	5.00	4.73	5	5	4
6	4.67	4.73	5	5	4
7	4.33	4.55	5	5	3
8	5.00	4.91	5	5	4
9	4.67	4.09	5	5	3
10	5.00	4.82	5	5	4
11	5.00	4.82	5	5	4
12	4.67	4.91	5	5	4
13	5.00	2.73	1	5	1
14	4.67	2.73	1	5	1
15	4.67	4.64	5	5	3
16	4.67	4.82	5	5	4
17	4.67	4.82	5	5	4
回答者数	3	11			



受講生の傾向

今年度は12人の受講者があり、若干多い人数であったが、授業にはすべて出席しており、予習・復習も丁寧に行われていた。また、授業進度やレベルについてもちょうど良いようであった。12人の受講生のすべてが、公認会計士を目指しているというものではなく（3名は税理士志望）、それぞれの目的意識を明確にもっており、授業に対して真面目にかつ熱心に取り組んでいた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

本年度は、受講生は12名と多く、また受講の目的も公認会計士志望者と税理士志望者とで異なっていることから、クラス分けをして授業を行った。そうすることによって、公認会計士試験合格や論文の執筆などの目的を踏まえた、効率的な授業を行うことができたと感じている。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

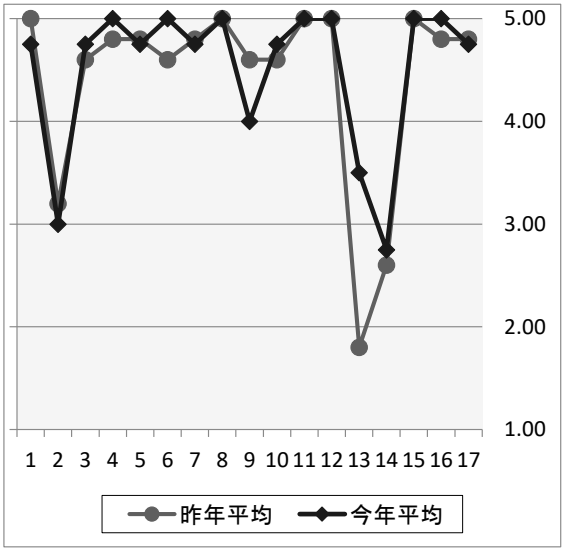
今年度は各受講生に学習目的や学力レベルに大きく差があったが、受講生が5名という少人数であったため、個別的な対応が可能な状況であった。しかしながら、受講生が従来と同様10名程度である場合には、クラス分けの工夫などを考えなければならない。今後も、公認会計士試験合格や論文の執筆などの目的を踏まえて、効率的な授業を心掛けるとともに、それぞれの学習レベルや進度に合わせた授業を行う必要があるが、通年授業という1年間の授業期間の中で、学生の学力や学習進度は変化していくものであるので、この点も把握できるよう学生に目を向け、コミュニケーションを密にとっていくことが必要となる。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今後の対応としては、まずは今年度と同様に、受講生の学習目的に応じてクラス分けをすることを継続したい。また、大学の授業方針としてこれまでのコロナ禍対応の授業方法は解除されるものであるので、ソリューション授業としてふさわしい授業形態に戻したい。具体的には、受講生同士による意見交換および議論その結果としての結論としてのまとめなどを、グループ学習によって実行したい。

科　　目	プロフェッショナル・ソリューション（松本クラス）		
配当年次	2	開講時限	通隔金5
受講者数	6	回答者数	4

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.75	5	5	4
2	3.20	3.00	3	3	3
3	4.60	4.75	5	5	4
4	4.80	5.00	5	5	5
5	4.80	4.75	5	5	4
6	4.60	5.00	5	5	5
7	4.80	4.75	5	5	4
8	5.00	5.00	5	5	5
9	4.60	4.00	4	5	3
10	4.60	4.75	5	5	4
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	1.80	3.50	3	5	3
14	2.60	2.75	3	3	2
15	5.00	5.00	5	5	5
16	4.80	5.00	5	5	5
17	4.80	4.75	5	5	4
回答者数	5	4			



受講生の傾向

受講生の授業参加度（項目12）は非常に高く昨年度に続き積極的な演習への参加が認められる。また演習のための予習（項目13）及び復習時間（項目14）も改善している。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

演習生の希望により監査論に関する諸論点を自主的に解答させ、演習時間中に全員で検討する形態とした。このため担当者個々が課題に対する分析・資料作成・プレゼンテーション・ディスカッションを行えるように、複数の課題を事前に配布した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

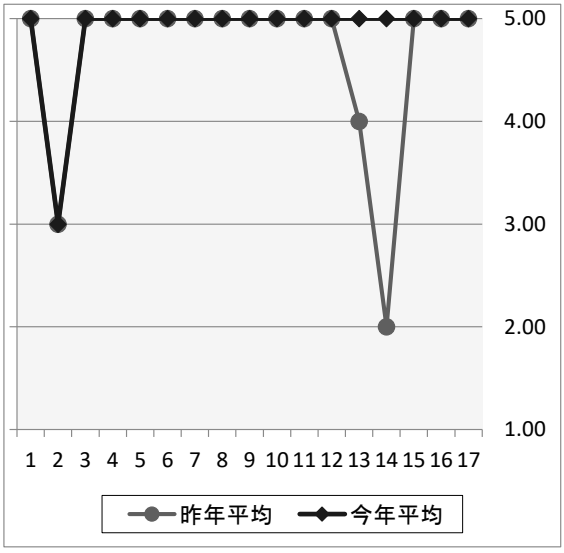
SNS及びクラウドの共有フォルダにおいて課題と各自の解答を共有することで、ヨリ効果的に学習できるようにしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

論述指導を必要とする受講生について、演習中の課題への解答を添削指導するために別の機会を設けることで論文作成能力を高めるようにしたい。

科　　目	プロフェッショナル・ソリューション（加藤クラス）		
配当年次	2	開講時限	通隔木5
受講者数	1	回答者数	1

質問№	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	5.00	5	5	5
2	3.00	3.00	3	3	3
3	5.00	5.00	5	5	5
4	5.00	5.00	5	5	5
5	5.00	5.00	5	5	5
6	5.00	5.00	5	5	5
7	5.00	5.00	5	5	5
8	5.00	5.00	5	5	5
9	5.00	5.00	5	5	5
10	5.00	5.00	5	5	5
11	5.00	5.00	5	5	5
12	5.00	5.00	5	5	5
13	4.00	5.00	5	5	5
14	2.00	5.00	5	5	5
15	5.00	5.00	5	5	5
16	5.00	5.00	5	5	5
17	5.00	5.00	5	5	5
回答者数	1	1			



受講生の傾向

受講生は、会計専門職としてのスキルを高めるため、自ら進んで課題を提案し、積極的に取り組んでいた。ディスカッションにも意欲的であった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

会計専門職として身に付けておきたいスキルをいくつかの課題に分け、それを受講生の希望に応じて再構築しながらプレゼンテーションとディスカッションを繰り返し行った。とくに、会計基準の考え方や決算資料及び各種報告書を分析して検討するなど、理論と実務の両方について幅広く取り扱った。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

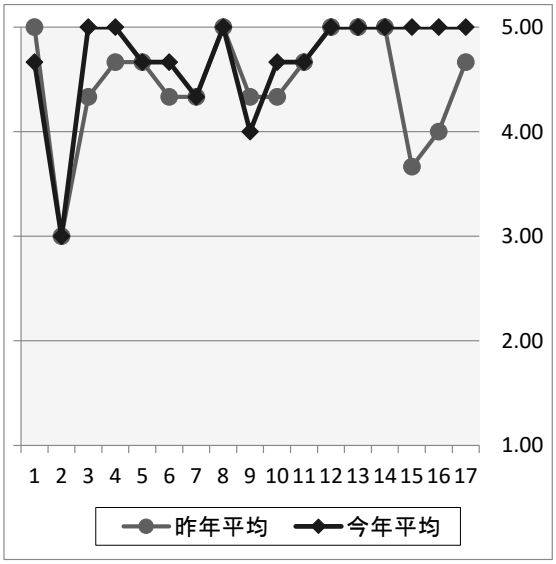
今年度のアンケート結果は概ね高いポイントを得ており、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度のアンケート結果は概ね高いポイントを得ており、全体的な講義展開としては良い感触を得ている。次年度も継続することにしたい。

科　　目	論文指導(実践)(中村クラス)		
配当年次	2	開講時限	通年火5
受講者数	5	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	5.00	4.67	5	5	4
2	3.00	3.00	3	3	3
3	4.33	5.00	5	5	5
4	4.67	5.00	5	5	5
5	4.67	4.67	5	5	4
6	4.33	4.67	5	5	4
7	4.33	4.33	4	5	4
8	5.00	5.00	5	5	5
9	4.33	4.00	3・4・5	5	3
10	4.33	4.67	5	5	4
11	4.67	4.67	5	5	4
12	5.00	5.00	5	5	5
13	5.00	5.00	5	5	5
14	5.00	5.00	5	5	5
15	3.67	5.00	5	5	5
16	4.00	5.00	5	5	5
17	4.67	5.00	5	5	5
回答者数	3	3			



受講生の傾向

受講生は5名であり、解釈論4名、立法論1名であった。質問No.15～17の結果の通り、受講生は本科目を通じて多くの学びを得たようである。なお、受講生1名が修論未完成となった。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

修論完成に向けたスケジュールとして、春学期までに仮章立ての完成、11月頃までに新規性獲得を目標とした。また、受講生には必ず報告レジュメを作成させることで、昨年度に把握した執筆面の問題に対処した。報告者への質問については、2グループに分けるグループワークの方式を採用した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

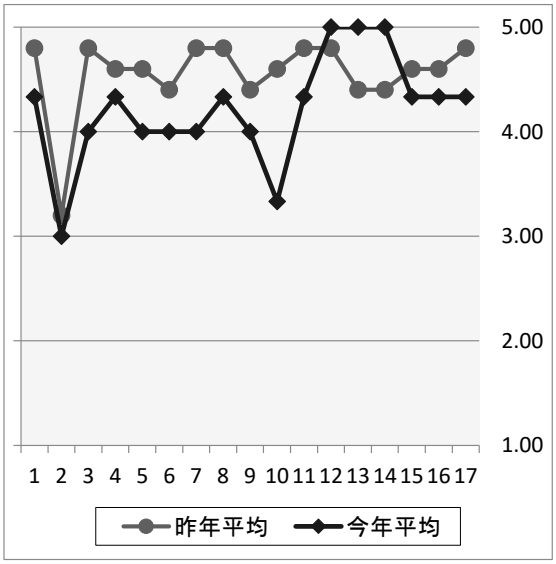
2名の修論未完成の原因は、M2での修論テーマ変更と論理的な長文が書けないことであった。前者は提出期限までのスケジュール管理が大切である点を受講生に理解させる必要がある。後者は、口頭でのやり取りと実際の執筆とは違いがある点を受講生に理解させる必要がある。

〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

今年度の1名の修論未完成の原因は、質疑応答が不十分で、論理的な長文が書けない点にあった。対応としては、毎回の報告にレジュメを作成させることが重要と考える。なぜなら、当該受講生と修論を完成させた受講生との明確な違いは、その点にあったためである。

科　　目	論文指導(実践)(中村クラス)		
配当年次	2	開講時限	通年金5
受講者数	5	回答者数	3

質問No.	昨年平均	今年平均	最頻値	最高点	最低点
1	4.80	4.33	5	5	3
2	3.20	3.00	3	3	3
3	4.80	4.00	3・4・5	5	3
4	4.60	4.33	5	5	3
5	4.60	4.00	3・4・5	5	3
6	4.40	4.00	3・4・5	5	3
7	4.80	4.00	3・4・5	5	3
8	4.80	4.33	5	5	3
9	4.40	4.00	3・4・5	5	3
10	4.60	3.33	1・4・5	5	1
11	4.80	4.33	5	5	3
12	4.80	5.00	5	5	5
13	4.40	5.00	5	5	5
14	4.40	5.00	5	5	5
15	4.60	4.33	5	5	3
16	4.60	4.33	5	5	3
17	4.80	4.33	5	5	3
回答者数	5	3			



受講生の傾向

受講生は5名であり、全て解釈論であった。受講生は、質問No.13と14の結果の通り、報告レジュメを毎回作成するなど、時間をかけて修論に取り組んでいた。その結果として、受講生5名全員が修論を完成することができた。

昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、今回の講義で工夫したこと・留意したこと

昨年度に把握した2つの問題点は、今年度の受講生には該当しなかった。ただ、研究が進むにつれて、論題を若干変更させていく指導を行った。また、修論完成までのスケジュールを第1回講義で提示し、受講生に進捗管理の重要性を認識させた。報告者への質問は、2グループによるグループワーク形式を採用した。

今後の対応

〇昨年度の授業評価アンケートで記載した「今後の対応」

2名の修論未完成の原因のうち、前者(修論テーマが決まらないこと)については、M1配当の論文指導(基礎)で対応したい。また、後者(判例分析ができないこと)については、M1配当のアカデミック・ソリューションで対応したい。

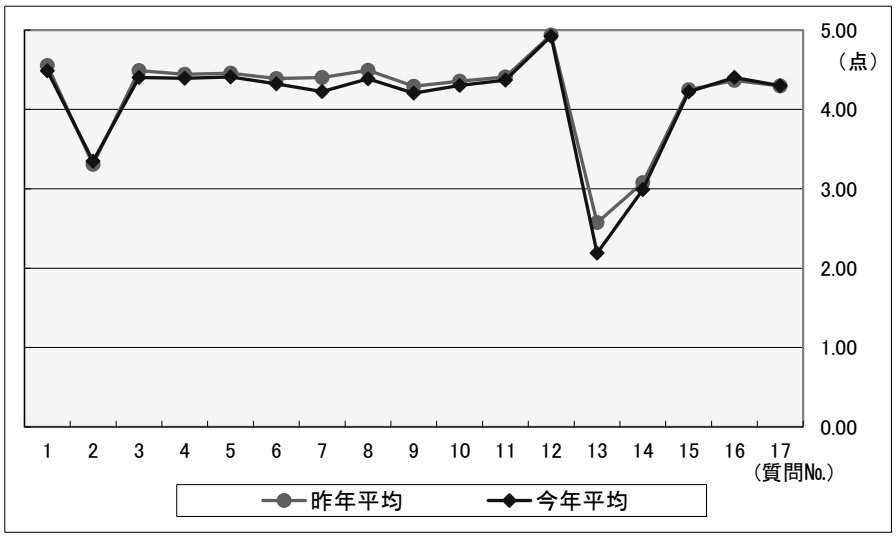
〇上記の内容を踏まえた「今後の対応」

火曜クラスと異なり、金曜クラスは全員が修論完成に至った。その違いは、金曜クラスの受講生は全て、報告レジュメをきちんと作成し臨んでいた点である。次年度の指導では、報告レジュメを作成する重要性を受講生に認識させ、その上で、質疑応答を実施し、修論完成に向けた指導を行っていきたい。

Ⅲ-(3). 2022 年度授業評価アンケート総括

総 括

質問No.	昨年平均	今年平均
1	4.55	4.49
2	3.31	3.35
3	4.49	4.40
4	4.44	4.39
5	4.46	4.41
6	4.39	4.32
7	4.40	4.23
8	4.49	4.39
9	4.29	4.21
10	4.36	4.30
11	4.41	4.37
12	4.94	4.92
13	2.57	2.19
14	3.08	2.99
15	4.25	4.22
16	4.37	4.40
17	4.30	4.30
回答者数	633	629



2022年度は、春学期の授業開始時から、感染症対策を講じながらの対面授業が実施できた。その点で春学期の半分がオンライン授業を余技なくされた2021年度に比べて平常に戻ったといえる。授業評価の結果は、ほぼ2021年度と同等のレベルであった。

当研究科では、オンライン授業においても授業の質の維持を図るべく努力を行ったため、オンライン、対面に関わらず同等の質が維持できていることを示しているものと思われる。全般的には、項目12及び13を除き4点台の高い評価が得られた（項目2については3点台であるが、これは授業スピードが丁度良いことを示している、項目12及び13については下記参照）。全般的な満足度を問う項目11でも評点4.37(昨年4.41)が得られた。

個別項目の評価の詳細を見てみると、大多数の項目について昨年度の評価を僅かながら下回る結果となった。昨年を上回った評価項目は項目16（この授業を通じて、職業会計人に必要な知識が深まった、能力が高まったと感じましたか）が4.37⇒4.40に向上したことを除けば、どの項目も若干評価が下回っている。特に、評価項目13（この授業についての予習を、毎回どれくらいしましたか）は、昨年2.57であったところ、2.19に低下していた。

これらの要因を分析して次年度以降の授業改善に役立てるべきと考えられる。
まず、評価項目13の詳細を見てみると、平均点が1点台となっている科目が多い（基本科目にも見られる）。学習効果を上げる上で改善策が必要である。また、項目2は3.35(昨年3.31)となっており、授業のスピードを早いと感じる受講生が若干多かったことが窺える（特に春学期）。それ以外の評価項目の点数は昨年より微減しているものの概ね同等といえる水準と考えられる。

また、春学期と秋学期を比べてみると、相対的に秋学期の方が評価が高かった（項目8（教員は、学生からの質問に的確に対応しましたか）、項目11（満足度）、項目15（この授業に触発されてさらに深く学習したいと思いましたか））。相対的に秋学期の方が1クラス当たり受講者数が少ないことによるものと推定される。春と秋の受講者数の平準化も課題と考えられる。

以上を総合すると、2022年度は、対面授業に復帰した直後の授業であったことから、講師も受講者も元のペースに戻すことに苦慮しつつ、高い水準の評価を維持した点で評価できる。一方で、元々低評価傾向にあった項目13（予習）、14（復習）の水準がさらに低下した。従って、改善すべき点としては、これらの点数が低下した科目毎に原因を分析し、対策を講じることが望まれる。

それから、もう一つ改善すべき点は、授業評価アンケートの実施方法である。回答者数が受講者数を大きく下回っている科目があり、受講者の評価を十分反映できているかどうかについて課題が残る。受講者がごく少人数の場合に率直な評価が言いにくいということもあるかもしれない。

今後は、授業評価アンケートの実施方法についても改善策を講じていく。

Ⅳ．組織的な研修等

2022 年度　関西大学大学院会計研究科セミナー開催一覧

■客員教授講演会（新入生指導行事）※オンライン開催　　[2022 年 5 月 11 日(水)開催]

◇元国際会計士連盟会長／元日本公認会計士協会会長

藤沼亜起氏(客員教授)

演題「目指そう・挑戦しよう　会計プロフェッションへの道」

■会計研究科 FD 懇談会　※オンライン開催　　[2022 年 7 月 27 日(水)開催]

テーマ「コロナ禍におけるオンライン教育の振り返り(専任教員対象)」

■会計研究科 FD 懇談会　※対面開催　　[2022 年 9 月 20 日(火)開催]

テーマ「梅田キャンパス授業担当者説明会(非常勤講師対象)」

■客員教授講演会　※オンライン開催　　[2023 年 2 月 13 日(月)開催]

◇慶応義塾大学名誉教授

竹中平蔵氏(客員教授)

演題「激変する世界と日本経済」

■客員教授講演会（入学前教育指導）　　[2023 年 2 月 24 日(金)開催]

◇　有限責任あずさ監査法人　専務理事/大阪事務所長

原田大輔氏(客員教授)

演題「監査を取り巻く環境変化と求められる人材」

藤沼亜起 客員教授講演会

日本公認会計士協会元会長及び国際会計士連盟(IFAC)元会長

~目指そう・挑戦しよう 会計プロフェッションへの道~

会計専門職大学院では、2022 年度入学生を対象とした新入生行事の一環として、日本公認会計士協会元会長及び国際会計士連盟（IFAC)元会長の藤沼亜起客員教授のオンライン講演会を開催します。

■日時：2022 年 5 月 11 日（水）
１４：４０～１６：１０

■演題：目指そう・挑戦しよう
会計プロフェッションへの道

■実施方法：オンライン（ZOOM）
※講演会当日の URL はインフォメーションシステムでお知らせします。

■対象：会計研究科新入生

講師 藤沼亜起 氏
関西大学会計専門職大学院
客員教授

＜お問合せ先＞
会計専門職大学院
電話 06-6368-1121（代表）
E-Mail kaikei@ml.kandai.jp

関西大学会計専門職大学院　客員教授講演会

竹中平蔵 客員教授講演会

慶應義塾大学名誉教授

「激変する世界と日本経済」

元国務大臣で、総務大臣や郵政民営化担当大臣等を歴任された
竹中平蔵客員教授のオンライン講演会を開催します。
学生及び教職員の皆様のご視聴をお待ちしております。

■日　　時：2023年2月13日(月)
14：30～16：00

■実施方法：オンラインで開催します。
リンク先等の詳細については、
申込時にお知らせします。

■申　込：2月6日(月) 17時までに
以下のQRコードからお申込ください。
（定員150名・先着順）

＜お問合せ先＞
関西大学会計専門職大学院
電話 06-6368-1121（代表）
Mail：kaikei@ml.kandai.jp

主催：関西大学　会計専門職大学院

原田大輔 客員教授講演会

有限責任 あずさ監査法人　専務理事　公認会計士

会計専門職大学院では、2023 年度入学予定者を対象とした入学前指導の一環として、有限責任 あずさ監査法人 専務理事の原田大輔客員教授をお招きし、講演会を開催します。

公認会計士を目指す学部生の聴講も歓迎しますので、多数の方のご来聴をお待ちしています。

■日時：2023 年 2 月 24 日（金）
14：30～16：00

■場所：第 2 学舎 2 号館 5 階 507 教室

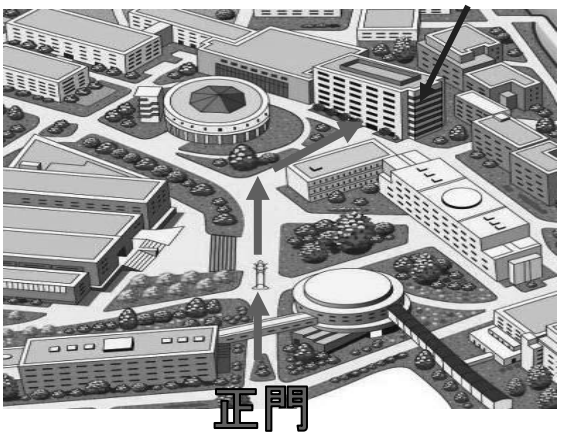
■演題：監査を取り巻く環境変化と
求められる人材

■対象：会計研究科入学予定者・在学生
公認会計士を目指す学部生

■*事前申込は不要です。*

＜会場案内図＞

第2学舎2号館
5階　C507教室



講師　原田大輔　氏
関西大学会計専門職大学院
客員教授

＜お問合せ先＞
会計専門職大学院
電話 06-6368-1121（代表）
E-Mail kaikei@ml.kandai.jp

関西大学大学院会計研究科（会計専門職大学院）

〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番３５号

電話　（０６）６３６８－１１２１（代表）

Fax　（０６）６３６８－０２４８